筆にて上るかトあり。披きみれば、元結を包みたる紙の裏へ、

今晩は藥師樣ゆゑ、御首尾も好かるべく存候。日が暮れてから、櫓櫂屋にて御待申候。めで度〻。

とあり。今朝中の間にて姑、才三に襟を剃らせたる時、ちらりと見たる事もあり。元結を包みし紙といひ、さては才三が文を最前湯に入りし時こゝへ落したるならん、今日は旦那達二人の留守、歸も遲きとあれば、今宵藥師へ參詣に出るならば彌〻違なし、此文を落したと心付かば、嘸かし尋ねべし、人にはいはれず苦しからん、さればとて悪い文言ゆゑ、拾ひましたとやられもせず、此所へ置かば、外の者の手に入らんも知れず、仕樣もあらんと心にをさめ、帶の紵目の糸を嚙切りて、差込み置きて、風呂に入りけり。

二段

かくて其夜、夜食濟みて後、おしやく、悪玉下女氣に入りのおとげを呼び、「藥師樣へ行くからおのし供をしや。三太を連れるには及ばぬよ」「はい、三太はお店の用で何處へか行きました」「はア左樣か。お雛お土產を何ぞおねだり」といふ。お雛心にさてはと思ひ、心ではさげすみながらそしらぬ顏にて、「何ぞ小な鉢植を下さいまし」「あい〳〵」と支度とゝのへ、おとげを供にぶら提灯、内から直におこそ頭巾、勝手口より立出でけり。

三段

此所は櫓櫂屋といふ船宿の奥二階、髮結才三年は二十三、芝居でするやうな男振、廣棧の羽織、廣棧の小袖、太織縞の下著、本博多の帶、是は今宵待人よりの仕著なり。火鉢へ鴨の鍋をかけ、船宿の女房と酒飲んで居る。そも〳〵此才三といふは、上總にて家來三四人使ふ程の二番息子なりしに、女狂にて親の勘當を受け、髮結とはなりけるなり。されば、斯樣に身裝を飾れば人柄よく、町内を廻る髮結とは見えず。去年のえびす講の時の茶番に、鬘をかけてお三輪を踊りたる美しさ。それからおしやくが思種、始は三筋の糸なりしゆゑ、捻が戻りて斯る人でなしをしけるなりけり。船宿の女房おかぢ、「才さん、昨日つけた白鹿だが飲めるかえ」「道理で好いと思つた。まだ何ぞ來るかへ」「あい、刺身と大平を言付けやした。今彼方がお出なさつてから取りにやりませう」「なに好いやな。私が食べると嬉しがるわな」「おや〳〵、それまで聞けば澤山だよ」といひつゝ、箸を入れて鍋の鴨を挾む處へ、下女梯子の口から、「もし萬福屋の番頭さんがお出なさりました。泥醉さ」女房「今往くよ」と鴨をむしや〳〵食べながら才三が酌で飲み、才三へさして下へ行きけり。

四段

おかぢ、足早に梯子を下りて、「おや〳〵善六様、大分春めいたお顔で御座りますね」といひつつ、善六が連れて來た店の抱に對ひ、「親方さんお久しう、能くお出なされました。これお茶を上げたか」善六「これ嚊衆、聞いて下され」おかぢ「其お話は後で聞きませう、何故お出なさいませんえ。今朝も彼の子の處からお文が來て居ます」と立たんとするを、善六「いやも、其文見るに及ばぬ。これ聞き給へ、今日は旦那の名代に仲間内の無盡に往つた處が、此無盡は始からむづかしいと見た故、旦那が斷れというたを、私がいふには、仲間の事なれば斷るが氣の毒と、私がすゝめて去年の暮が親取、春一度かけて今日が三度目、此三吉を連れて旦那の名代に往つた處が、十九番のきりわけで百兩の當籤、旦那が大悅び。今夜は己が許す、一杯呑んで來いと天下晴れての女郎買、今迄魚文で呑んで居たのさ。ハアヽ、コレおさん、水を一杯くれ」と茶碗でがぶ〳〵飲み、頭を叩き、「あゝうまい〳〵。さア是からが勝負の闘門」おかぢ「屋根にいたしませうね」善六「傍櫓を入れて逸散に、宇治川の先陣佐々木の四郎高綱なり」と踊る。抱の三吉帶を捉へ、「もし、おあぶなう御座ります」善六火繩箱を提げて行く吉に對ひ、「これ、彼所の水離れが四ッかつちりだぞ」「ハイ〳〵」善六ひよろ〳〵立ちながら、「番頭は店の龜鑑、なア三吉」

笑ひながら、「左様で御座ります」と兩人出づる。おかぢ提灯つけて先へ行きながら、傍櫓の船頭へ、「又や、棧橋はお手を取り申せよ。三吉さん、お忘れ物は御座りませんかえ」此時彼のおしやくは、おとげを供につれ此所へ來かゝりしが、善六が騷を見て折惡しと提灯消させ、暗き所にかくれ居たりしが、此二人河岸へ行きしを見て、頭巾ながら櫓櫂屋へ入り、挨拶もなく二階へ上りけり。これより、才三との話は如何ありけん、作者も知らず。

五段

それはさておき、此夜嫁のおひなは、姑おしやくが、下女のおとけ一人を連れて藥師へとて出でたるを見て、いよ〳〵文の文體に違なしと思ひ、惡い者を拾ひて結句心をいため、引破り捨てんと思ひしが、又思ふやう、是を此儘に密に返しやらば、身のいたづらに恥ぢて辛きあたりも直るならんと、思ひさだめけり。かくとは知らぬおしやく、宵から出でて五ッ過に立歸り、おとげに持たせたる根上松の染付の小鉢を見せ、「おひな、花の物が無かつたから是をお土産に」あひな「おや可愛らしい。有難う御座ります」おしやく「まだお歸はないかい」「はい」「お振舞だから、遲からうによ」トいひながら、部屋へ入りけり。

六　段

かくて此明る日の夜、彼のおとげ、おひなが部屋へ來り、「どうぞお毛抜をお貸しなすつて下さいまし。今およしが刺をたてましたが、毛抜が悪くて脱けません」「はァ左樣か」と小簞笥の引出より、取出して遣りければ、「有難う」と行かんとするに、四邊に人なきゆゑ呼留め、同じ小簞笥より、彼の文を取出して聲をひそめ、「此文は昨日の朝、お母さんが風呂へお出なされた後へ、私が往つた時拾ひしが、誰にも見せずに仕舞つて置いたのだ。文を書いたは元結の包紙、書人も大體知れてある。おのしが拾うたとて、お母さんへお歸し申しや」といはれて、おとげは探せといはれし心の合紋、何と言葉もなかりければ、「ハイ」と一言懐へ入れて立去りけり。

七　段

さて、おとげは直樣おしやくが部屋へ入り、唐紙締めて聲を潜め、「彼物がありました」と文を出せば、手に取りて、「やれ〳〵嬉しや。何所にあつた」されば斯樣々々と、おひなが言ひしまを話しければ、さすがのおしやくも喫驚顔、文は帶へ挾み、「其時おのし、何というた」「なんと言ひやうも御座りませぬから、はいとばかりお部屋を出ました」「はてな、是には何とかいひぬけの仕樣がありさうなものぢやな」と袖打重ね哲し考へしが、おとげが耳に口寄せ、しばらく囁きて文を渡しければ、あと見「そんなら、此文をおひよんに見せて騙し」「をゝさ、彼の馬鹿奴、ほんまに思ふは必定ぢや。うまく出來たらおのしへ褒美は是ぢや」と赤い珠の附いたる頭にさしたる鼈甲の釵を見すれば、おとげ打笑みて立去りけり。

八　段

此時中の間にては、物縫女行燈控へ、仕事して居る側には、白齒の下女草艸紙を見て居る。彼のおひよんも見て居たりしを、おとげ手招して女部屋へ連行き、人なき差向にて、「これおひよんどん、お前は餘程あやかりものだよ。これ見な、才三がお前に文をつけた」おひよん、笑ひながら、「嘘ばつかり、何しに私へ」「いやく、其處が相緣奇緣。昨日の朝中の間で才三がお内儀さんの襟を剃つたを見たらう」「あい、彼から歸る時、此文を私へ見せて、どうぞこれをおひよんさんへ渡しておくれ、お前を見かけて賴む、取持つてくれろといふから、野暮でないと彼の人に見たてられたを否とも言はれず、帶へ挾んで置いた處が、知る通り、昨日は私が湯殿の番、まごつく中に湯殿へ落したから、お前にも文の事はいはなんだ處が、昨日の朝御新造さんが湯殿で拾ひしとて、私にくれなすつた此文、わたしが先ァ讀んで聞かさう。今晩は藥師樣にて、お首尾もよかるべく存候、日が暮れてから櫓櫂屋にて御待申候、めで度〻。上書には、

上るか、とある。櫓櫂屋とは三十天堀の船宿だ。嘸待つて居たらうよ。氣の毒な事は私が分疏をする。明日彼の人が來れば、十二日の晩を約束をして、お前を連れて藥師樣と僞り、櫓櫂屋で逢はせる。それにしては家への祝儀、飲食のものいりもあるけれど、見かけて賴まれたから私がする。其代に御新造さんの拾つた此文の事に付いて、いさくさのある時は、文の主は私で御座りますといふのだよ」おひよん「あい、そんなら十二日の晩には」「あいさ、私が逢せる」おひよん「お內儀さんに知られたら、叱られるであらう」「お內儀さんは野暮ではなし、私が如何でも詫言する」と愚な上にまだ十七、おとげが口先に騙され、眞の事と思ひけり。是皆おしやくが言はせる謀なりけり。

九段

かくて一日たちて、主人箱右衞門は別莊にて客をなし、息子錢藏は、店の番頭を連れて相撲見に行き、留守なりければ、機會よしと思ひ、おしやくお雛を部屋に呼ぶ。お雛來て見れば、おとげ、おひよんも叱られたと見ゆる樣子にて、さし俯きて居る。おしやく煙管をはたき、「これお雛、八日の朝私が風呂へ入りし後へお前が來て、此文を拾ひおきしを、昨日おとげに渡す時、お前がいふには、元結の包紙へ書いた文ぢやから、書人も大抵知れて居る、おのしが拾うたとてお母さんへお返し申しやと言うたさうだが、書人とは才三が事であらう。昨日とげが私にいふには、八日の朝、此文をおひよんに屆けてくれろと才三が賴んだゆゑ、湯殿で働く時落したを、御新造樣が拾ひしを、とげに、此方がいふには、御新造樣が文を渡した時は、餘り面目なくて、文の譯はなんとも申しませなんだが、彼方へ返せとありしゆゑ、惡猫のあかりをおたてなさりませといふから、今此二人をしたゝか叱つたのぢや。しかし下女が廻の髮結に密通くはさのみの罪にはあらねども、私と才三がいたづらすれば、首が二ッ落ちるはいはずと知れた事、姑の首へ墨を引くお嫁御さん、おそろしいお心だな。コレひよん、文の主は私ぢやといへ」「はい、私で御座ります」「あれ彼の通りぢや。惡猫にも事による。お主は大きなお屋敷で、振袖の御奉公勤めたと聞いたが、岩藤に仕込れて、私を草履で打ちかねまい。惡人めが」と睨めつけられ、お雛あまりの口惜しさに、涙の顏を上げ、「あなた八日の晩に、とげを一人連れて藥師へ參りなされしは、文の文句に合ひますゆゑ、それであなたと思ひました」と星をさゝれて、胸ぎつくり。弱みを見せじと烟管振上げ、「まだ吐すか」と額をかつきり、流るゝ血潮。かゝる手荒き擧動も、昔をあらはす下司育。おひなはあソと口惜涙、懷の紙額へ當て、身を慄はせて泣伏しけり。おしやくは、おとげと顏見合せて打笑しが、硯箱と紙取出し、お雛に差付け、

「さア、後の證據ぢや。文の主はおひよんで御座ると、謝罪の一札書きや。それでなければ、私が首へお主が引いた墨が消えぬぞ　さア書け」トせりつめられて、返すべき詞もなんと泣く涙、硯引寄せ磨る墨に、落つる泪を磨りまぜて、筆紙取上げ、あやまりの一札書きて出しければ、おしやく是を見て、「よし〳〵、是で私があかりはたつ。とてもの事に血判ぢや」といはれて無念さ口惜しさ、額の疵の血を染めて、此場はやう〳〵事濟みけり。おひなが心の内思遣るべし。

十段

そも〳〵此お雛が里は、鶴亀屋萬左衛門とて古著の問屋、上下十二三人の暮にて、土藏も三つある程なれど、金有屋箱右衛門が身代に比ぶれば、松蔭の楢の木なり。其娘なれど、八ッの時から大きなお屋敷にお小姓を勤め、十年の御年期めだたく勤めてお暇を戴き、嫁入の口を尋ねし〻、金有屋へ年頃出入する町醫者山井荒文の口入にて、里は釣合はぬが、嫁の顔が心につれて美しきを取得にて、嫁入なしたるなり。されば身代の釣合はぬに付けては、お雛が心づかひもある上に、姑が心だては、湯屋の輕石で顔をこすられる思ひ、里へ駈出さんかと思ひしかど、いつぞや母の意見もあり、勤めたお屋敷へも外分惡しと心を取直し、昨日打たれし額の瘡、

今日もづき〳〵痛めども、お念佛申して悚へ居けり。此事まことの母に通じけるや、里の母おつる、お雛が井戸へ落ちた夢を見て心にかゝり、殊更久しく無沙汰もしつればとて、お雛が妹今年七ッなるを連れ、土産の交魚持たせ、下女と男を供に連れ、箱右衛門方へ尋ねけり。

教草女房形氣　十七編下之巻

十一段

里の母金有屋の勝手へ入り、案内しければ、かのおとけ立出で、「これは能うこそ、さア此方らへ」と座敷へ入りしに、おしやく來り、「やれ〳〵おめづらしい、此方らから人を上げやうと、今朝も錢藏とお噂申して居りました」とは、間に合せの嘘なり。お雛が妹お春お辭儀をするを見て、もしやく「やれ〳〵おとなしい、能くお出だね」母「何處へでもついて出ますには困ります」もしやく「これ杉や、お母さんがお出だと、彼の子にさういひな。ほんに只今はお土産を有難う。甘鯛は彼の子が好物、味噌漬にして食べさせませう」とは、是も間に合ひの詞なり。是より互にありふれたる詞あり。お雛は部屋にて額の膏藥付替へて居たりしが、母と聞きて嬉しけれど、態と直には來らず、緩々膏藥のあとを仕舞ひて此所へ來り、母へは挨拶なく、妹に對ひ、「お春能く來たの、父つさんは御機嫌能いか」「あい、姉さんへ宜しくとさ」おひな笑ひ、「お母さん、若旦那は今客が御座りますから、宜しく と申しました」「あい〳〵。おやお前額を如何しなさつた」ひな「昨日棚から物が落ちまして」と口ではいへど、悲しくて眼に持つ涙、母は心に訝し

けれど、「おや〳〵あぶない。目でなくて宜かつたの」おしやくは側で面伏、何をがな紛さんと部屋へ立ち、手遊の人形持來り、「お春坊、お前に上げやうとて取つて置いた」お春「お母さん、是御覽」母「おや、可愛らしい。お禮申しな」「有難う」と膝へ抱きて悅びけり。是よりいつもと違ひ、馳走にも念を入れ、むしり肴も身のところをお雛に取りて、「さアお前もお食べ」と、つひにない事、是里の母に見せる輕薄なりけり。抑〳〵我子に嫁を娶るは、家の血筋を絶さぬ爲、二ツには舅姑の二人年老いて、嫁の介抱受けん爲なり。女親は殊更病氣の時など、撫摩は嫁の役なり。此時の今はに至りて、眞實の心で撫でさすりをするのと、人目の義理でするのと二ツあり、病人の心いづれかよからん。義理でするのは自ら知るゝぞかし。此お母さん何卒全快させたいと思はれて介抱うけなば、いかばかり嬉しからん。嬉しがらずるは嫁の人たる道なれども、子供の時讀みたる女今川さへ、心にとめざる嫁多し。此嫁なりとも年頃姑のあたりよく、まことの母のやうに可愛がられた姑を、此病氣で死ねかしとは思ふまじ。さすれば、嫁を嫁にするも敵にするも姑の心にあり。さりながら姑のはりがなくて嫁にいびらるゝもありと聞く。是は嫁に連添ふ男のあやまりなり。女に三ツの誡あり、一ツには子なきを去る、二ツには舅姑に不孝なるを去る、三ツには惡しき病あるを去るといへり。されば連添ふ男、親に不孝ならば早く去るべし。さて又、嫁を憎がる、鱗わが足を食ふと同じ事なり。嫁を憎がるは身内を減すと思ふべし。古き發句に、

我が子ならともにはやらじ夜の雪

といふ此一句にて、嫁のあつかひも悟るべし。かゝる辨なきお雛が姑、剩へ才三といたづらを爲し、終には刀の錆となること、此次の十八編にて知るべし。

十　二段

さて此明る日の晝過、お雛が連添ふ錢藏、部屋にて小屏風立廻し、出入する按摩に肩を揉ませて居る、屏風の後にお雛針仕事して居たる所へ下女來り、お里からとて文箱出す。おひな心に、昨日來て用はない筈ぢやがと思ひながら、披き見れば母の筆なり。昨日馳走に逢ひたる禮、人形貰ひたる禮、おしやくへ約束したる大阪の芝居の番付送るといふ文言、外には用の事なく、別に封じたるには內用とあり、披き見れば、小さき文字にて書きたる文なり。是を讀みて返事をしたゝめ、書添に、御內用の事はあとより御返事申すべく、かならず御案じなされまじくと、母の氣安めに申しやりて使をかへし、屏風の後にて再び讀むその文言に、

昨日參り仆節、額の疵尋ね仆時、棚から物が落ち仆とばかりにて、詳しく申さず、涙ぐみ

たる顔つきいぶかしく存けへども、思ふ事ありし故、くはしく尋ね申さずけ。おしやくどの側に居ながら、何とか挨拶あるべきに、聞かぬふりにて俄に座をたゝれたるも訝しくけ。物のあたりたる疵ならば、涙ぐむ筈はあるまじくけ　外に折檻する人はおしやくどのばかりなり〳〵き人なり、疵をつける折檻はあるまじくけ。箱右衛門どのも錢藏も心だてやさしもしや左樣な事ならば、里へ對してあとゝりなゝ仕方にてけ。いつぞや參られたる時、意見致しかへしけへども、いよ〳〵辛抱出來かねけはど、里へ駈出しては後の掛合も惡しくけゆゑ、媒人いたしけ菫文どの方へまゐり、くはしく話しけへば、此方へ掛合ひ申すべく、其節は兎も角もして取戻し可申け。昨日參りたるは、夢見あしくて案じけ故なり。額の疵の事心にかゝり、昨晩も心一つに案じ、寢付かれ申さず、夜半に酒たべ、父樣に笑はれ申け。何事ありとも、必ず〳〵短氣なる事いたし、兩親に歎きをかけるは不孝にてけ。いろ〳〵と案じに堪へかね、番付に事よせ便いたしけり〳〵。くはしく御返事待入り〳〵。めで度〳〵。なほ〳〵、萬一取戻しけへばお屋敷へ願ひ、當分上げ置きけまゝ、そもじ身分の事、御案じなされまじくけ。御覽の後は此文燒捨可申け。

とあり。母の案じる心の中、酌出す涙露落ちて、しの字に濁二雫、實親のありがたさ、文おしいたゞき涙を拭ふ。此時、錢藏が聲として、「何ぞ用か」「いえ、昨日の禮で御座ります」

十三段

話ふたみちにわかる。こゝに又伊勢國松阪にて、伊勢田屋忠右衛門といふは、今年六十二歳、若き時は金有屋箱右衛門店番頭を勤めしが、在所の兄が果てて家督なく、親の許より暇を願ふ故に、伊勢へ歸りし後に、親はてて今は家の主人。紙と油の商賣、上下十二三人の暮なり。今年はおとなしき忰に家督を讓り、孫も今年は五ツなり。足腰の達者なる内、鎌倉の見納め、恩をうけたる昔の主人の墓參かたゞ〳〵、吉藏とて道中になれたるに兩掛持たせ、鎌倉さして下りけるに、或日とある本陣に宿り、奥座敷の二階に落附き、風呂に入りて欄干に倚りて見下しければ、廣庭にて、ぱつし〳〵劍術の仕合をするは、此所の若者共と見えたり。傍の腰掛に、二十三四なる男　振好き武士、小倉の袴、黑の紋付、脇指を差し、刀引付けて居るは、師匠と見えたり。よく〳〵見れば、豈圖らんや、昔勤めた金有屋の惣領金太郎なれば、忠右衛門訝しく、猶も見て居たる時に、煮花の茶を持來りたる女に對ひ、「これ、彼所に居る師匠樣の名は何といふ」「はい、富田金太郎さんと申します」トいふは、氏も名も違なし。忠右衛門「何所に御座る人ぢや」　下女「武者修業ぢやとて、わしが處へ御座つてから、最早百日ばかりにもなりませう。彼處此方の息子

さんが、好い師匠樣ぢやとて、毎日彼の通り稽古いたされます」「然らば女中、此口上書を金太郎樣へ上げて下され。儕は知る人ぢや」と矢立の筆にて鼻紙へ書きしを渡しけり。

十四段

やがて下女來り、「先生樣へ上げましたら、稽古を仕舞うたら此所へ御座ると言はれました」「それなれば女中、酒肴有合の物で好い、二人前、此所へ御座つてから出して下され」「はい〳〵」と立去りて後、飯など濟みて後、金太郎來りければ、久振の對面珍しとて互の挨拶、忠右衛門此度鎌倉へ下る由をくはしく語り、金太郎がかゝる身になりし事を尋ねければ、「いかさま不審は尤。我元服したる年、お出入するお屋敷の殿樣へ、劍術の御指南致さるゝ人の門人となり、修業積りて免許皆傳も濟みて、他流仕合に出でたるも度々なりしが、一度も不覺をとらず、稽古場にても某につゞく者は僅二三人、武藝の交際が身にしみては、侍に手を下げる町人の家督望にあらず、是によりて家督は弟錢藏に讓り、それがしは猶も腕前試の爲、武者修業に出づるにつけては、路用の爲金百兩お貰ひ申すと、親人へ書置をのこし、師匠の許を受けて、内弟子の浪人と言立てて刀を差し、奥筋は大概歩きたれど、手に立つもの一人もなし。それより越後へいたらんとて、出羽の山越をしたる時、懷に金ある事を知りたりとて、山賊五人取卷きし

を、三人は即座に切伏せ、殘る二人に深傷を負せたる事もあり。是より中國を廻り、四國西國にいたり、心にかなふお方あらば、如何樣なる奉公をもして忠節を盡し、行々は館一本の主人ともならん望なり」と、鐵骨の扇膝に突き、張肱して言ひければ、忠右衛門にこと笑ひ、「そりや悪い思召、町人がお嫌なら、御身代を二ツにしても、地面を除けて四五萬兩は貴方の物、鎌倉で鎗をたてる讓株、二千兩ならば買はれませう。私お供申すから、お宿へお歸りなされませ」「いや〳〵、金子にて武士になるは侍の本意にあらず」と、聞入る氣色更になかりければ、忠右衛門「然らばお心任せ。何は兎もあれお久振、お盃をいたときませう」と申付けおきたる酒肴取寄せて、銚子も一度かはりて、打寛ぎたる時、忠右衛門「若旦那、今のお話を聞けば、あてのある親をすてて不孝の名を取り、あてのなき旦那を探すは、親の讓の金をすてて本堂建立に歩くやうなもの。子供の時お讀みなされた本の中にも、父母在す時は遠く遊ばずとあります。獨身の武者修業、いかほど腕前が強くとも、身體は鐵では御座りますまい。若やお煩の時看病は誰がいたします」「いかさま」と思案の顔に附込み、種々に諫めければ、やう〳〵得心なし、「歸るにしては、此本陣の主人へ、百日餘も世話になりし禮もいうてくれ。また下部どもへも置土産の目錄でも」忠右衛門打喜び、「そりや、私が如何樣にもいたします」と供に連れたる吉藏に

吩咐けて、主人を此所へ招きけり。

十五段

本陣の主人來りて段々の樣子を聞き、忠右衞門に對ひ、「私劍術が好で少しばかり使ひますゆゑ、金太郎樣武者修業と聞きてお目にかゝり、お話を聞けば、奧筋にて手に立つ者なく、出羽の山中で盜人五人にお出逢の時、始めて生身を三人切伏せたと聞きて、お弟子になりたくお留め申した明る日、金百兩お預けなされたゆゑ、もしやと思ひお疑ひ申しました處が、朝夕のお身持で疑を晴しました。武者修業も折々見えますが、弟子から著物まで拵へてやるのが多い中に、百兩預ける武者修業、浪人といはるれども尋常人ではあるまいと人々の氣受よく、お弟子も今は三十八人、其内世話役も五人御座りますゆゑ、是等へもお宿へお歸の由、申聞かせませう。兎も角も今四五日は御逗留なされませ」金太郎「いかさま、兩三日立を延し、弟子達へも別の盃、立振舞もいたしたい」と、猶又世話になりし事、忠右衞門も共々禮をのべけり。

十六段

かくて此明る日、本陣の召使男女十八人へ二分宛の目錄、主人へ二千疋、女房へ千疋、五人の世話役を招き、五百疋宛禮を遣しければ、「此方からこそお餞別いたすべきに、是は反對なり」

とて頭搔きけり。さて又此明る日は、本陣へ賴みて立振舞の支度をさせる間に、廣庭の稽古場へ、米俵三十八俵積みたるゆゑ、主人の買入ならんと思ひけるに、やがて丈長の紙へ、ふなまはしにて、進上、先生樣、門弟中、と貼付けしは、氣轉の利きたる計ひと、先生も忠右衞門も感心なしけり。

十七段

かくて程なく、三十八人の弟子達打揃ひ來りければ、兩人口を揃へて米俵の禮をのべ、おちつきは鯛の吸物、肴品々取竝べ、酒盛大方濟みて本膳を出し、猶又酒盛になりしに、此宿は繁昌の所にて、飯盛もあれば、藝者五人弟子達が招き、大酒となり、夜を深して皆々立歸りけり。此明る日、金太郎發足の朝、主人預りの百兩を返し、さて見送とて本陣の家内、又は弟子達、其外大勢にて賑しく首途をなしけり。人々の噂に、彼のよな武者修業なら、毎月來よかしとは、尤も至極なり。偖これより金太郎立歸りて後、かの才三が事にて、おしやく計らざる最期を爲す事、金太郎名をあげし手柄ありて、鎗一本の主になる事、十八編にしるし、引つゞき出板仕候。めでたし〳〵。

○安政三辰の卯月、京山このさうしを脱稿、口畫のところへ何をがなと、凭レ案ゐたる所へ、家婢菓子折を持來り、お客樣がお目にかゝりたいとて、此品をといふ。水引にさしはさみたる刺を見れば、兎角齊龜毛とあり。知らぬ名なれば、「どのよな人ぢや」と下女に尋ねければ、「侍と草履取を連れた、人品のよい、隱居らしいお方でござります」「さやうか、こゝへ御案内いたせ」トあないにつれて、書齋の入口、柴の戸を家來に開けさせ、庭に入り、座につきたるを見れば、歳のほど六十三四可、人品容體官士の隱居と見ゆる、剃髮の人なり。互にはじめての挨拶、みやげの禮をも述べけれ。此翁「わしは山の手の者ぢやが、娘が草ざうし好くゆゑ、老人の作をわたしも見ましたが、草ざうしにある、行年を見れば、老人は今年は八十九になるゝ。それにしてはおすこやかぢや」京山「つれ〴〵草に見えたる、むくいぬの年より御はづかしう御座ります」翁その挨拶はなく、床に掛けたる掛物を見て、「はゝア短册、何か面白さうな」とさし寄り、懐中より眼鏡を取出し、つら〳〵みて、めがねを外し、「さて茂睡の短册は珍しい。茂睡が梨本集を見れば、茂睡は寛永六年つちのえ巳の五月十九日、駿河の府中の御城、三の丸にて生れしと、みづからしるせり。又梨本集を著したるは、元祿十一年つちのえ寅の年なり。この時茂睡七十歳の時なれば、此短册も大かたは、百六七十年前の古筆なり。老人も見給ひつらん、天保十四年卯の夏、池田寛藏が、信濃にありしとて、茂睡が眞跡の詠草を、そのまゝに板刻したる折本を見しが、筆力この掛物の短册に少しも違はず」京山「さやうで御座ります、かくれ家の茂睡と呼ばれたる歌も、あの内にござりました」翁「さやう〳〵」トいひつゝ、家僕にいひつけ、包の中より、女扇を一本とりいださせ、「さて老人、おたづね申したしるしに、娘が方へ土産にいたしたい。一筆御勞しくださされ」ト出したるを見れば、途中にてもとめしと見えて、扇やの包のまゝなり。筆とりて、

待たなくに蚊のはつ聲はあな卯月いかにつれなき山ほとゝぎす

「これは昨夜枕上の愚詠でござります」翁「さやうかな」と眼鏡をかけて、扇をとり〳〵つら〳〵見て、「いかさま、市中では時鳥をまだ聞かれまい。わたしのあたりでは、耳やかましい樣ぢや。さて老人、かねて名をきく女裝考は、開板と聞く。發販はまだかな」「近々賣出します」

翁「さやうかな。骨董集は、醒齋翁の遺稿があるさうぢや。老人の作に、食物沿革考又は和漢印章考、または筆餘筆といふ隨筆もありと聞く。八十八になりて、草ざうしの作でもあるまい。識者のわらひをも厭ひ給はぬか。いたづらにはかなき稗史に筆を費すは、惜しい事ぢや。京傳翁も、骨董集や奇跡考の作がある故に、張三李四の徒をのがれたのぢや」と教諭して歸られけるが、いづくの御人とも知らざれば、厚意を謝する心にて、ありしまゝを記して、口繪に代へはべる。

安政四丁巳春　　八十九歳　　京山

近年のくさざうしは、續き物はやるゆゑ、この女房形氣も、今年十八編にいたれり。初編よりさま〳〵の女房をしるしたるに、十六十七編に續きては、嫁をいびる姑の事をしるしたれども、十六十七編を讀み給はざる子供衆は、この十八編の筋わからざるゆゑ、十八編に出したる人物の略傳をこゝにしるせり。

金有屋箱右衛門　鎌倉の金持町人、こゝかしこの屋敷方へ、金子の御用を勤めるを家業となす。年は五十七八歳、智惠さかしからず、なみ〳〵の人物なり。

妻お酌　はじめは三筋の糸にて世を渡りしに、人の目顔を見て心を悟る、わるがしこき才智あるのみならず、美人なる故、酒の座敷に名を鳴らしけるに、箱右衛門が金持の襟につきて、思はれ、二十一にて、まだ白齒なりし時、箱右衛門糸をやめさせ、圍ひ置き、繼母とふたり住まはせ、白齒と年增の下女、おやぢの飯焚男、何不足なく暮しけるに、箱右衛門が本妻重病の時、おしやく謀をもつて、本妻の看病をなしたる中、本妻身まかりて、ずる〳〵べつたりに妾となり、本妻の産みたる男の子二人、此時いまだ幼かりしゆゑ、おしやくもりそだて、心にはな

けれども、かはゆがりし故、いつかおつかさん〳〵と言ひ、つひには番頭まで、おかみさんといふ樣になりたるは、おしやく惡智恵ありて、この家をかき廻したる故なり。委しくは十六編にあり。

箱右衛門總領の悴金太郎十六歳の時元服して、屋敷を勤めしに、屋敷にて劍術の稽古を見て、習ひはじめ、二十一歳の時、免許皆傳を受けて、町人を嫌ひ、家督は弟に讓らんと、路用に金百兩持ち、書置を殘し、行方知れざりけり。

次男錢藏兄の書置に依りて、家督となりて、嫁を迎ふ。錢藏は心立すなほにて、おとなしく、毒にも藥にもならぬ男なり。

姫お雛金有屋の身代に比ぶれば、五六段も劣りたる、鶴龜屋といふ古著問屋の娘。八歳の時、踊と下方にて、さる御屋形のお姫樣のお小姓に住み、十年の御奉公めで度勤め、十九の時、金有屋の嫁となり、夫錢藏男ぶりも好く、心立もやさしく、夫婦の中はよけれども、姑お酌が氣に入らず、いろ〳〵さまぐ〳〵にいぢめられ、二度まで里へ賦出す事など、十六編にしるせり。

忠兵衛六十二三、宿持の通ひ番頭、正直にて家業には賢けれど、世間には疎し。

店番頭善介出來合の人物なり。

下女お利牙おしやくが使ふ下女、惡玉女なり。

髮結才三金有屋の町内を廻る髮結、二十二三歳。役者の誰やらんに能く似たる男なり。金有屋は町内一番の大家なるゆゑ、まはりの髮結、こゝにて一日二度づつの飯を食べる、これを俗には、腮に行くといふ。この才三、姑おしやくとわけあるを、おひなが悟りし事につけ、姑にいぢめらるゝ事、十七編にあり。

半澤六郎しげたゞといひ、小姓頭なり。

楠左門重忠殿の家來、劍術の指南をなし、ほかの屋敷より來りて、稽古する門人もあまたあり、箱右衛門が悴も、この先生の門人なり。

伊勢田屋忠右衛門伊勢山田の人なり。むかしは金有屋の番頭を、久しく勤めけるに、親の跡を續ぎたる兄はてて、跡目なきゆゑ、伊勢へ歸りて、家督を續ぎ、今は悴も孫もありて、上下八

九人のくらしする隱居の身なれば、鎌倉へ下り、むかしの主人の墓まゐり、又は、鎌倉の見をさめに、遊山をなし、善光寺へも參詣せんとて、兩掛一ツ、奴僕をも連れて、東海道を下る道、ある旅籠屋へ泊り、圖らず、武者修行に出でたる金太郎にあひ、樣子を聞きて、町人が厭ならば、いか程の金子にも事かゝぬお身なれば、よしある武士になる仕方、いくらもあるべしと、意見をいひて、連歸るところまで、十七編にあり。

これらの事を御存じなく、この十八編のみ御覽ありては、文句にわからぬ事あるゆゑに、くだくだしけれど、記しはべる。そも〳〵はかなきくさざうしといへども、その人物に依りて、その人情あり、いかさま、かくあらんと思はるゝ樣にしるさざれば、教のはしにもならず、讀みて面白くもなしと、心には知れど、京山は文才なくて筆まはらず、八十九の年につれて、おのづから趣向も華やかならず、若き先生達には劣れり。されど五十年の作者と、見はやし給へかし。

教草女房形氣　十八編上之卷

初段

かくて忠右衞門、金太郎を伴ひ、道を經て鎌倉へ入りし頃は夕暮なりしに、兩人とも駕籠に乘りて來りたれば、鎌倉に入りて駕籠の者は約束の立場茶屋にて歸し、打寛ぎて後、忠右衞門、金太郎に對ひ、「お話を聞けば、書置を遺して武者修業に御出なされて後、二年餘お便もなされざりしに、今お連れ申したなら、親御樣さぞかしのお悅。此所からは程近し、いざ〳〵お出なされませ」金太郎「是までの厄介添い。打連れて宿へ歸るべけれども、親の許も受けず、我儘に家出を爲したる某、さしつけて宿へ歸りては、親を踏付にするよなもの、子たる者の道にあらず。御身宿へ行き、某を連歸りたる譯を委しく語り、親ども許を受けて後歸るべし。向ふへ見えるは宿屋なり。それがしは彼所に宿り、親どもの許を待つべし。こゝに又一つ御身に賴あり、明日の朝早く劍術の師匠左門殿方へ到り、宿へ歸る事委しく語りたる上、彼の宿屋へ立歸り、親人の許を聞きて後立歸るべし。其譯は、武者修業に出づる時、師匠の執成にて重忠樣の家來分となりて刀を差し、師匠方より旅立ちたれば、宿へ歸らざる前に、師匠方にて草鞋を取

らざれば、武士の行作にあらず」忠右衛門「一々御尤ぢやが、お若いゆゑ氣が變り、お宿へ歸るが嫌さに私を」「いや〳〵、武士の一言僞ならぬ證據を見よ」と、氷の刃すらりと拔きて打合せければ、立場に休みし人々、「そりや拔いたぞ」と立騷ぎしは、さもありなんかし。

二　段

かくて忠右衛門は金太郎に別れ、其日の點燈頃金有屋へ到り、金太郎を連歸りし事、又金太郎が直に宿へ歸らざる心根をも語りければ、子を思ふ親心早く逢ひたく、店の番頭善介に手代を添へ、かの旅籠屋へ迎にやりしかど、同じ挨拶にて歸らざりけり。さて忠右衛門久振とて盃を出し、嫁のお雛へも引合せ、それと聞きて通ひ番頭忠兵衛も來り、金太郎が事を聞きて悅び、忠右衛門それ〴〵へ、伊勢の土產をやる事など、くだ〳〵しければ記さず。

三　段

それはさておき、重忠殿の小姓頭半澤六郎、同じ家中にて劍術の指南をする楠左門方へ、朝早く來りたる其用は、主人重忠殿、左門が指南する家來の仕合を御覽なされんとある內意の用なり。それゆゑ左門も稽古場を外して、一ト間にて用向の話濟みて後、主人の手元の金子五百兩盜みし奴、他所より入りたる者と慥に見ゆる故、他の人の手に捕はれては屋敷の恥なる故、半澤に申付けられ、每夜忍歩き、曲者を尋ねるなど話し、歸らんとしたる所へ、左門が內弟子稽古の形にて汗を拭き〳〵來り、左門に對ひ、「金太郎、武者修業より歸りしとて、參りました」左門「早く是へと申せ」「今お玄關で、草鞋を解いて居ります」「左樣か、然らばまだ宿へは歸らぬと見ゆる。足のすゝぎをやれ」半澤「彼が歸らば、武者修業の中、何か面白き咄もあらん。聞き申さん」とて、又尻を落付けけり。

四　段

かくて金太郎來り、頭を下げて、兩人に挨拶なしければ、左門「やれ〳〵息災で立歸り、めでたい〳〵、中國迄も參りしか」金太郎「左樣に存じましたる處」かやう〳〵と、忠右衛門に逢ひ、勸めにまかせ、據なく昨夕鎌倉へ入りたれども、宿へは未だ立歸らず、其心底の程を語りければ、左門打喜び、半澤も師匠を重んずる禮儀を感心なし、武者修業の樣子を尋ねければ、金太郎「北の國々は大方歩き候て、彼地此方にて仕合もいたし候へども、先生の御蔭にて、御名に疵をつけ候負も致さず、全く御取立の御蔭と有難う存じまする」半澤「お身が腕前にてはさもあらん。武者修業の間、何ぞ面白き話はないか」金太郎「一人旅ゆゑ野宿も度々いたしましたが、珍しい事も御座りませぬが、是は珍しいと存じましたは、生身を三人切りふせました手の中、眞劍の勝

負の心持珍しく、好い稽古を仕りました」左門、半澤口を揃へ、「三人まで人を切伏せしとは珍しい。何處にての事ぢや。先茶を飲みやれ、冷めるわ」金太郎茶を飲み、「私南部にありし時、越後へ近道の山越ありと聞き、其山へ上りし時、まだ晝中なりしに、一人も行交ふ者なく、熊笹など押分け參りしに、物影より山賊五人道に立塞り、一人が申すには、汝が懐に金ありと見たる故、先へ廻りて待居たり、命惜しくば有たけ渡せと申したるは、私路用として、宿より金子百兩持居るを、彼等知りしと見えたり。私それと心付きたる故、いかにも有たけやらん、命は助けよと弱々しく申しながら、錢の財布を投げたるを金子と思ひ、頭を下げて取る處を、拔打の向袈裟、拔連れて切りかけたる兩人をも切伏せて、殘る二人にも傷を負せたる故逃去りました。五人共に大男、難なく切勝ちましたるも先生の御蔭、有難う存じます」左門「錢の財布にて誑りたるは、當意卽妙」半澤「お手柄〳〵、それが武者修業の骨といふ處ぢや」と賞美なし、猶樣々物語して、宿へ歸らんとなしければ、左門「我方より旅へ立たせ、その姿では歸されず」と、麻裃に慰斗目を貸して著替へさせ、若黨、草履取を附けて送らせけり。

五段

爰に又箱右衛門は、朝九ツ半の時計を聞きて、我子金太郎が歸るを待兼ね、左門方へ迎をやらんとする處へ、店より手代駈來り、「やれ金太郎樣お歸りで御座ります」と聞きて箱右衛門、中の間へ立出で見れば、麻裃にちどら斑斗目、刀を提げたる人品、「やれ金太郎、先此方へ」と座敷に入れば、大小後に疊に平伏し、「先以て御機嫌能く恐悦至極、皆々も無事にておめでたう存じまする。一昨年の春書置を遺し、金子百兩路用となし、我儘に家出したる不孝をも御許し下され」箱右衛門「これさ、親子の中ぢや、きり口上には及ばぬ。お主が行方さま〴〵尋ねたれど知れぬ故、書置に任せ、錢藏を家督にひろめ、嫁も取りました」といふ所へ、錢藏嫁を連れて、部屋より來り、母と呼ぶおしやく、通ひ番頭夫婦、店の番頭善介、伊勢の忠右衛門、飼猫までが駈出し、とり〴〵の挨拶、めでたいとて待受の酒肴、いろ〳〵さま〴〵なる事どもは、くだ〳〵しければ記さず、その大方を推量たまはれかし。

六段

かくて金太郎、此日より親の許にありしかど、毎日左門方へ通ひ、稽古一日もかゝさず、以前と違ひ、武士形氣にて袴を放さず、身持正しく、物事折目だかにて、親が物言へば手を突きて挨拶するゆゑ、況しておしやくは金太郎に氣が置かれ、悪い奴が歸りしと思ふも、その身に暗きことあるゆゑなり。さて或日の夕暮、金太郎、おしやくに對ひ、「これ母人、旅にて貰ひました

る、大阪高麗橋の岩城升屋のぢやと自慢してくれたる帶、寢卷に締めますは惜しいもの、古帶あらば下さりませ」「お安い事」と取寄せ、「これは、此間山の手の岩城升屋から買つた子供帶、品が好くて代が安いゆゑ、使い物にと仕立てておいた。何方でも」といふを見れば、一筋は革色琥珀、一筋は八丈縞なり。金太郎は、革色を貰ひ、八丈を殘しけり。

七段

かくて或日、金太郎稽古より歸り、廻の髮結に髮を結はせけるに、髮結が締めたる平絎の帶、日外おしやくが二筋出したる中の一筋、八端がけの八丈、見覺ある帶なり。さては廻の髮結ゆゑ取らせたるならんと思ひ、「己は久しく旅にありて、此頃歸りしゆゑ知らぬが、おのしいつから此町内を廻る。名は何といふ」「はい、才三郎と申します。去年の秋から御町内を廻り、此方樣ではあごが御座ります故、別してお世話になりまする。有難い事には、旦那樣もお内儀樣も、御目かけられて下されます。貴方樣にも御贔屓を願ひます。おぐしが澤山御座ります故、結馴れませぬから、お心持が惡くば仰やりませ、幾度も結直しませう」金太郎その挨拶はせず、「お主の腰を見れば、粹な帶をしめて居る、町場の内で貰つたのか」「いゝえ、どうして、古著で買ひました」「はア、左うか」と髮を結はせながら心に思ふやう、帶は見たるに違なし、また遣るまじきものにもあらざるに、貰ひし人をかくすは合點ゆかず、年頃といひ男振といひ、もしや母と淫な事ありては親人の恥、家の瑕瑾、しかしわが惡猜かも知れず、猶又試し見んと心にをさめけり。

教草女房形氣　十八編下之巻

八　段

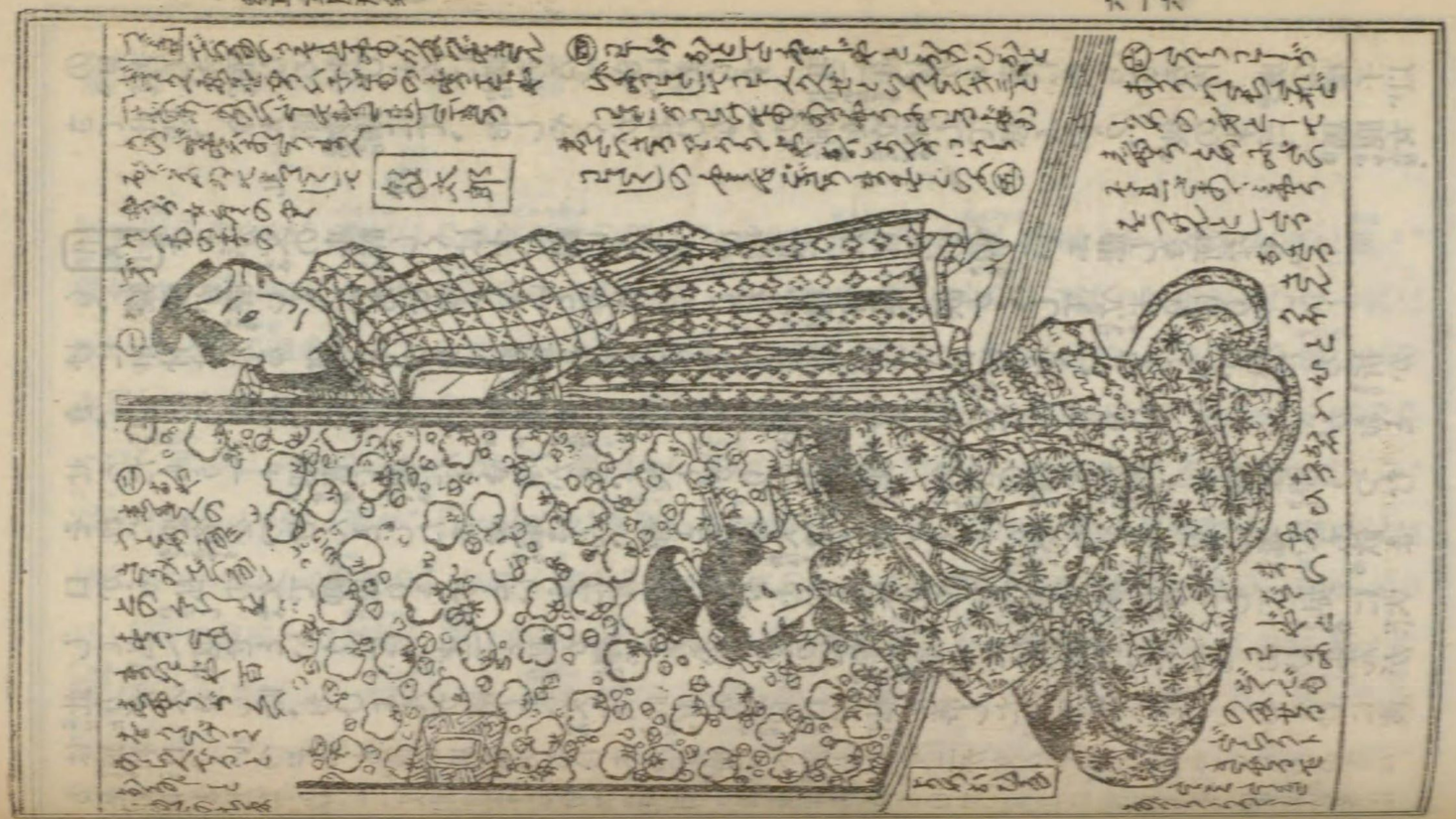
或日嫁のおひな、緣先にある金魚鉢の前につくばひ、赤子子を釵の先へすくひて金魚に與へ、餘念なく見て居たるを、姑のおしやく厠より出でて後に立ちたる故、金魚をおひなと共に見て居たる白齒の下女、それと見て叱られんとて勝手へ行く。おひなは、おしやくが後に立つを知らず、猶赤子子を與へて居たり。姑おしやく後より、「これおひな、いつまでも子供のやうに、何したものぢや」といはれ、振返り、詞もなく部屋へ行かんとするを、もしやく「これ〳〵、此所へ來や」と座に著き、「今見れば、錢藏がお屋敷へ行くとて、部屋で著る物著替へて居るではないか。それにも構はず、金魚へ餌をやるは子供のする事ぢや」「はい、召物は出して置きました」「著る物出ずは當然、側に居て支度してやるが女房の役。今日彼の子の出るはお屋敷への勤、慰みではない、此暮をすゝ種蒔ぢや。百姓が野らへ鍬をかたげて出ると同じ事。此方の智慧で其氣のつかぬ事はない筈ぢやが、錢藏は物柔な生れ、尻に敷くのか。それを餘所に見て居ぬぞ」「どうして、私が尻に敷くなどと」「また口返か、久しいもんだ」もひを「召物をお著替なさ

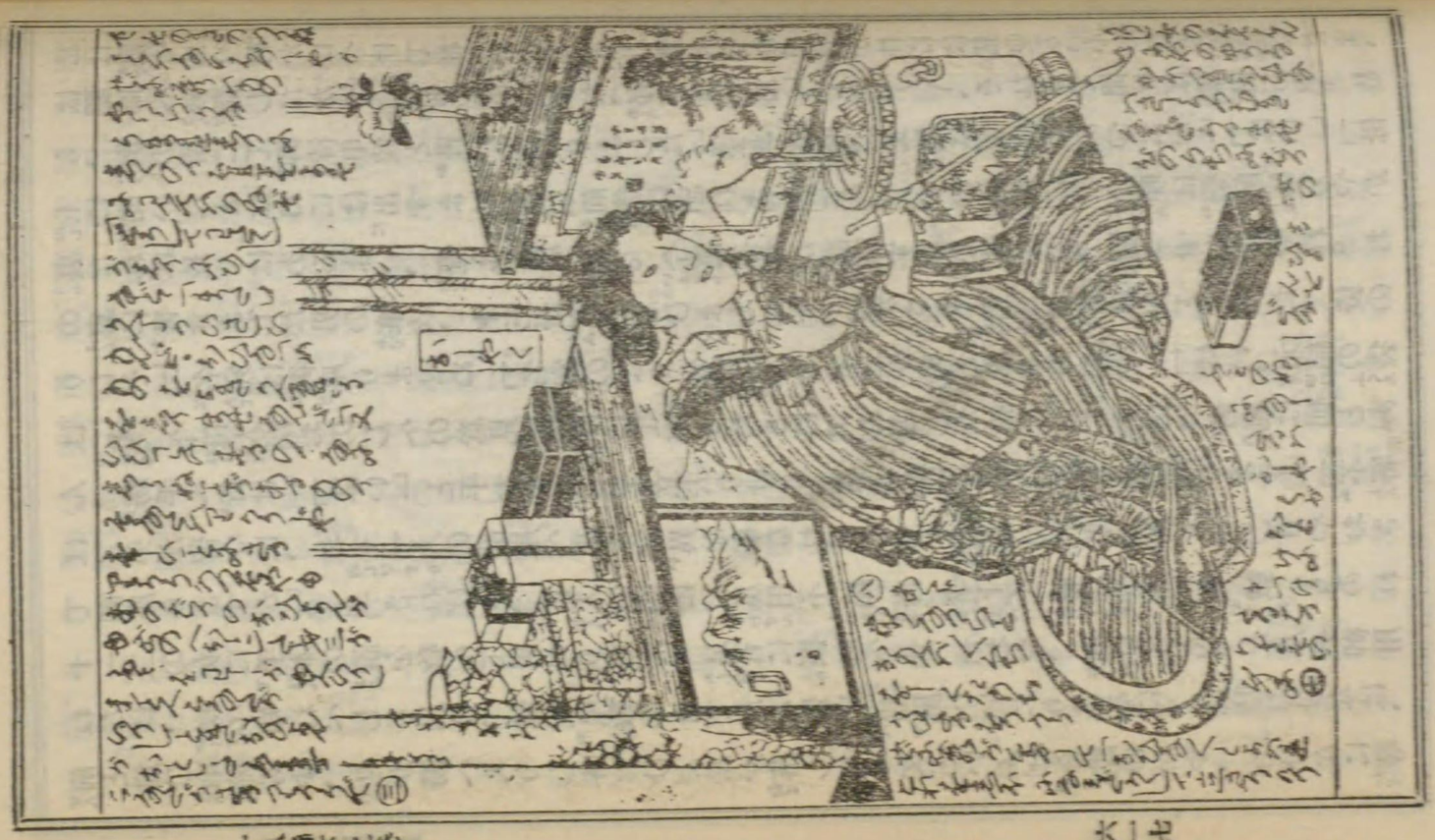
るを知りませなんだ」「又言譯するのか。何知らぬ事があるものか、其方は利口じや。惜しい事には猿利口。いつぞやも彼の馬鹿のおひよんが湯殿へ落した才三が文を、私が湯へ入りしあとへ此方が入りし時、おひよんが落した文を、此方が猿利口で私が落した文ぢやと思ひ、おとけに渡して私へ返せというたは、才三と私が譯でもありさうに惡推量したは、猿利口ぢや。おひよんが口から私の文で御座りますというたから、私があかりは立ちたれど、嫁の身として姑に大それた惡名をつけんとしたるお猿さん、顏と心は大違、やかましい婆ぢやと、私に毒でも飲ませるだらう」ト烟管で疊たゝきながら、美しかりし女の果、般若の樣な顏付。お雛は差うつむき、涙うるませ、心の中に、馬鹿女のおひよんを騙し、文の主になしたるは、おしやくがおとけに申付けたる謀、その身に惡事ありながら、と思へば〳〵口惜しく、たもちかねたる折から、錢藏が聲して、「おひな〳〵」と呼ばれ、これを機會に、涙かくして立去りけり。

作者曰才三が文の事詳しくは十七編にあり。淨瑠璃なれば三の切といふ悲しき所なり。

九　段

さて此時、金太郎物陰にて、おしやくがおひなへの詞を立聞して思ふやう、彼の才三、馬鹿女の見苦しき面なるおひよんに譯あるべきにあらず、我二年ばかり家にあらざる内、奥の樣子以





前と違ひ取締らず、私が湯へ入りし時おひよんが落したる文といふは合點ゆかず、おひなに尋ねなば、樣子知れべしと思ひ、錢藏屋敷へ出でたる留守、部屋へいたりけるに、此時おひなは、十一二の女に手本の讀を敎へて居たりしが、足音に振かへり、「おや、御兄さん、なんぞ御用で御座りますか」金太郎「さればさ、古人の語に、瓜田不ㇾ蹈、李下不ㇾ整ㇾ冠といふ誡もあれば、弟が留守に、お主一人の部屋へ來るは異な事なれど、ちと尋ねたい事がある。こりやおさん、勝手へ行け」「はい」と手本を持ちて立去りけり。おひな「御兄さん、何で御座ります」「不審は尤。今母人がおのしへの意見、物陰にて聞きたるに、おのしが拾ひたる文に、名宛は何とありしぞ」「名宛は御座りませぬ」「名宛のなきを何故に、才三が文と思ふのぢや」「はい、元結の袋の裏に書きました男の筆故、才三が文と思ひました」「いかさま尤。文言は何とあつた。袋の裏なれば長くはあるまい、覺えて居らう。今更おれが詮議する心はない、隱さずに言やれ。お主に聞いたとは口には出すまいぞ」「前後は忘れましたが、其中の文言に、今晩は藥師樣ぢやから、例の所にて御待申候と書いてありました」金太郎「其晩、父樣は留守であつたか」「はい」「母は藥師へ參詣したか」「如何であつたか、存じませぬ」「よし〳〵、それまで聞けば澤山ぢや。是には限らぬ、何かにつけてお主が朝夕の心遣、それがしが目には見ゆる、心の内も推量いたす、

嫁と姑との中むづかしきは間々あるならひ。人の心は鏡の如く、怒りて對へば怒りて映る、やさしく對へばやさしく映る。姑は他人なれども、嫁となれば親なり。されば、產の親に比ぶれば、可愛がらぬはその筈と諦め、何事も悦へ〳〵て辛抱すれば、寒さを凌げば春が來るよなもの。めでたく子が生るれば、孫のかはいさに鬼婆の心もやさしくなるものぢやと年寄の詞、おひな、篤と勘辨ぢや」「有難う御座ります。お目に餘る事あらば、お叱なされて下さりませ」金太郎「私は此方に二ツ上、年寄ではあるまいし」と打笑みければ、おひなも莞爾と笑顏、二人見合す心の内に、おひなは我夫よりは遙に優る男振、しかのみならず才智賢くして情深く、物事の執成も、夫に優りたるを見るにつけても、取換へて欲しやと心には思へども、愼深き女ゆゑ、色目には出さず。金太郎も、心の内にはおひなが美しきは申すに及ばず、利發を顏に出さず、針業、手蹟も勝れ、少し愚なる錢藏を敬ひて、少しも禮儀を失はず、假にも卑しき詞を用ひず、いかさま、やごとなきあたりの宮仕を久しくなしたる故ならん、我も斯樣なる女を妻に持ちたきものと、心には深く思ひそめつれども、おひなと同じく愼深き故、露ほども色に出さず、差向の部屋を立去りけり。此後おひなに似たる娘ありて、金太郎契を結ぶ事、この次の十九編を讀みて知べし。或人申されけるは、人の心は木石にあらず、業平を見て好い男と思ひ、小町を見て美

しき娘と思ふは、木石にあらざる故なり。然れども、心たどしき人は、慎深きゆゑ、流の水に影のうつるが如く、よどみとどまる事なきゆゑ、心を濁らし名を汚すいたづらは仕出さず、是唯慎の一ッにあり。聖人の語に、己に克ちて禮にかへるとは、此事なり。男も女も慎の心を忘れべからずと申されしは、もつとも至極なりけり。若い人達、よく〳〵味ひ給ふべし。

十　段

それはさておき、或日髪結才三、金有屋の臺所にて晝飯食べて居る處へ、下女來り、「才三どん、お内儀さんが仰やる、此剃子研いでおくれと」才三「あい」と請取り鬢盥へ入れる。飯食べて仕舞ひ、剃刀研ぎ、鬢盥提げて茶の間へ行き、座敷を見遣り、剃刀を渡しながら、「旦那にお聞き申しておくれ」「あい」と座敷へ來り、「旦那樣、おぐしをなされませぬか」箱右衛門、遙に才三を見て、「今日は何所へも出ぬから明日にせう」才三「ハイ〳〵」と勝手へ歸りけり。此時金太郎、箱右衛門の傍にありけるが、箱右衛門に對ひ、「此程伊勢の忠右衛門逗留の中、私へ申すには、以前勤めました時と違ひ、お家の風が大分變りましたと申しました。今の髪結は、以前の小介とは違ひ、生白けたる小二才、私髪を結はせる時も問はず語りに、口をたゝきて追從輕薄、誰にも世辭を申し、男振もよき故に、女共贔屓いたす樣子、みだらなる事でもありては世間に聞

えて、家事不取締の廉にも相成りますゆゑ、臺所より内へはお入れなされますな。店の側の小座敷にてお結はせなされませ。忠右衛門がお家の風がかはりしと申したも心附きての事で御座りませう。以來は奥へお入れなされますな」箱右衛門「いかさまもつとも、下女と髪結、まゝある事ぢや」と打笑みけり。おしやくは、傍にありて金太郎が詞を聞き、胸にぎつくりせしが、聞かぬ振して、「おさんや、猫にお飯をやりや。何かを嗅いで歩くよ、ひもじいさうだ」と金太郎が話を散すは、憎むべし〳〵。

十一　段

さて彼の伊勢より來りたる忠右衛門は、金有屋に廿日ばかり逗留の内、昔の主人の寺詣、又は芝居、角力なんど遊山をなして、是より光る御山の御祭を拜み、豫て願ひたる善光寺へも參詣せんと言ひければ、箱右衛門より、路用の足にせよとて、金十兩つかはしけり。金持は斯くこそあるべけれと、聞く人感心なしけり。爰に又金太郎は、今日も左門方へ稽古に行きけるが、歸來りて箱右衛門に對ひ、「今日先生申されますには、他の屋敷より稽古に參らるゝ門人達の申さるゝには、朝稽古などに出入するに、門番所へ會釋するも面倒なれば、町方へ出張をなされと勸める人多き故、出張を取立てんと思へども、免許皆傳の弟子達はいづれも主人持ゆゑ、出張

を預けべき人なし、お身は浪人同然の身分、出張を預りくれよと申さるゝゆゑ、未熟の私と辭退いたしましたれど、達ての御賴、然らば親どもへ申しきかせ、お返事をいたしませうと申して置きました、如何返事をいたしませう」箱右衞門「お主は、何と思ふ」「私存じますには、先生六さいの出席はいたされますれども、三百人もある弟子の内にて見立られたるは規模と存じ、出張を預り」箱右衞門「いや〳〵、それは惡い景見。お主には地面の三ツも讓り、別家させんと思ふ。親ども不得心とて斷いやれ」「はい」とはいへど本意なき顏付。おしやく側にありて思ふやう、むづかしき奴追出すにはこれ幸と首肯き、「お前さん、別家と仰やるけれども、夫は何時でもなる事、見立てられたが規模と思ふ此子の心を挫かず、返事をおさせなされ。なんぼ此子がおとなしいとても男の事、氣が反れては自狂になるといふ事も御座ります」箱右衞門「いかさま、それもさうぢや、出張を預れ。併し此家の家督をすべきお主、出張を預れば我家も同じ事、人のこしらへた家に置くはおれが恥ぢや。出張は己がこしらへてやる」金太郎「左樣なれば、猶更先生悅ばれませう」箱右衞門「幸ひ松が谷で一昨年買つた地面の表に空地がある。何かの入用二百兩もかけたら出來やう。玄關附にして立派にこしらへやれ。番頭二人へも申聞かさう」金太郎「有難う御座ります」これ金太郎、妻を持つ始なりけり。

十　二　段

かくて此明る日、金太郎例の如く稽古に至り、楠左門へ、親が出張をこしらへる事ありの儘に語りければ、左門「然らば身共が出張にはあらず、お身が家なり。しかし月に六齋、身ども出席いたさずば、弟子達の受惡しかるべし」金太郎「私も左樣に存じます。普請は親共がいたしますれども、矢張あなたの御出張の宿札に仕る心得で御座ります」「いかさまもつとも」と、この事是に極り、箱右衞門が、出入の大工棟梁へ申付けけるが、普請出來ざる内は、金太郎親の許にありけり。

十　三　段

さて或日箱右衞門、金子の用を勤むる屋敷二三軒へ、十五日の禮に行きて宿へ歸り、錢藏に對ひ、「今日松葉が谷のお屋敷へ參りしに、御家老樣仰やるには、此月の十九日には身共國へ立つが、定めてお身も送るであらう。とてもの事に箱根まで行くまいか、おれは箱根の湯へ一周とどまる積ぢや、お身も同道せぬかとお勸ゆゑ、お供いたさんと約束した。少の間ぢや、留守を賴むぞ」錢藏「それは好いお連、お出なされませ」おしやく側にありて心に思ふ事あれば、「あなた、日外から腰が痛むと仰やる。幸の事ぢや、一周では湯が驗きますまい、御家老樣を立た

せ申して、あなたは二周もお出なされませ」箱右衛門「いかさま、兎も角も樣子次第にせん」「二周と極めてお立なされませ、左樣なれば其積にて御支度を致します。なう錢藏」「左樣さ、緩りと御遊山なされませ」と詞にまかせ、二周と定め支度をなし、通しの駕籠にて、駕籠の者三人、兩掛一ッ、手がはり一人、手代一人、上下七人にて、其日も天氣よく、旅立ちけり。

十四段

去程に箱右衛門旅立ち、日數經て後、旅よりの狀とて飛脚より屆きたるを、おしやく、金太郎、錢藏打寄り披見れば、明日の夕方は宿へ歸るべしとの知らせなり。金太郎店の番頭善介を呼びて手紙を見せ、明日は迎を出すべき事など申付けけり。偖此夜の丑三とも覺しき頃、錢藏が聲として、「どろばう〳〵」といふ大聲に、上の間に打臥し居たる金太郎、むくと跳起き、枕元にある刀提げ立出で見れば、藏の二ッ並びたる板敷の廊下より逃行く人影、さだかには見えざれども、此廊下の突當には用心口の開きある故、其所より盜人入りたるならんと追かけ、拔く手も早業後袈裟。手はきゝたり、刀は業物、乳の下まで切込みければ、きやッと一聲倒れけり。金太郎大聲上げ、「盜人は切止めたるぞ。燈をもて〳〵」と呼ばはる聲に、錢藏手燭を持ちて馳來り、俯伏に倒れたる死骸を見て、怖々差出したるに、金太郎死骸の襟首とりて引起し、燈に照して喫驚仰天、「ヤ、〳〵〳〵、こりや母人ぢや。こはそも如何に」と呆果てけり。錢藏が妻おひなは、心利きたる女なれば、どろばうといふ聲に跳起き、店の方へ皆來い〳〵と呼ばはりければ、番頭善介はじめ、手代ども馳付け、おしやくが死骸を見て仰天なしけり。金太郎「こりや善介、早く忠兵衛呼びにやれ」と詞の下より、若い手代兩人馳行き、追々に女共まで眼を覺し、大なる騷となりにけり。

十五段

通番頭忠兵衛は、近き所に住居するゆゑ、時を移さず馳付けければ、金太郎云々の由を語り、「暗がりの見違とは申しながら、十歳の頃より母と呼びたるを切伏せ、親殺の名を受けて鎗先に死なんよりは、腹切りて相果つる。お身は此家の長を勤むる身分なれば、わが切腹を見屆けくれよ」と諸肌押脫ぎ、刀を取直しければ、錢藏、善介、忠兵衛、右左より押止め、「御尤ぢやが、死骸の側に落散りたる小判、是には何か樣子もあらん。はやまり給ふな若旦那」「いゝや放せ」錢藏、善介縋附き、「兄じや人、待ちたまへ」「若旦那樣、先々暫く」「いゝや止めるな、放せ〳〵」といふ處へ、開いてありたる用心口より、ばら〳〵と駈入りたる捕手の者共、手に〳〵提灯差上げて、金太郎を取卷きけり。

十六段

金太郎、さてこそ早くも捕手の者、縄目の恥受けんよりはと、持ちたる刀取直せば、「やれ待て金太郎、早まるな」と捕手の中より聲かける、顔見て喫驚、金太郎、「ヤ、〳〵、貴殿は半澤六郎殿」「いかにも〳〵。いつぞやお身も聞きし如く、主人重忠殿の手元の金子奪取りたる曲者詮議の爲、夜な〳〵忍んで此鎌倉を尋ぬる處、只今此所を通る折から、此口より忍出でたる曲者、搦捕りて白狀させ、樣子は知れたる此場の有樣。暗がりの人違、切止めたる此女は、御身幼きより母と呼びたるゆゑ、親殺しと心得たる切腹尤なれど、我思ふ樣、仔細あるゆゑ、切腹をとどめたり。此家の主人箱右衛門は、身共屋敷へ久しき出入の用達なれば、家内の樣子も豫て知りたり。こりや錢藏、親共へ尋ねべき仔細あり。如何いたした」錢藏「親は旅へ參りて、留守で御座ります」半澤「然らば忠兵衛、汝は久しき此家の手代、身共をも見知りつらん」「はい〳〵、左樣で御座ります」半澤「然らば汝に尋ねん。金太郎が今手にかけし女は、箱右衛門が妾と聞きしが、本妻のひろめ何時致した。大切な事ぢやぞ、僞を申すな。有體に申せ」忠兵衛「是迄本妻のひろめは致しませぬ」半澤「然らば、金太郎が手にかけたるおしやくとやらんは、召使の女、妾ぢやな」「左樣で御座ります。本妻のおよわと申すが相果てます時、遺言によりて妾に致し、二人の子供、其節はまだ幼年の事ゆゑ」半澤「いかさま、子供なれば何の辨へもなく母と申したるを、其儘にして差置きたるは箱右衛門が大きなる過、左傳と申す唐土の書物に、名と器物とは人に貸すべからずとある。母といふ名を浮々と貸しておくを、店を預る番頭の其方達まで捨置くはあやまりなるぞ」と叱られて、忠兵衛、善介、疊へ頭。半澤、金太郎に對ひ、「お身は幼年より武道を好み、劍術には長けたれども、惜しい哉文道に暗きゆゑ、人倫の道に暗し。親の妾とあれば、お身が爲にも召使なり。幼き頃は兎も角も、今の身にておしやくを母と呼びしとて、腹切るは筋違、まだ其上に、手にかけても苦しからぬ罪ある女。こりや家來共、縄付を是へ引け」「かしこまつた」ト用心口より引來り、引据ゑたるは髪結才三、人々これはと驚きけり。

十七段

半澤六郎聲あらゝげ、「やい才三、最前の白狀今一度此所で申せ。いはぬと其腕捻上げるぞ」「ハイ〳〵、申します〳〵。旦那の留守を幸ひに、毎晩お内儀さんの部屋へ忍び、今晩申されるは、金太郎が悟りたる樣子、殊更明日は旦那の歸り、最早此家には居られぬから駈落する、是を持てとて二百兩、お内儀さんが百兩、私が金を盜んだでは御座りませぬ、逃げる氣でも御座りません。二百兩はお返し申しました。どうぞ命はお助下さりませ」半澤六郎「皆の者聞きたる如くな

り。不義をなしたるのみならず、妾の身として大枚の金子を奪ひたるおしやく、親に代りて圖らず打とめたる手柄の金太郎、いかでか切腹には及ぶべき。此場の樣子主人重忠殿へ申上げん。死骸の片付勝手次第。こりや家來共、才三が持ちたる二百兩、忠兵衞へ渡してやれ。いかに才三、相手の女うたれたれば容してやるぞ。家來ども此門前より追拂へ」才三「はい〳〵、有難う御座ります」金太郎「不思議に命助りしも貴殿の御情」半澤「危い事であつたなァ。最早夜明に間もあるまい。皆々さらば」「ハイ」と平伏し禮の數々。半澤家來を引連れて、元の口より立去りけり。おしやく此家にありし內、箱右衞門が大恩をものとも思はず、箱右衞門を尻に敷き、こゝろざしよき嫁をいびり、剩へ才三と狂ひたる天罰ゆゑ、刀の錆に身を果せり。人たる道に背けば、遲かれ早かれ天罰ある事かくの如し。畏るべし、愼むべし。

これより後金太郎、女の助太刀を爲して親の敵を討たす事、おひなが義心ある事、十九編に記し出板仕候。めでたし〳〵。

教草女房形氣　十九編よみはじめ

○兒を育つるは、毎日心不休、米を作るは粒々皆辛苦。聖人の敎に、父を天にたとへ、母を地にたとへたり。頭に冠つける雲の上人も、あたまに手拭かぶる雲介も、一日もなくて叶はぬ米をはじめ、家を作りて住居をなす、材木の類、石瓦、又は身に著る絹木綿の類、人間第一の衣食住、皆地より出づる物なり。又世の中の寶とする錢金も、元は地より生ずる物なり。

○そも〳〵萬物に長たる人間も、天にたとへたる父の陽氣の胤、地にたとへたる母の胎內にやどし、母の精氣にて人にこしらへ、十月にてやう〳〵めでたく生みおとす。それすなはち、地に稻の種をおろし、粒々辛苦して、米になるが加し。○さて旱つゞきて、田に水すくなく、辛苦を盡したる稻の、枯れかゝる百姓のなげきは、乳汁細くして、我が子の瘦せるを見る母の悲しさと同じ事なり。○法苑珠林といふ佛書に、中陰經といふ佛の經文を引いて曰く、釋迦如來、彌勒菩薩に問ひ給はく、兒生れて母の乳を飲むはいくらぞ。彌勒答へて曰く、乳を飲む事

百八十斛なり、母の食する所の四分の一をもつて、此乳汁に出すと申しければ、如來、母の墓に至り、千拜をなし給へりと記せり。按に、今の赤兒も、三歳になる迄の日數は、千八十日なり。夜晝一合づつ乳を飲むとして、三歳までには、母の乳一石八斗を飲む。此一ッを以ても、母の恩を知るべし。○さて子を育つるは、乳よりほかになし。よしある御あたりは申すに及ばず、卑き町人でも、ゆたかなる家にては、乳母を抱へて、乳に困る事更になけれども、乳母を抱へる力なき家の母、乳のほそきは、明日くはする米のなきと同じ事なり。此頃は母の顔も見おぼえ、にこ〳〵笑ふあいらしさも、乳ほそければ痩せほそる。晝はともあれ、夜に入りて寢乳を飲まざれば、いかにしても泣止まず、ふびんさ悲しさせん方なく、雪のちら〳〵寒き夜に、泣く子を懐へ入れて立出で、いつも乳を貰ふ門口、ほと〳〵敲き、「およりましたかえ」といふ聲もひくゆに心づかひ、今ねいりつきたる耳には聞きつけず、門口にたゝずむえりへ雪のつめたさ身にしむ悲しさ。ふところでは子に泣かれ、親も涙の夜の鶴、子の泣聲に目をさまし、「おやせさんかえ、今あけるよ」と内から聲かけられた嬉しさ。これみな子ゆゑの闇の夜なり。

○母の子を育てる事かくの如くなれば、母の恩父にまさると思ふべけれど、然にあらず。六ッ七ッまでは母の手に育てられ、夫より父に養はれ、手習、元服、娶とり、家督をつぐ。たとへその日ぐらしの貧きも、それ相應に一生の身をかためるは、父の恩なり、○萬物の長たる人に生れながら、孝行の孝の字も知らず、親の意見少しも耳にとめず、親のいやがる友達の約束は心に忘れず、親には嘘をつき、友達には義理を立て、不孝同士は中よくて、けふも又くるわがよひ、親は宿にて子を案じ、子は遊里で親を忘却。親は爪に火を點し、子は蠟燭で文を讀む。づるけ者の、朝寢、食好して、米の値段を知らず、親の脛に鰹節かけて齧る世間のむす子、百人よせて、九十人はこれなり。○さて又女は、地にたとへて陰なり、陰は靜なり。されば女の子、大方は物靜なり。靜なれば心やさし。やさしきは孝にちかし。女の子は女同士ゆゑ、おのづから母にしたしみ深し。○こゝにひとりの娘ありて、母に孝を盡し、十八歳にて、母の敵を討ちたる事、この十九編の筋につゞく。その事讀みて知るべし。

○筆のついでに

水ぐきはよしあさくともをさな子の
道に渡らんはしとなれかし

安政五年午卯月二十五日　九十翁　京山

教草女房形氣　十九編上之巻

初段

去程に金有屋箱右衛門の忰金太郎、暗闇の人違とはいひながら、幼き時より育てられ母と呼びたるおしやくを殺し、親殺の縄目に遭はんよりはと、其座にて腹切らんとしたる處、重忠殿の家來半澤六郎が爲に命助かりし事は、此前の十八編を讀みて知るべし。さておしやくを殺したる死骸をおしやくの母に見せ、髪結才三と不義を爲し、三百兩を盗取りし事、又は家内の人々常々お内儀樣といひ、主人の忰も母樣と呼びたれども、本妻の廣めせざりし故、妾なれば不義のみならず、三百兩の盗人なれば、親に代りて忰が手にかけたれば申分あるまじ、おしやくが品々は素より、涙金とて五十兩取らせければ、おしやくが繼母申分なく、死骸を引取りて野邊に送りけり。其明る日金有屋の主人箱右衛門は、箱根の湯治より歸り、云々の由を聞きて驚きけり。さて又金太郎は、町人を嫌ひて弟の錢藏を家督になし、劍術の師匠楠左門が稽古場の出張を預り、師匠より内弟子二人附けて、金太郎此出張に引移りけり。金有屋の弟錢藏が妻おひな、彼のおしやくにいぢめられ、心の安き日なかりしに、金太郎おしやくを手にかけければ、

おひなは鬼に瘤を取られたる思、心晴々としてひとしほ顔も美しく、夫婦中好く、おしやくが氣に入りの惡玉下女才三を執持ちたるおとげも追出したれば、おひなが才覺にて奥の暮取締よく、是ぞと記すべき事なかりしゆゑ、金有屋の事は爰に筆をやすませ、是より孝行娘お花が事に筆を起す。かの金有屋箱右衛門、此鎌倉に地面澤山持ちたる中に、根岸といふ所にも地ありて、此所に別莊を作りしに、貸店もあれば、別莊の留守居旁家主の久七とて、此所より程近き大磯の、下部を口入する者を附置きけり。さて五軒ある貸店の内に藥箱持たせて歩く安醫者住ひけるが、程近ければ大磯に病家多きゆゑ、この頃大磯へ引移り、後へ賣するの札を貼置きけるに、其賣するゑは六疊に四疊半の次の間、臺所、雪隱も庭もあり。此賣するゑを七兩一分にて求め、引移りしは年頃は五十ばかり、切髪の後家、名を妙節といふ。一人娘今年十六歳、家主久七が目には呼出の突出盛、惜しい娘を箱入にして置く事よと思ふも、大磯に入込みて人口入するゆゑなり。此妙節の夫は、望月殿の家來二百五十石取の用人を勤め、名を潭田段五兵衛とて、武士形氣にて、世の中の人情に疎く、殿樣へ對ひ、さまでもなき事を度々諫言なしければ、御不興を受け、閉門したる其機に附込み、常々中惡しきおてかけの讒言にて長の暇、浪人して後みまかり、妻のお節髪を切りそぎ尼名も妙節とあらため、娘を連れて、此頃此所へ引越しけるなり。浪人なれど金子は餘程貯へありし故、下女一人に屋敷にて召使ひたる忠義の下部袖介を召使ひ、上下四人の暮。妙節は賢女なる故、昔の花も何所にか殘りしが、操正しく、孺の家ながら取締よく、いかさま由緒ある果とぞ見えける。

二段

妙節が娘お花は、身持正しき母の育てたりとはいひながら、夏の暑き日も門へ出でて涼みたる事なく、冬の寒きには下女の手にかけず、炬燵程よくして母にあたらせ、昨日讀みたる曾我物語の話をしながら、母を慰めて肩を揉む。朝夕の飯時にも母の給仕は下女にさせず、是は左樣にもあるべきに、母の湯卷は下女に洗はせず、狹けれど湯殿もあれば、何時洗ふやら人にも見せず。かく孝行娘なれば、此程母が煩ひ、風邪が縺れてむづかしく、醫者の藥もはかゞしく驗なく、食もすゝまず、お花が歎、此上は神佛のお力と、やう〳〵母のすや〳〵と寢入るを見て、裏の井戸にて水を浴びる事毎晩、しかも雫も凍る冬の夜、其孝心に神佛の利益ありて、思の外に病すら〳〵と本服を見て、お花が嬉しさいはん方なし。されど水を浴びし事は、母さへ知らざりけり。これをこそ誠の孝心といふべけれ。

三段

それはさておき、彼の家主久七が娘今年七ツばかり、妙節方へ常々遊びに來りしが、性質もよくて心賢くて愛らしきゆゑ、妙節もお花も可愛がり、折ふしは髪などもお花が結うてやり、物など折々取らせければ、久七夫婦喜び、後にはお花に手本貰ひて、此娘晝頃までは妙節方にて手習をなしけり。されば久七方より、お花へ折々は物を送りて禮を爲しけり。さて或日久七が女房觀音へ參詣の歸り、お花への土産とて、まだ珍しき撫子の鉢植、今年新板の役者繪の團扇三本持來り、娘の世話になる禮やら、芝居の替目大入の話、娘が踊の師匠にお淺のある話、其日にはお花樣お連れ申しませうと、べら〳〵饒舌りて歸りゆく。お花貰ひたる役者繪の團扇一べん見て、母には見せもせず、傍に置きたる時、門口にお花と同じ年頃の娘の巡禮は、其母と見ゆる二人哀れな聲で「補陀落や」一くさりうたひ、「御報謝下さりませ」と差出す柄杓へ、お花一錢取らせければ、押戴きて立去りし娘を、お花「これ〳〵、是を其方にやるぞ」と今貰ひたる役者繪の團扇、其儘三本取らせければ、娘打笑み母も喜び、數々禮をのべて立去りけり。

四段

母妙節傍に是を見て、お花に對ひ、「今貰うたる團扇、巡禮にやるは好いが、一本でよからうに」

お花「役者繪ぢやから三本ながら遣しました」母「そりや何故に」お花「さればで御座ります。此夏の中彼の三本を私がつかひますと、心ある人が見まして、俳優を贔屓いたして、手に觸れるかと思はれますが口惜しう御座ります。それで折角の土産ながら、其儘三本取らせました。あなたとても世を捨てたお身の上、役者繪などがお身に近くありましては、心ある者の思はくも悪いでは御座りませぬか」といふを、さすがの母も、「いかさま是はわしが過、そもじが心得感心いたした。それでこそわしが娘ぢや。世の中の女中を見るに、芝居を好かぬは一人もない。女の慰は少きゆゑ尤な事なれど、それ〴〵に贔屓の役者ありて、同じ心の友達と其好悪を言爭ひ、顔に紅葉を散すもあれど、まだ十五六の子供なら許すべし、二十歳を越えたる女中達、殊更賢き御邊宮仕をなし、御祝儀の日は眉をもたてる女中、私は誰が贔屓といふ詞は聞きよけれど、私は誰に惚れましたといふに同じ。木竹にあらねば其美しき男振に、よしや心に染まるとも、華美なる贔屓は慎むべし。恥を知らぬに至りては、贔屓の書きたる扇を自慢らしく人中でつかひ、其紋處の釵を頭に戴き、賢き御邊へも憚らず。斯る無禮は咎め給はざるは、世の中に數多あるならひなる故なり。おのしが今巡禮にやりたる團扇は、今贔屓の大役者どもなり。それをおのしは捨てるやうにやりたるを、贔屓する娘達の爲には、狂氣かと笑ふべし」と、

母の話を娘お花、繼物しながら聞きて針をとどめ、「左樣に仰やるあなたをも、野暮な婆ぢやと笑ひませう」「いかさま左樣ぢや」と、母も娘も打笑ひけり。京山今年九十になりて、若かりし七十年の昔を思ふに、役者贔屓して、其役者の宿へ駈込みたる馬鹿娘度々ありしが、近年は左樣なる馬鹿娘あるを聞かず。世の中の娘達賢くなりしと見えたり。されども彼が書きたる手紙を人に貰へば大事になし、母の文は枕紙につかふ。町人の娘は論ずるに足らず、武家の娘御、又はやごとなき邊へ宮仕し給ふ女中など、華美に贔屓するを見れば、平常の心も推量られて、人柄見られて、若い中はありもすべけれど、胡麻鹽の椎茸などには似合しからず。兎にも角にも華美な贔屓は愼み給へかし。

五段

妙節が今召使ふ年寄の下部袖介といふは、昔屋敷にありし時より、今以て召使ふ忠義の者なり。ある日使に出で歸り、其用を言ひて後妙節に對ひ、「昨日あなたが尋ねて來ねば好いがとおつしやりました勘當息子の井原垣藏樣、今道で逢ひました」妙節「惡い奴に逢うたな。此所へ引越したを知つて」「居りませう。尋ねて往くと申されました」「何樣な姿ぢや」「いやはや、以前とは變果て、氣の毒な形で御座ります」と、噂したる其明る日の晝過、袖介勝手より來り妙節に對ひ、

「もし、昨日逢ひました勘當が參りました」と聞いて、お花は納戸へ入る。「井原垣藏で御座ります」と刀を提げてつか〳〵入りけり。井原垣藏年は二十五六、男振好く、口前は利口氣なれど、見掛とは違うて愚者、身持一ッとして宜しからず、親の意見も言盡し、親さへ見捨てる勘當の天竺浪人、妙節が夫は、此垣藏が親と同役なりしゆゑ、垣藏童の頃可愛がりし故、今日も尋ね來りしなりけり。

六段

互の挨拶ありて、垣藏妙節に對ひ、「今日お尋ね申したるは、あなたを見掛けてのお願。その譯と申すは、私は此度星の井の家中、陪臣ながら千七百石の人の用人に抱へられ、百二十石にありつきしところ、身の廻何やかやに差支へ候ゆゑ、何卒此暮まで金子二十兩御貸し下されまし。暮には取前にて間違なくお返し申します」妙節は打笑ひ、「嘘も吐き樣にて實らしいが、此妙節は實にせぬ。何故といふに、むづかしき手紙は節用を出し、手蹟は見苦しく、算盤は九々を覺えたるのみ。劍術は目錄が濟んだばかり、百二十石に誰が抱へるものか。又例の酒過して飲んだと見える。話を聞くも酒臭い」「はてさ、其樣に情なく言はぬものぢや。浪人してもちと宛は貸金もする此方樣」妙節手を振り、「金の事はいうても徒ぢや。浪人の女暮、何しに貸金し

ませうぞ。よしや有りても親さへ見捨てた此方、誰が金を貸さうぞ。臭い物身知らずぢやなア」垣藏むつとして、「臭い物とは過言であらう」妙節「いや、過言でない。親が押籠置きしを、夜中に庭の塀を越して大溝へ落ちて氣絶して、前町の者に助けられしを、わしが連合の情にて内分に濟ませた其時、臭い物まで著替へさせてやつた、身知らずとは其事ぢや、覺があらう。金の無心はとても出來ぬ事、外に用はあるまい。親不孝の顏見るも厭ぢや。さあ〳〵歸らしやれ」垣藏詞なく妙節を睨付け、四邊を見廻し、「覺えて居ろ」と立去りけり。

七段

此日夕方小道具屋善兵衛といふ者妙節方へ來り、妙節に申しけるは、「私母本卦がへりの内祝ゆゑ、片付きました娘も呼びました處、久振にてお花さまにもお目にかゝりたいと申します。晩には咄家もまゐります。それゆゑ私わざ〳〵お迎に參りました。お歸にはお駕籠にてお歸し申します。お宿にばかり御座るお花樣、少しはお慰にもなりませう。私方なれば苦しうは御座りますまい」妙節是を聞き、「やれ〳〵母御は六十一かえ、本封返の祝おめでたい。娘御もお出とあれば、お花、善兵衛殿と一所に行きやれ」といふ。この善兵衛といふ小道具屋は、昔妙節が屋敷へ久しく出入して、妙節が夫の世話になりたるを、其恩返とて、妙節が夫浪人以來、萬事親切に世話をする男なり。さてお花俄に支度して、土産物など有合にまかせて取繕ひ、「おゝ皆さんへ、能う言うてくれ」「はい〳〵。是袖介、五ツ頃には歸るぞ、氣をつけてくれ」と下女を連れ、善兵衛に伴ひ立出でける。これぞ親子の一世の別、後にぞ思ひ知られける。

教草女房形氣　十九編下之卷

八　段

さてお花は善兵衛方へ至り、品々馳走にあひ、淨瑠璃の始まる頃、町の拍子木四ッを打ちければ、母を案じ歸らんといふを、駕籠にて送るゆゑと皆々止めけれども、孝心の娘ゆゑ、淨瑠璃にも心をとめず、駕籠も斷り、送りの男を賴み、連れたる下女を從へて立歸り、門口より男を返し、立寄りければ門口開けてあり。お花訝しく内に入れば、黑闇に人のうなる聲あり。お花いよ〳〵訝しく、連れたる下女が持ちたる提灯取りて照し見れば、忠義の下部袖介　深手と見えて血に染りたる顏を上げ、「お花樣か」「おゝ袖介」と喫驚仰天、愕く胸を打叩き、「何故の此手傷」袖介苦しき息の下、「井原垣藏が忍入り、妙節樣を切殺し、金盜んで逃げる處を、此脇差でと思ひしに、えゝ口惜しい」とのつけに反りて息絕えけり。お花は奥へ駈入り、母の死骸に取付きて、悲み歎く繰言は、いとも哀れに血の泪、くだ〳〵しければ記さず。

九　段

かくて此兩人は、惹る非業の死をなしたるゆゑ、所の作法濟みて、兩人とも野邊に送りしに、

お花は毎日涙の乾く隙なく、三七日を過しけるに、善兵衛が計ひにて此家を仕舞はせ、お花を引取り、厚く世話を爲しけり。

十　段

話ふたみちに岐る。それはさておき、金有屋の嫁おひなは、いぢめられたる姑のおしやく、髪結の才三と不義をなし、金太郎が手にかゝりたるは、おひなが心では、鬼に瘤を取られたる思、毎日胸のもや〳〵したるも忘れ、さして心づかひする人もなければ、今日は長谷寺の觀音へ參詣なし、序なれば、花屋敷の秋草を彼所此所見廻りけるに、遙の腰掛より名を呼びて招くゆゑ、立寄り見れば、おひなが以前勤めたる時、薫とて七ッばかりの兒髷のお小姓、いつかお振袖、宿下して母に連れられ、此所にありしなり。おひな同じ腰掛によりて互に久振の話して立別れ、宿へ歸る道々お雛思ふやう、金太郎殿は金有屋の家督なれど町人を嫌ひ、今では劍術の師匠樣、其弟の錢藏殿は、私がつれあひ、弟に妻がありて、兄樣に妻の無いを餘所目に見るは道ならず、かをるは丁度好い嫁盛、親御は今出川の御用人、武士を好む金太郎殿嫁に嫌とはいふまい、かをるが氣立も知れてある事、男はよし、金に不足はなし、姑はなし、緣があればかをるも仕合、兩爲ぢや、と道々考へたる事、宿へ歸り直樣錢藏へも話し、主人箱右衛門へも、かをるが事委し

く話し、心に思ふ事を語りければ、大に悅び、「金太を呼びにやれ」と言ふを、あひさ「先兄樣へ下話してからの事になされませ」と通番頭の女房を呼び、委しく語りて、金太郎方へ遣しけり。

十一段

程近き所ゆゑ、頓て立歸りければ、箱右衞門「どうぢや、金太は悅んだか」「いえ〳〵、貴方方の思召とは大違、いかなる緣談なりとも、先一二年は女房持たぬとおつしやるゆゑ、いろ〳〵おすすめ申したれど、言ふは徒事、其話は止せと少しお腹立の樣子ゆゑ、歸りました」といふを聞きて、箱右衞門「いやはや、石部金吉にも困るなァ」あひさ「左樣さ、惜しい緣組で御座ります」

十二段

かくて此明る日の四ツ半頃、昨日おひなが供に連れたる年增の下女奧へ來り、おひなに對ひ、「もしあなた、昨日花屋敷でお遇ひなされましたお内儀さん、お娘御を連れてお出なされました」おひさ「宿下ぢやゆゑ、彼地此地歩く序であらう。宿下の娘を連れて歩くは母の自慢ぢや」といひながら立出で、掛物、花も活けてある座敷へ入れけり。さて互に昨日思はず遇ひたる事、今又かをるが手土產の禮をのべ、お雛勝手へ立ち、馳走の用意申付け、もとの座敷へ歸り、かをるが兩座の芝居見たる話、又はおひなが勤めた中、相部屋の女中嫁入して子持になりし話などして居る處へ、金持の事なれば、吸物、硯蓋、刺身、取肴。錢藏も挨拶に出で、箱右衞門も嫁にもと思ひし娘なれば、隙見をなしけり。

十三段

此日此時、金太郎來りしと聞きて、おひな心の中に、金太郎に美しきかをるを見せなば、厭とはいふまじ、又かをるにも母にも、金太が男振を見せたし、丁度好き見合なりと、側に居たる錢藏に囁きければ、金太郎を連來り、かをるが母に對ひ、「是は私兄金太郎と申して、町人を厭がり、只今は」斯樣々々と概略を話しければ、かをるが母「やれ〳〵、左樣で御座りますか。半澤六郎殿の話にて、金太郎さんの事は委しく存じ居りまする。武者修業なされし時、山賊五人仕止めたる事、又は日頃のお身持と申し、此鎌倉の廣い中で、劍術は若手の四天王と人々の噂、私良人もお目にかゝりたいと申します。始めてのお盃は良人へよい土產。おほゝゝゝ」と酒も少し廻りし樣子、金太郎は物堅いに似合はず、人をそらさぬ男ゆゑ、程よく待遇ひ、暫く爰にありて奧へ入りけり。

十四段

さて薰が母膝すり寄せ、おひなに對ひ、何やらん密々話せば、おひな首肯き、おひなも何やら

ひそ〳〵話し、互ににこ〳〵打笑み、軈て盃を納めて歸りけり。さて客の馳走の殘にて、親子四人水入らずの酒盛に、おひな、箱右衞門に對ひ、「先程薫が母、私へ密に申すは、金太郎殿の事、豫て半澤六郎殿より委しく聞きて、兩親とも好き緣組なれば、かをるを嫁にあげたく存じ、宿下の内申入れ、見合もと存じた處、昨日花屋敷にてはからずお目にかゝりしゆゑ、今日娘を連れて參りしも、有樣は箱右衞門樣へも金太郎殿へも、餘所ながらかをるをお目にかけ、私へ下話せんとて參りしに、金太郎殿へもお目にかゝりしは、見合をいたしたも同じ事、めでたく相談出來る樣賴むと申しました。里は今出川の家中二百石の御用人、かをるはあなたも隙見なされた通り、心立は私が請合。あなた何と思召す」箱右衞門此挨拶はなく、「これ金太郎、聞く通りぢや。おのし何と思やる」「はい、好き緣では御座りますれど、私今年二十三歳、劍術のみにはあらず武藝の修業最中妻を持ち候へば、子も出來、おのづから武藝修業の妨、一兩年たゝば兎も角も、今厄介持ちますは迷惑で御座ります」お雛かたはらより金太郎に對ひ、「かをるは御奉公の御年がまだ二年ある由母はなし、御年明けてめでたく婚禮致すやう、今より印を取替して置くは如何で御座ります」金太「そりや父上の思召次第」と、下話の相談極りければ、此明る日かをるが母へ、おひなより緣談の返事やる時、交魚一籠、上酒五升の切手、鮨折三ツの切手、文

箱へ入れてやりしは、宿下のかをる御殿へ歸る時の土産にならんとの心なり。これは此おひな御奉公したのみにあらず、氣の利きたるなりけり。この文薫が兩親、薫も見て喜ぶ事、くだ〳〵しければ、繪にのみあらはせり。此緣談いかになるやらん、此次二十編を見て知るべし。

十五段

此日暮れて金太郎稽古出張の宿へ歸途、物見歸と見えて若侍、いづれも酒機嫌鼻謠も聲をかしく、金太郎それと見て除けて行く刀の鞘へ、かつきと當てたるを其儘行過ぎしに、かの侍聲かけ、「ヤイ待て。一本差しながら鞘當の挨拶もなく、武士の作法を知らぬ奴、無禮の挨拶詫びて行け」金太郎立止り、「そりや此方から申す事、鞘當はお身からぢや」「それには何ぞ證據があるか」「いやはや、法外なる難題。鞘當は石と鎌、何ぞ證據のあるべきそ。戯けた事を」「なに、戯けとは慮外者奴」ト持ちたる兩大のかさにて撲たんとするを、金太郎が鐵骨の扇にて打落され、柄に手をかくるを、踏逆へてひはらを衝てられ、其儘礎と倒れけり。立並びたる二人の侍、拔連れて切りかくる。金太郎も拔合せ、丁々發矢と飛鳥の働き、劍の稻妻切捲られて逃去りけり。金太郎刀を納め、塵打拂ひ、徐々と立去りけり。

十六段

かくて金太郎宿へ歸り、馬鹿者に出會ひしと内弟子の山中熊藏、坂田金吾へ話し、眞劍の勝負の氣合など敎へて居たる時、玄關へお頼み申しますの聲、金吾立出で、立歸り、「珍しい女が參りました。年は十七八、しかも美しく、供もなく只一人、私は浪人者の娘花と申す者、先生を武士とお見掛申し、願ありて參り候、何卒御逢ひ下されませ、と申します」金太「いかさま、珍しい女ぢや。武士と見かけてと申すからは仔細あらん。是へ連れて御座れ。これ熊藏、燭臺を點け給へ」この娘來り座敷に入り、金太郎を見て兩手を突き、うやゝしく禮をなし、「私は花と申すもの、父親は望月殿の家來薄田段五兵衛、ゆゑありて浪人いたして後相果て、母は尼となりて妙節と申します。私は兄弟もなく一人身。それにつけてお願ありてわざゝ參りました」金太「願とは如何なる譯ぞ」「私身に取りての一大事、何卒御人拂下されませ」金太「いやゝ、是に居るは我腹心の内弟子、我等も同じ事」「左樣あらば申上げん。此鎌倉の根岸と申す所に、母、私、下女一人、下男一人にて住ひ居り候處、私留守の夜、以前は同じ家中の者、親の勘當をうけし井原垣藏忍入り、母を手にかけ金子を奪ひしを、忠義の下部脇差にて立向ひ、深手を負ひし處へ私立歸り、手負の口より、母を殺したるは井原垣藏と慥に聞き候。母相果てゝより日柄たち、

私今は戸網町にて、小道具屋善兵衛と申す者の方に居り候。然るに母の敵井原垣藏が首取りて母に手向けたく、それにつけては劍術稽古致したく存候處、藥師參詣の歸り、貴方樣三人相手のお働き、遙の傍より見て居たる人々賞め候得ば、彼は其筈、劍術の師匠と申したる者候ゆゑ、お後を慕ひ參りました。何卒内弟子に差置かれ、朝夕の稽古なされて下さりませ」金太郎「御身女と申し、殊更年もゆかざるに、母の敵を討たんとは、さすがは武士の娘、感心いたす。指南はいかにも承知いたした。さりながら、身共未だ妻もなき男世帶、女の内弟子は置きがたし。稽古は勝手に參られよ」お花は差俯きて詞なく、袖に泪をかくしけるが、顏を上げて金太郎を恨めしげに見やり、「此鎌倉には劍術に名高き先生數多あれば、稽古のみならば貴方には限るまじ、内弟子に居りまして、お寢間の伽をも致しなば、情も深くなり、親の敵の後見も御心をふくめ給ひ、本望遂げんと思詰めて、身の一大事も打明けて頼みしに、かよひ稽古とは御心淺き挨拶、敵打は思ひとどまり、尼となりて母の菩提を弔ふべし」と、敵持つゆゑ常に用意と見えて、九寸五分懐より取出し、髻きらんとするを、金太も内弟子も差寄りて押止めけり。

十七段

此時内弟子の熊藏申しけるは、「此娘を取立て、親の敵を打たせなば、此稽古場の名を揚げん。

義經に靜、義仲に巴の例もあり。拙者は彼の善兵衛に掛合ひ、此娘を引取り、お寢間の塵を拂はせん。敵打の娘を見棄て給はど、臆病の名を取り給はん」と勸めければ、其すゝめに任せけり。そも〳〵此お花は、役者繪圍扇さへ手に觸れず巡禮にやりたる程なれど、妾の据膳は、敵打の手段なるべし。

十八段

かくて金太郎、お花を内弟子に置きけるに、木竹にあらねば枕の塵をも拂はせ、年增の下女をも召抱へてつかはせ、稽古濟みて人なき時は、晝も稽古場に出し、内弟子二人も心を盡して教へければ、親の敵を打たんと思ふ一心ゆゑ、僅二月ばかりにて、腕前餘程固りけり。さて或日物參の歸りがけとて、金太が弟錢藏が妻おひな來りし時、金太は稽古場、下女は物にとりかゝり居たるゆゑ、お花茶を運びたるを、おひな見れば美しき娘、人柄下女とは見えず、名を聞けば花といふ。何時より此所に居ると聞けば、「はい」とばかり、恥ぢたる樣にて勝手へ入りぬ。おひな、物堅き金太郎も、妾にや置きつらんと思ふも道理なり。金太稽古場より來りて、挨拶して後、おひな「今茶を運びたるを見れば、年頃と申し美しき娘、私にはおかくしあるな」といはれ、敵打の娘とは明して言はれず、「彼は寢間の伽に置きました。父上には御沙汰なし〳〵」「心得ま

した」と外の話に移し、やがて歸りゆきぬ。おひなは言はざれども、供に連れたる下女が饒舌りしより、箱右衞門が耳に入り、おひなに尋ねけるゆゑ、せん方なく云々の由委しく語りければ、箱右衞門おひなに知らさず、金太郎を呼びにやりけり。

十九段

金太郎使と共に、箱右衞門に對ひ、「あわたゞしきお使、何事で御座ります」箱右衞門何時になき顏付にて、「呼びたるは外でもない。いつぞやの緣談、汝が好む武家の娘、心立はおひなが請合、器量はよし、支度はよし、先からも望むとあれば、立派にして嫁に取らんと親は嬉しく思ひしに、われが申すには、私今年二十三歲、劍術のみにもあらず、武藝の修業最中、妻を持ち子など出來ては、おのづから武藝の妨などと口賢く申して、まだ一月も經たぬ内、お花とやら申す妾を抱へたる由、今日おひなが見たを、おひなは言はぬが、供に連れたるおさんがしやべり散し、おれが耳にも入りたるなり。定めて今迄お花を圍者にしておき、鼻毛を延したるゆゑ、嫁を厭がり、武藝の妨などと、心にもなき僞を申して、親の心に背く不孝者奴、何時其樣な心になりしぞ。是皆お花狐にばかされしゆゑなり。此後何樣な馬鹿をつくすも知れぬ、狐めを叩出して仕舞へ。それも徒は出まい。手切五十兩もやらば嬉しがりて出行かん。われが

口から言はれずば、己が言付けて追出さん」金太郎は頭を下げて聞居たる心の中に、知らぬ事とはいひながら、母の敵を打たんとする孝心の娘を、狐とは情なし、それと委しく語りては、人に漏れて敵打の妨ともなるべし、さりながら、心にもなき不孝者と思はるゝが口惜しく、思はず涙一雫。箱右衛門冷笑ひ、「其涙をお花に見せよ、悦ぶであろ。親が見ては愛想が盡る。いよ〳〵お花めは己が追出すぞ」金太郎「いかに其義は御免なされまし。お花を宿に置くは譯ある事、其譯はやがて知れ申さん」箱右衛門打笑ひ、「あゝ聞えた。お花懐胎になりしな。其子が嫁の腹に出來たなら、里の二親も嘸かしの喜、碌でもなき腹に出來ては噂もならぬ」金太郎「いえ〳〵、懐胎にはなりませぬ」「懐胎にならずば追出して仕舞へ」といふを、側に聞くお雛も敵打と知らざれば、女心に不便と思ひ、樣々とりなして暇をやるはやめる樣、詐言は濟みたれども、いふに言はれぬ金太郎が心の中、辛さ悲しさ口惜しさ、胸一杯に差迫り、打萎れてぞ歸りける。

二十段

去程に金太郎は、敵打のお花を狐に譬へられ、義の爲にする事を、不孝者と親にいはれて情なく、一日も早くお花に敵を打たせ、親の目をも覺させんと、日頃信ずる神をも祈り、熊藏、金吾

へも頼みて、お花が敵井原垣藏が行方を尋ねけるに、或日稽古の休日とて、山中熊藏、玉池の稻荷へ參詣に行きて夕方に歸り、金太郎に對ひ、「今日玉池の歸途留井を通りしに、植木屋の竝に、二間間口の竹格子の門柱に、井原垣藏と書きたる宿札、是ぞお花が母の敵と家を差覗き、見れば六十ばかりの親父と、二十七八に見ゆる面付逞しき男と碁を打ちて居たるは、慥に井原垣藏ならん」といふを、お花も傍より、「其男は眉毛太く鼻高、色白く口大きくはなかりしか」熊藏「いかにも其通り」お花「然らば彌垣藏に違なし。金太郎樣何卒打たせて下さりませ」「いふには及ばぬ。我も御身に敵を打たせ、疑受けし親の目をも覺させたし」お花是を聞きて部屋へ入り、大脇指持來り、「是は父の遺物、家に傳へし鄕の義弘覺えの業物、直樣彼所へ馳行き垣藏を切伏せ、母の恨を晴したし。助太刀なされて下さりませ」金太「心のせくは尤ながら、此所よりは一里半、案内知らざる夜の勝負は危し〳〵。今宵能々支度をとゝのへ、寐込に踏込まば袋の鼠、首取るは最易し」と、金太郎、熊藏、金吾支度なし、お花には、金太郎が鎖帷子を著せ、額には南蠻鐵を縫込めたる鉢卷、支度の品々取竝べ、おの〳〵刀に寐刃を合せ、燭臺照して飯を食ひ、頭を取りたる鹽鮏を肴となし、盃を取りて門出を祝ひ、一番鷄の聲を待ちけり。敵は一人、助太刀は手利三人、お花が勇む隼の雉を目がけし如くなり。

二十一段

かくて四人、時刻好しとて立出で、熊藏を案内として、垣藏が門に至りて打叩きければ、内より答へて門を開きたるは年寄の下部、四人の出立を見て驚き逃入りたるを見て、四人馳入りしに、座敷の眞中、後には小屏風、夜は明けたれどまだ枕元には行燈、夜著引被りて大鼾。言合せたる如く助太刀三人は側に立並び、お花は枕元に鐔元寛げて立ちながら聲高く、「やい井原垣藏、母の敵覺あらん。立上りて勝負せよ。かくいふは妙節が娘花なり。起きよ〳〵」と足踏みならせば、夜著跳除けてむくと起きたる顔を見れば、胡麻鹽の合總六十餘の老人なり。お花はびつくり人違、呆れて物も言はざりけり。此、老人も、三人が凛々しき出立にて立並びたるを見て、いよ〳〵驚きしが、臆したる色も見えずお花に對ひ、「母の敵覺あらんと申さるゝが、更々覺なし。わしは高砂一曲齋と申して能役者の隱居、人違も事による。朝がけの寐込へ踏込みたるは仔細あらん」金太差寄り、「身共は富田金太郎と申して劍術指南の者、此お花と申すは身共の門人、井原垣藏と申すは此お花が母の敵、是に居る兩人は内弟子。これなる熊藏、昨日此處を通り、井原垣藏とある宿札を見て、豫て尋ねし敵の家と差覗き見れば、いかさま其許と碁を打ち居たる男の面體、熊藏委しくお花に語りしに、其面體敵に違なしと申す故、打たせんとて斯くの仕合、

敵の住家は宿札が慥なる證據、垣藏は他出せしや。事によりては其方を人質となし、垣藏が歸る迄此所にあらん」一曲齋少しも騷がず打笑ひ、「いやはや、何もかも大間違、先茶でも上りて心を落付けてお聞きなされ。こりや權介、茶が出來たら皆樣へ上げ申せ」「はい〳〵」と盆に四ツ載せて持來る。一曲齋は心靜に寢道具片付け、居直りて、「右申す如く拙者は隱居、此家を買取り、一昨日引移りしが、隱居なれば、宿札も入らぬ事と、井原垣藏と記したる以前の宿札取除けんとは存じたなれど、引移りの取込に紛れ、忘れたるは年の癖。又昨日碁を打ちて居たるは拙者が甥、引越の手傳に參り、一晩泊りて昨晩歸り申した」金太郎「然らば垣藏が立退きたる所知り給はん」「いや更に知りませぬ。其譯は、此賣居をもとむる時、家主申すは、垣藏といふ浪人、店賃滯り夜逃いたしたとの事」と聞くに、一ツも手がかりなく、主人に粗忽を詫びて、四人すご〳〵立去りけり。此敵打は二十編に記し、引續き賣出し申候。めでたし〳〵。

安政五午仲夏　　九十歳　京山

賤の身も杖ゆるされてつくも髪うれしきものは命なりけり

口序

思ふ事言はぬ時は、腹ふくるゝといへば、お氣の毒ながら、例の藥の御披露。京傳店の、讀書丸、男大學藥、女はらみ藥、其外品々、直段も是までお耳にたこの入る程、お聞きあきもあるべきと存じますれど、御見物樣方のお耳にたこのいるのと、私の念に念のいるのと、何卒お差引下さるべく、其代に此卷は、本文讀つゞきの、折角おもしろくなつた所にて、さて御披露となれば、「エ、又藥か」とお邪魔にならぬやうに、こゝの端書の所を、板元より貰ひまして、記します。何卒御試しの上、品々御求めくださるべく、めでたくゝと、と書くところなれども、私が藥の御披露は、耳にたこのはいりたるゆゑ、みゝたこゝと。

昔隋の時、王舜といふ孝女、その父いとこなる者の爲に殺されけるとき、王舜わづか七歳にて、妹ふたりあり、一人は王粲といひて五歳なり、一人は王璠と言ひて二歳なり。この三人みなしごとなりて、由緣の家に養はれて、王舜ふたりの妹を深く慈みて、養ひ育てしかば、年頃になりて、夫々よき緣に付くべきやう言勸めけれども、更に聞入なくて、終に此三人のわか娘、親の敵を取れり。是は、女ながらも三人なり。本文のお花が身は一人なり。仇討の因によつて、これを玆に誌す。

敎草女房形氣　二十編上之卷

初段

さる程にお花は、金太郎及び二人の門人と、本意なく高砂の家を去り、稽古場に立戻りて樣々に考へけれども、敵井原垣藏の手がかりなければ、お花は殊に心を惱め、「此上は神佛へ念じて其在家をもとむるには、さしづめ靈驗あらたかなる此長谷寺の觀音を信ずべし」といへば、金太郎「それこそよかるべし。大儀ながら山中氏は北の方、坂田氏は南の方と、手を分けて尋ぬべし。やはか遠くは未だ行くまじ」といひければ、兩人も委細畏みしと、間もなく身繕して南北へと立出でけり。

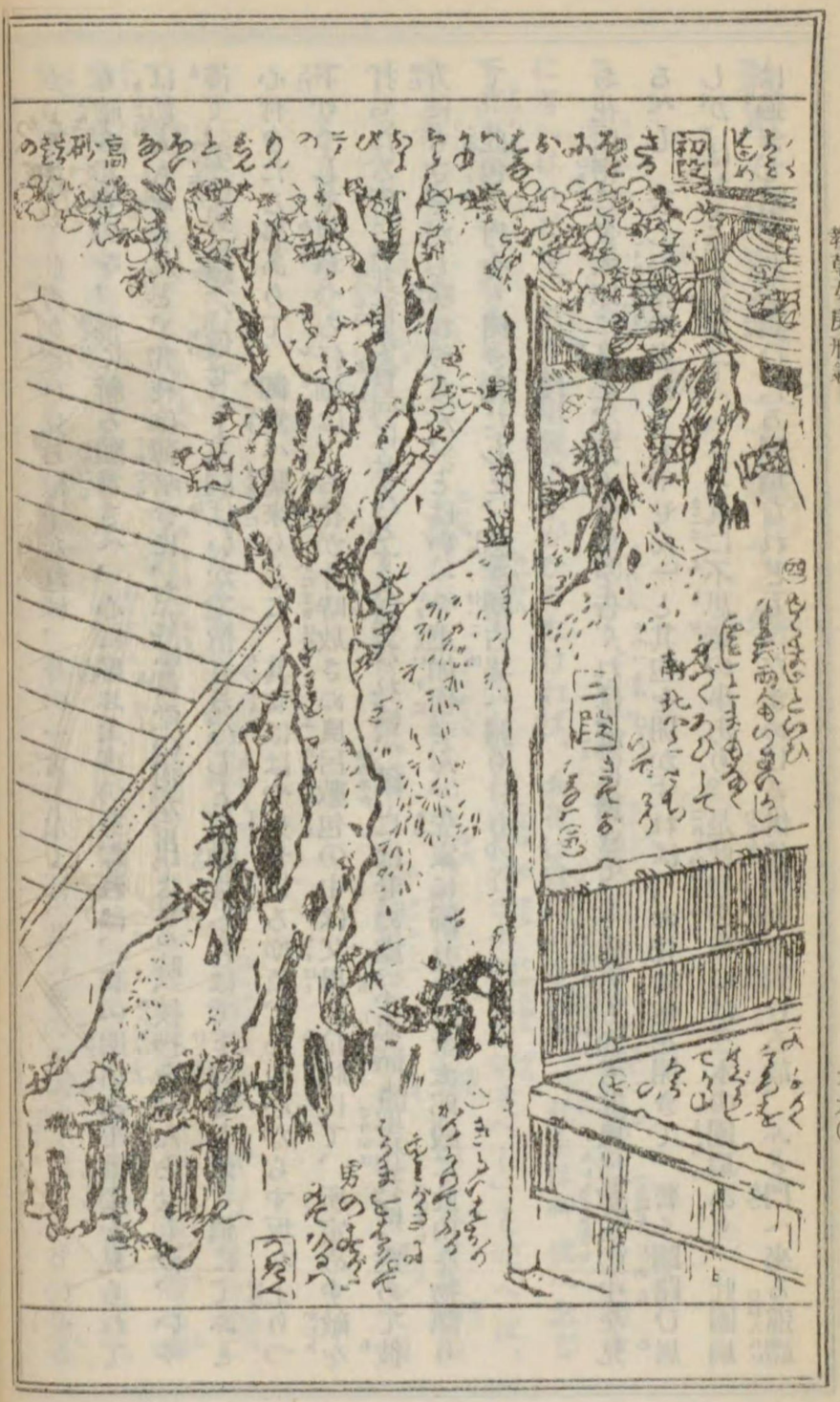
二段

さてお花は、深く心をめぐらして、金太郎の著類羽織を借受けて、深編笠に袴を穿きて男の姿にて、晝は鎌倉の町々の人立の中を彷徨ひ歩きて、垣藏のありかを尋ね、夜に入つては長谷の御堂へ籠る事はや七日にて、今日までの宿願なればとて、其夜は此處に信心し通夜してけるに、其傍に、年の頃三十越えし屋敷方の妻と見ゆるが、一心に觀音の御名を稱へて居たりしが、暗

がりを透して此方を窺ひ見る樣子なれば、身の一大事なくば、共に身の上を語合うて、互の憂をも晴さんものを、佛に祈る願言さへ、心に忍ぶ大事の身なれは、夜の明白みて此姿を見られては妨ともならんと、其夜は薄暗きに、お花は御堂の内を出でける時、挨拶をせんとせしが、いや待て、姿は男に變へ俏せども、詞はいかで俏さるべしと、物さへ言はで下向せしが、道にてふと心付きたる事ありて、御堂へ馳來りしに、其女ははや失せけるゆゑ、心も心ならず坂を上りつ下りつして周章つる仔細は、お花が片時放さぬ風呂敷包の中は父母の位牌にて、所定めず敵を打ちたる所に、其首を會向にせんとする程なれば、疎にはせぬ處、不思議と取代れば、定めて彼方にもさぞかし尋ねつらん、とはいへ今更如何せん、先家に歸りて、金太郎殿に此由を物語りて、此包の内をも開き見たしと、急ぎ稽古場へ歸りけり。

三段

お花は密に金太郎に見え、云々の事を告ぐれば、殊に驚きて、「先兎も角も其風呂敷包の中を見るべし、若し心當の者ありもやせん」と其包を開かすれば、お花は包を開きて、暫く躊躇ひ居しが、はたと手を拍ちて、「コハ眞に不思議の事あり。是此包の内には三本の團扇あり、此團扇は過ぎし頃、わが貰ひたる團扇なれども、なまめける俳優の面を畫ける故、ふと門へ來る巡禮



お花

の子に與へたる物なり。それが如何して、やごとなき女の手に渡りたるぞ。是不思議の又不思議なり」と驚くを見て、金太郎も腕を組みて、「さて〳〵奇なる事かな」と、其團扇二本を手に取りてお花にいふやう、「此團扇に畫きたる二人の面、日外途中にて我に無禮をせし侍の面に能く似たり」といへば、お花は殘りし一本を手に持ちて、「さういへば、此一本の畫にかきたる面、かの井原垣藏に能く似た面差。それといひ是といひ、不思議かさなる長谷の御堂。さては此三本の團扇再び我手に這入るはめでたき例、是につけてもどうか彼の巡禮に邂逅ひたいもの」と語る内に、金太郎團扇を包みし風呂敷にある名前を見付けて、小首をかたげ、「此風呂敷の端に、今出川内長橋氏とあるが、こは日外、身共に娘をくれんといひし亙殿の苗字なり」と聞いて、お花は迫いたる顏にて、「エ、、そんなら此風呂敷の主は御存樣か」「ハテ聲が高い。誰やら表に案内がある。誰ぞ取次がぬか」と目顏で知らせて、其品々取片付ける。其處へ下女が來りて、「御本家のおひな樣が入らつしやいました」「オ、左樣か、此方へ」といふ間もなく、おひなは何か心せわしく入來り、金太郎に物語もしたき樣子なれども、側にお花の居るを見て憚るやうなれば、お花は其色を悟りて其座を去りしが、心せかれて朝飯さへ食べず、屈託に困じける。さてお雛は金太郎に對ひて、「あなた如何しても、かをるさんとの御緣はきれませぬ」といへども、

金太郎にはさつぱり譯が分らねば、「そは又如何した譯で御座る」「如何したも無いものさ。其お心があればこそ、長谷寺へ昨夜お通夜をなさつたを、私は能く存じて居ります」イヤそれは人違といはんとせしが、昨夜お花長谷寺へ籠りたるなれば、若し敵の手がかりもあらん、お花我紋の付きたる著類羽織を著たるゆゑ、それを見付けて我なりと思ふも道理、兎も角も能く事を聞糺さんと、詞を濁らせて答ふるやう、「いかにもそれを見られては面目なし」「ナニ面目もなきどころか、さうなれば父さんも御安心、なんぼ物堅きお生れなるとも、私が兎や角おすゝめ申すを、一人で長谷の觀音樣を媒人とは聞えませぬ。何も私は水を注すではなし、如何か彼の子と御緣が結ばれば、私の嬉しさいかばかりか。いよ〳〵そのお氣ならば、事を急ぎてお貰ひなされぬか」「イヤ、夫には少し仔細がありて」「オ、其仔細はといふは」とお花が這入りし方へ指をさして、「彼の事ならん。そは如何でも身の振方を付けられるもの、さつぱりとした御返事を」と言はれて、一句も出でざる處へ、箱右衞門風呂敷包を持ち、かのお春を連れて入來り、「コレおひな、事は分つた。其方は早く宿へ歸れ。我金太郎にいふことあり」と指圖にまかせて、おひなは入りかはりて戻りけり。箱右衞門、金太郎に對ひていふやう、「此御方をよもや見忘れはせまいな」「されば、いつぞや本家にてお目にかゝりました、今出川の御家中長橋亙樣の御内

證」「さればよ、今此方より委しき話を聞きて、我も涙にくれておひなが歸を待ちしが、なかなかおひなが應對にては濟むまじくと我來りぬ。手前、昨夜長谷寺へ通夜を致したか」「イヤ、その覺は、オ、御座ります」「ハテ、したでもない、せぬでもない挨拶、手前如何程僞るとも、著類の紋の目標は、言ひくるめる事あるまいが、其處で此方の話を聞かつせえ。こなたの娘御、いつぞや手前に逢うてより、夫を一生の緣と思ひ定めて、侍く事に樂まれしが、ふと內々妻の定る事が知れて、さては叶はぬ緣と諦めよと、此お袋樣が意見なされし處、口にはハイといひながら、それより日に〳〵病重りて、お宿に下りて寢て御座れば、親の心は誰も同じ事で、何卒病氣平癒の爲とて、長谷寺へ七日の內火の物斷で籠らせられ、既に昨日が滿ずる日に、其方と二人御堂の內にて肩を竝べて通夜をする事、盡きぬ緣かと悅び給ひて、今朝早くお出がありて、此詳しき御物語。それにつきて不思議の事は、此風呂敷包の中を明けて見てより、チト心あたりがあれば、斯く人もなき處ゆゑ、手前の胸も打明けてくれよ。又其處らに居らるゝ若き女も、てまへの親なら何もかくす事には及ぶまい。此方とても娘を嫁せば親同然、こゝらの處を能く聞分けて、わが胸の安心をさせてくれ金太郎」と涙と共に言ひければ、さしもの金太郎も涙を浮めて、「こは勿體ない。あなた方に何を隱す事があらん」といふを待たずに、箱石衞門「ソレ　それが矢張かくすのぢや」といふ迄を、片蔭にてお花は疾くより聞居たりしが、忍ぶに餘りて其場へ轉出で、涙を拭ひて箱石衞門に對ひ、「其隱事を私が、さつぱりと言開きます。定めて私の身をも、親御樣始めおひな樣も、疑はしく思さんが、今のお詞を聞きますからには、何もかも打明けて、こなたの娘御かをる樣と金太郎樣の媒人は私がいたします。チト私に仔細あれば、私への義理に、金太郎樣父御樣へ僞もて、妾かなんぞの樣にいへど、私はなかなか夫を以て樂む樣な心の無いは、神佛が御存じで御座ります」と猶涙にくれければ、箱石衞門聲をひそめて、「そは我も知る事よ」「シテ何方より私が身の大事をば」「されば、其方の母御が殺されしは、私が地面の家なるものを、家守久七の知せに聞けども、今日迄は金太郎の妾とばかり思ひしに、昨夜長谷寺にて取換りし此包の中を見てからは、さてはと心の疑晴れぬ」といふを聞きて、金太郎「斯く事の明かに知るゝ上は、何をか包まん。義に依つて表向ばかり此お花どのを妾にしてより、或夜心を引きて見んと、酒に醉ひたる振にて戲言を言ひかけければ、肌身放さぬ父母の位牌を出して泣詫ぶれば、コハ天晴の魂と感じて、夫より我も勵みがつきて、熊藏、金吾を南と北へ、敵の在家を探しに出しぬ。まことは昨夜、長谷に籠りしは此お花」といへば、傍にうつむきし、かをるの母お春は驚き、顏を擡げて言ひけるやう、「コハ夢であつたか、

正しく見たるは男の姿」「イヤそれは其筈」云々の手だてよりといへば、お花かの團扇を持來りて、「此團扇は、どうしてお手に這入りました」と聞けば、「されば、此團扇の不思議をお聞き下され。娘の病氣平癒を祈りに長谷寺へ參詣して、始めてお通夜を致せし夜に、夢幻に觀音樣、お手に持ちし此團扇を、大事に持たば、娘の病氣平癒ありと下されけるゆゑ、七日の間御堂へ持ちてお通夜をせしに、ふと此包のとりかはりて、中を見れば二ッの位牌あり、風呂敷の端の印は、娘の緣談ありし名前なれば、是ぞ長谷の御利益にて、もしや緣も結ばれんかと、夫にかくしてお雛さんの家に至りて、云々と語れば、箱右衞門殿もお逢ひなされて、それより此所へ」と語る折しも、毎日稽古の若殿ばら打連れて來るが故、箱右衞門はお春を連れて、又我家にぞ急ぎ歸りける。

教草女房形氣　二十編下之卷

四　段

去程に又、妙節が殺されたる長屋の屋守久七は、大磯の廓の奉公人の口入をするものから、今日も此所彼所の出代を濟して歸らんとせし時、仲の町にて我娘に出會ひければ、「其方は昨夜歸らぬが、何所へ泊りし」と聞きけるゆゑ、娘抱持ちし三味線を見せて、「舞鶴屋の龜年さんの新造さんが、雪は巴の替唄を教へて下さんすと言はさんしたから、昨夜行きて泊り、今朝髪も結うてもらひました。時に父さん、いつぞや長屋内の妙節さんの所へ無心に來た怖いお侍が、彼所に居ました」といへば、久七驚きて、「アノ怖い侍といふのは、定めてそれこそ」と俄に屈託の面持にて、あたりを見れば人の往來も多ければ、急ぎ娘を引連れて我家へかへりける。これお花の敵の手がかりの始なり。

五　段

襄にお花を引取りし小道具屋の善兵衞の店前へ、一人の侍腰をかけて、粗末なる刀を袋より出して、「是を求めくれよ」といふ。善兵衞、中子から切先を瞰め見るに、正しく人をあやめた

る刀なれども、そを明かにいはぬは、心にお花の敵を尋ぬるがゆゑ、此侍に對ひて、「日那、あなたは御酒でも上つた節、犬でもお慰みなされましたな」といはれて、彼の侍煙草をはたきて、「イヤ、それは我物ではない」「あなたお求めなされましたのか」「イヤ、もとめたものでもなし、心やすき人に賴まれて拂ひますのだ」「シテ此持主は、如何なるお人で御座います」「イヤ、名乘る程の者でもない。いかにも目は恐しいものだ。其刀は貴樣が言はつしやる如く、驗にかけたが、見事に二人まで仕止めた業物、たゞ値打は其處ばかりさね」「ハテナ、左樣で御座いますか」「値段は幾らに買はつさる」「さればで御座います、凡て道具を買ふにも賣るにも、其御當人のお宿の知れませねば買はれませぬ。外に此位な物を欲がる者より賴まれて居りますから、隨分値段も好くお引取申しませうが、此御當人樣のお宿へ上りまして、値段を申上げませう。コレ小僧、おれが煙草入を奥より持つて來い。そして雪駄を出せ」といふを聞きて、「聊不正の品でないゆゑ、此所で値をつけて下され。チト買物の都合もある。モシそれが出來ずば、先へ返して仕舞はん。其袋へ入れて下され」と逃支度をするを見るより、善兵衛取逃さぬ樣に少し威しかけて、「イヤ、此間縣主樣よりお觸のある品に似寄の品ゆゑ、縣主樣へ御目にかけねば、後で私の身に難儀がかゝります」と、それよりせりあひになりし處へ、表に佇みし侍入來りて、

二人に挨拶して、「拂物とあらば、少しお見せ下され」といはれて、「以前の侍小氣味惡くや思ひけん、「イヤ、なか〳〵貴方衆の御覽なさるゝ樣な品では御座らぬ、眞の犬威なれば、持主の手前も如何。平に御免下され」と持歸らんとすれば、後の侍、「これはけしからぬ。前に拂物と御座れば、拙者此所にて金子をお渡し申す。いかほどで御座る」といふ折しも、女房奥より出でて、善兵衛を呼びけるゆゑ、奥へ行きて見れば、屋守の久七娘を連れて、先に裏口より來り居て、善兵衛に對ひていふ樣、「今店へ刀を拂ひに來たる侍は、かの妙節殿を殺せし垣藏と諸共に、舞鶴屋に昨夜居たものと、此娘が見付けていへば、どうか逃さぬ樣に捕へてたも。わしも力になります」と腕まくりするを見て、「さればこそ、わしが心にも最前より心ならずと思ひしに、よきものが入來りし。さはいへ、密に〳〵。だましておさゆるにしくはなし」と、また店へ走り出でて、二人の侍に對ひて、「コハお二人とも先此方へお上り下され。表は人立ありて見苦しき。イヤ何も兎や角申すは表向、金子御入用とあらば此處で買ひまする。又あなたもお望みとあらば、些の口錢にて直樣上げまするが私の渡世、先々此方へ」と彼の刀を持ちて奥へ這入れば、賣主も少し心落著きて這入る。後の侍、善兵衛を小陰へ招きて密に言ふやう、「拙者いさゝか訊ねる事あれば、どうか彼の侍の宿元を聞きて貰ひたし」といふに、善兵衛聲を潛めて、「私はいやで

も彼を押へねば叶はぬ事が御座います」「そは慥の事ありてか」「イヤもう慥にも、きつとした見知人も、今幸此所に參合せて居りまする」「オ、然らば心得たり。手前達は却つて邪魔なり、拙者直に捕押へてくれん」と首肯きつゝ、奥に入りて彼の侍の側へ行き、「私お拂の刀直樣此所にて買求めし値段、如何ほど差上げべきや」といへば、「御鑑定を持ちて相當に遣されよ」といふ折しも、右の手を、やつといふ聲もろともに捻上げて、「それ主人」と聲をかければ、善兵衛、久七立掛りて大小をもぎ取り、兩手を捉へて善兵衛いひけるやう、「あなたは井原垣藏殿の在家を御存じならん。それを明かに教へ給へ」といひければ、「コハ慮外千萬、我其樣な者を見知る事なし」「イヤ、さうありては、此方から申すべし。昨夜大磯の舞鶴屋にて、垣藏殿と一座をなされて御存じないとは、如何なり」と此一言の星を打れて、「さては、それを知る上は、何をか包まん。垣藏は家を駈落してより、只僅の知邊の方を今日一日と歩き、此程は彼に連れられて舞鶴屋に上りしが、三人の懐遣果せしゆゑ、餘儀なく垣藏、此刀を賣つて來いと賴まれたれども、拙者身内の者ではなし、ほんの遊友達なれば、彼が事につきて我を斯く輕しむるは如何の事」と彼の侍にいひければ、かの侍大音にいふやう、「あら、天なるかな、命なるかな。我その垣藏を探す爲、此所彼所を彷徨ひしに、圖らずも今垣藏の所在を聞きぬ。此所の家内の者も能く聞かれよ。我はそも富田金太郎の門人坂田金吾といふ者なり。今主人の物語にては、矢張垣藏を尋ぬるとありては、定めて妙節の由緣の者でありたるか」といふに、善兵衛、久七も打驚きて、「さてはあなたは金太郎樣の御門人とあるからには、此上よろしく計ひ給へ」と賴みければ、金吾かの侍にいひけるやう、「貴殿、垣藏の身内になくとも、垣藏の出でるまでは、拙者と共に來り給へ」と直に町駕籠を傭ひて是に乘せ、「久七も善兵衛も共に來れ」とあれば、皆々宿を立出でる。時しも建長寺の六ツの鐘、ゴン。

六　段

富田金太郎方へ山中熊藏立戻りて言ひけるやう、「私今日、朝比奈の切通の所にて、此脇指を賣拂ふ者ある處を、折しも通りかゝりて立聞いたせしに、其包みたる風呂敷の隅に井原氏と記してあるに、目のつくも天の網と、段々に責問ひて、僞言はど打果さんと、既に鍔元を寛げければ、明かに敵の所在知れたり」といふ折しも、表にて人聲かまびすしければ、熊藏走り出でて見れば、坂田金吾駕籠の内より彼の侍を引連れて、直樣金太郎の前へ赴き、云々と語れば、金太郎殊に喜びて言ふやう、「只今山中氏も」云々なりと語り聞せば、金吾驚きて、「世に不思議もあるものなれども、かゝる事は不思議の不思議なり。さらば先二人の者をお聞糺しあるべ

し」と座敷へ燈を照して、彼の二人を見れば、先頃金太郎に鞘を當てて喧嘩をしかけたる二人なれば、金太郎二人に對ひて、「貴殿等はいつ〳〵の日、我に追まくられて逃げたる覺あらん。武士として言語道斷の卑怯者、いづれの御家來にてあるや」といへば、二人は一句も出でず、俯きてのみ居たる。金太郎重ねていふ樣、「そはさておき、垣藏を打つ上は二人に科なし。大小なきものを打つは死人を打つも同じ事なるが、未だ賣らぬこそ幸なれ、此大小をもて垣藏に渡し、妙節の娘に立合ふやう言はれよ」と言聞かせば、金吾の連れし侍のいふやう、「仰御尤に候へども、垣藏は何をかくさん大磯の某の許に、酒色の價の爲に引止められたればこそ、斯く大小も賣拂ひ申すなり」といへば、「然らば我、其酒色の價を惠み、門人兩人に持たしてやれば、其所より往來の無き中、未明に由井が濱へ貴殿等も同道して、朋友とあれば、彼が助太刀をするとも苦しからず。必ず未練なきやう、金吾、熊藏、屹度言傳へよ。我はお花を引連れて夜明に彼所へ赴くなり」と、誠に仁あり義ある詞を感じて、さすがの惡漢も金太郎を拜して、二人の門人を引連れ、大磯へと出行きける。

七段

さるほどにお花は此事を聞くより、天を拜し地を拜して、其翌朝凜々しく衣服をあらためて、用意の一腰に身を堅め、金太郎は黑羽二重の小袖に緞子の小袴を穿き、紫吳羅の野羽織に、淺黃の紐を胸高く結びて、由井が濱邊に赴きける。

八段

金吾、熊藏は、井原垣藏を引連れて由井が濱に來れば、疾く兩人の至るを見るより、金吾、金太郎に告ぐるやう、「かく垣藏は引連れたるが、兩人の侍は、夜前の中に逃げぬ」「彼等には構なし。いざ〳〵」とお花に向すれば、お花、垣藏に對ひて、「親の敵思知らさん。いざ立上れ」と身構すれば、垣藏お花が前へ躊躇りて、大小を投出し、「イザ存分に恨を晴し給へ」とあやまり入りたる其姿を見て、怒の切先も挫けたるゆゑ、刀の背にて首を三度撲ち、髻を根元より切取りつゝ、懷より母の位牌を取出して、泣きみ笑ひみ回向をなしける。金太郎其心根を推量すれば、「いかに各、親の仇打取りてめでたし〳〵。其死骸片付けさせよ」といひつゝ、お花を促して立歸らんとする處へ、劍術の師匠楠左門、早馬にて來りて、遠目よりこれを見て、「出來したり〳〵。金太郎悅事あり、急ぎ我方へ來れ」と言捨てて、また馬を引返しければ、お花に山中をつけて家に歸しける。程なく金太郎は金吾を伴ひて、楠左門方へ赴きければ、表に鎗、箱、若黨など居たるゆゑ、是はやんごとなき客ありと中の口より上りければ、左門座敷に居て金太

郎を呼入れ、詞をあらため言渡すやう、「其方、過ぎし頃武者修業の節、越後の山道にて山賊を打ちて國の禍を拂ひし事を、右幕下君へ我殿より達しければ、其方を御譜代弓頭役に新規召出さるゝ旨御達しあれば、有難く御請の御禮廻の衣服、供の用意、鎗、箱まで我とゝのへおく、急ぎ彼所へ御禮をのぶべし」と達せられて、金太郎夢の如くの立身に、且驚き且悅びて頭を下げ、「まことに冥加にかなひし上の御取立、是も全く其方の御蔭、子々孫々忘れ侍らず。今朝望月の家臣薄田段五兵衞の妻の敵、井原垣藏を、彼の娘に打たせたる事、宜しく御披露願上げる」と言置き、間もなく鎗、箱を揃へて、玄關より出行きぬ。

九　段

お花は家に歸るが否や、佛壇に誓く回向して、翠の髪をふつつりと切りて尼になり、それを文に封じて、今出川の長橋亙の妻の方へ送り、また本家金有屋方へも委しく事の次第を文に書きて遣しければ、箱右衞門始め皆々入來りて、敵打濟みたる喜、又尼になりて親の菩提を弔ひ、又今宵かをると金太郎と盃さする事の計なぞ、殊にめで居たる處へ、金吾、左門の方より戻りて、金太郎の立身を云々と物語れば、箱右衞門始め皆々悅び、さらば今宵はかをると祝言旁、立身の祝も手厚くせんと、箱右衞門の指圖にて言付け、一類及び重忠殿の身内の者は楠左門を始め、殘る方なく使を出しける。

十　段

かくて晝過には、其所彼所の禮を濟して、金太郎、鎗箱にて我家に立歸れば、皆々出迎へてことぶき、箱右衞門、お花が成行を物語り、また今宵かをると夫婦の盃をするに、疾く定めたる事なぞ委しく告ぐれば、金太郎、お花の心底をいよ〳〵愛でけるゆゑ、急ぎ熊藏をもて望月家へ敵打の事を達しければ、望月家より金太郎方へ、直と使者を以て莫大の祝物を賜りて、門人山中氏を家來に貰はれ、お花は中屋敷に引取りて、子を貰はせて家名を立てさするとなれば、有難く御請をして、その如くにはなりし。時しも重忠殿よりは、坂田氏を貰ひに來れば、是も悅び、直樣赴きける。夕鴉の聲さへ、かさねぐ〳〵の悅び啼、カア〳〵〳〵。

十一　段

さてかをるの母は、緣の結ばる事をかをるに語りければ、俄に病も癒え、悅ぶ時しも、お花がおこせし文を見て、足元から烏の立つ悅に、夕方より道具を先に、かをるを駕籠にて送らせ、千秋萬歲の盃を取交しければ、一家一類及び因緣ある者は殘らず來りて、莫大の饗應、酒に浮れて四海波、風に腹鼓を打つて壽きけるは、是偏に長谷の利益なる事を尊ぶべし。彼の井原垣

藏は、お花が慈悲にいよ〳〵感じて僧となり、長谷寺の内に庵を結びて、一生お花の先祖を弔ひけるとなん。されば慈悲は德の基なりといふぞかし。めでたし〳〵〳〵〳〵。

京山遺稿

故人京山翁、教草を培ひて稗史の鉢植とせられしに、言葉の花美しく、實所さへも多ければ、年々歳々に其蔓繁茂して、既に二十の卷を重ねたりしに、惜哉翁は遠行有りて、于粤根を斷たんとするを、錦橋堂の主人遺憾に思ひ、翁の男京水子に托して幸に遺草を得て、僕に補綴せよといへど、是ぞ花を襤褸に包むの所爲なれば、固辭なすを、書肆笑つて、不知や、驥の尾に附く時は、蒼蠅も千里を行くとの一言に、忽地はたと手を拍つて、筆を嘗むる絆とはなれど、謾に清流を汚すの譏、遁るゝに所なからんかし。

萬延二辛酉春開鐫　　鶴亭秀賀誌

むかし唐土周の代に、宣王といへる天子ありて、姜夫人といへる美人を愛し給ふ事大方ならず、皇后となして、常に側をはなたず、晝夜淫酒にふけりて、あさまつりごとを怠り給ふゆゑ、群臣これを歎き、諫め奉れども、更に聞入れ給はず。しかるに尹吉甫といへる忠臣、これを深く憂ひ、斯くては、自然天下の人氣に背き、つひには國家亂るべしとて、死をおそれず一書をつゞりて、御前へいでて、その表をたてまつりけるに、宣王御酒宴の半にてありけるが、大に怒らせ給ひて、表を大地へ投棄て給ふを、皇后あはれに思ひ、侍女にとりあげさせて、披き見給ふに、姜皇后のあるゆゑに、政事を怠り、武を忘れ、晝夜淫酒にのみ耽り給ふが、今にも國の亡ぶる時こそ思ひあたり給ふらめ、願はくは、姜皇后を殺して、その愁を拂ひ給へ、とありけるを、なみ〳〵の女なりせば、いかにや怒るべきに、姜皇后は賢女なれば、却て尹吉甫を賞し、みづから釵をぬき捨て、衣裳をぬぎ、王の前にひざまづきて、其表を讀み、これ吉甫が諫尤なり、皆妾のあやまちにて、王の咎ならず、早く妾を殺して、以後淫酒をつゝしみ、國を他人に奪はれ給ふな、ト泪と共に諫め給へば、

宣王も亦聖王なれば、はやくも心をひるがへして、皇后と吉甫を大に賞し、是より淫酒をたちて、其過をあらため給ふにより、萬臣鼓腹して悅び、姜皇后の賢女なりしを讚めたりしとかや。寔に難有意とも言ひつべし。こゝに夫とは表裏にて、愚の亭主を尻にしき、己が氣隨に樂を極め、家藏までも失はせ、其身は娵にありながら、姑たるべき親をいびり、邪見非道に做せしといふ、女房の譚の筆を起しぬるが、これ教草の第一とすべき事にて、譬へば面は菩薩の如くなるとも、心は夜叉とも言ひつべく、かの甘口な菓子ならねども、みめより意の美しき人を、寔の美人とは言ふぞかし。されば賢女の行と、惡女の行との差別を、人に知らせんため、こゝへは賢女の傳をあげて、些勸善の意を含むのみ。

腰ばかりたとへ柳のほそくともこゝろのふとき人のおそろし

鶴亭主人

教草女房形氣　二十一編上之卷

山東京山遺稿
鶴亭秀賀補綴

發端

昔鎌倉雪の下米町といへる處に、黃金屋爲右衞門といふ金貸ありけるが、主人爲右衞門の素姓を尋づるに、元は越後の國なる小まへの百姓の息子なりしに、土一升金一升の鎌倉こそ金を貯るに好き所なりとて、二十二歲の冬、一稼せんと此東へ來りしに、賴みに思ひし國者は店者なるが、引負ありて暇になりしと聞き、賴む樹の下雨降りて、餘儀なく先彌九郎町に宿取りて、日毎に此所彼所と歩き見るに、行く所も〳〵押返す如きの人通りに肝を潰し、田舍の鎭守お祭にても、此樣に人は出ぬものをと、魂消た顏を見てとるばい人、ほん引といへる者袖を引き、「こゝれ兄さん、お前のお國は越後であらうな。私も越後の柏崎生れ、兎角に國者は戀しいもの。何と私の出入場で奉公人を尋ねて居るが、行く氣はないか」と優しく詞をかけられて、地獄で佛に逢ひたる如く喜び、「よき奉公の口あらば」と賴みければ、ほん引も喜び、軈て人宿へ連行きて一分に賣りて、其者は何處へ行きしか知れざれど、今更せん術なく、宿の親方といへる者の子分になりて、先酒屋の御用といへる者に入れられける。

二段

さるほどに爲右衞門は、始の名は爲助とて、かの人宿へ賣られ、酒屋の御用となりけるが、田舍より駈出の事なれば、此所彼所よりの誂へも數多きに覺えきれず、裏店住居の內儀さん達に、年中叱られては頭を搔きける。「オイ伊勢屋さん、さつきさう言つた酢は如何した。又忘れたのか」と、どなられて、詫して此方へ來ると、井戶端に居た大家さんのおさんが聲かけて、「先刻の御神酒は如何した」といはれて詫すれば、おさんは膨れ頰して、「おいらの處では、三日はお神酒を上げた餘を酒鹽にするのだから、それではお晝の間には合はない。おへないおしなだ」と言へる女こそ、信濃の者にやありぬべし。爲助は越後の者なれば、それを心にかけるにあらねど、是ではとても、うだつは上らじと、彼の親方の許へ行き、暇を願ひてくれよと賴めば、散々叱られし上に、今度は湯屋の木拾に入れられけるに、素より無筆の事なれば、「木拾入るべからず、家主」といへる札をも讀む事ならねば、大家に叱らるゝ事毎日にて、是ではとても辛抱して三介になる事も難かるべしとて、又湯屋を暇を貰ひ、今度は雪の下なる米町の越後屋角兵衞とい

へる米屋へ這入り、米搗となりけるに、こは素よりの馴れたる業といひ、且は力の飽くまで強ければ、竝の者より臼數も餘計に搗きて、其上に色も白くして、米に光澤あれば、主人角兵衛悅びて、殊には同國の者と聞き、殊の外に可愛がられ、爲助も此所なら辛抱して見んと、夜晝の差別なく働きけるが、素より酒も烟草も呑まず、女郎買ふ術も知らざれば、少しの金も貯りけるゆゑ、角兵衛は其正直と辛抱のよきを見て、おのれ店請人となりて大濱の搗屋を始めさせけるに、量屓にする旦那場澤山出來て、次第に手廣くなりにける。

三段

角兵衛は是を聞きて大に悅び、一人住にてはさぞ不自由ならんと、我方に勤め居るお糠といへる女は、至つての稼人なれば、是を爲助の方へ女房に遣しけるに、夫婦中もよく、爲助毎日外にて稼げば、おぬかは内にて人の著物のあらひ洗濯を爲し、又木綿の物なれば、如何か斯うかまろめけるゆゑ、是も段々得意場殖え、夜も八ツ七ツまでづつ夜業を爲せば、爲助其傍にて俵を解して、是をつたに切りて賣代なし、夫婦諸共に少しの油斷なく稼ぎけるゆゑ、爰に十年暮すうちに、五十兩ばかりの小金溜りけるは、實に人間の一心にて、身より絞出せし膏なりかし。爰に爲助を世話なせし越後屋角兵衛は、如何なる不運の人なるや、一年疫癘の痛く流行し時、夫婦諸共に死に失せけるが、素より子といふ者もあらざれば、親類の者打寄りて、後の取片付などを爲しけるに、爲助は力を落し、わが恩人を死したりとて、親身にかけて後の世話をなしけるが、どうせ他人に賣る家なりと親類の勸にまかせ、三十兩にて此跡を引受け、家名もあらためて黃金屋爲右衛門と名乘りて、以前の如く米屋を爲しけるに、總て外々より安く賣りけるに、人の心は汚きものにて、黃金屋の米は搗も白く、炊くと殖え、一勺宛も安いと評判高く繁昌なしけるが、段々お屋敷方の搗入御用も承るやうになりければ、是では店の狹きとて、三間間口の上に又三間建續ぎて、今は米町にも一二と呼ばるゝ程の大店となり、番頭小僧も多く抱へ、地面も買込みて家附地主となり、土藏も四ツ五ツ建竝べて、諸方の御勝手へ金子の御用も達すやうになりけり。僅此家を買ひしより二十年の內に、斯くの如くの分限となりけるが、如何なる仔細ありてや、俄に米屋をやめて、金貸にぞなりける。

四段

然るに、爲右衛門は如何なる緣にや、子といふもののあらざれば、朝夕是を深く歎きて、斯くまで黃金を溜むるとも、我死せば誰にや讓るべきと、是より初乳山の聖天を祈り、何卒一ツ子を授け給へ、然る上は、其者の身上を潰すとも厭はじと、一心不亂に祈誓をなしけるが、さすが

は驗證の利益著き御神なれば、無理な願も納受ましく〳〵てや、いつしか妻のお糠は胎りて、安々と男の子を生みけるが、今年爲右衞門は五十二歳、おぬかは四十五歳の初産なり。さればこそ夫婦のよろこび言ふもなか〳〵おろかにて、是を奈久四郎と名づけて、乳母よ守よと召抱へ、爲右衞門の日頃の儉約にも似ず、奈久四郎の事とだにいへば、金銀のかゝるを惜まず、いふがまゝに育てけるが、奈久四郎は人となるに從つて、賢からずといへど、親の光に包れて、お坊さん〳〵とて持囃さるゝを好き事として、人を見る事何れも奴僕の如く輕しめて、上見ね驚に育ち、成人するに從つて我儘氣隨になりけるが、十七歳の春父爲右衞門は、ふと風邪の心地と打臥せしが、年寄の事なれば、さして重きとも思はぬ病にて、幾日もあらずみまかりぬれば、家内はいともしめやかに、力落してひつそりと、濕りがちなる五月雨の、空かきわけて杜鵑、啼くのみなるに、奈久四郎は一向平氣にて、はや此頃は稽古所歩き、茶屋這入、または廓へも度々通ひけるが、間もなくおのれの家督となりしかば、大に悅び、金銀を湯水の如くつかひける故、襟元に附くは浮世のならひ、それ相應の者までも、旦那〳〵とそやすにぞ、奈久四郎はたまにも家には居らず、大名氣取となりて、遊の馬鹿を盡しける。是ぞ諺にいふ如く、親は苦をする、子は樂をする、孫は如何と、心ある者は、眉打顰むるも多かりしとかや。

五段

さるほどに、母のおぬかは是をいたく歎きて、或日我居間へ奈久四郎を招き、老の癖とてまづ涙を浮め、「これ奈久四郎、御前もう年頃なれば、遊女狂もちつとは無理とは思はぬが、此間の樣に、家にといふは只の一日も居た事のないやうでは、店の者の手前もあり、又私の案じる事も何樣であらう。今の身持では、お父さんと私と夜の目も寢ずに仕出した身上も、直に無くして仕舞ふであらうとて、番頭の粉助も心配して、嫁を貰ふが好いといふから、疾から探して居ても、長し短しで、如何も思ふ樣な嫁が無くて居たが、恰度お父さんの田舍の大盡に好い娘御があつて、此節此鎌倉へ來て、親類の太良福屋太利右衞門さんの處にお出の由、幸ひ似合しい緣ゆゑ、昨日粉助に言込ませしゆゑ、いづれ近々見あひをして、おめでたく引取るやうにならうが、此節の樣では、譬へ嫁が來ても辛抱が出來ませぬ」と意見をされて、奈久四郎心の内には、成程身持の事は惡けれど、そんな田舍者を嚊アにする事は厭と思へど、まさかに厭とも言兼ねて、只うぢ〳〵として居たれば、母のお糠は、まだ子供氣の失せずして、恥かしく思ふならめと、嫁の話は暫くおきぬ。

六段

奈久四郎は、それよりおのれの居間へ來て、猫股新道なる清元延羽根といへるに敎りし、落人を、甲外の鼻唄に諳ひながら、亂箱より烟草入を取出し、提物の珊瑚樹と金水晶とを取替へなどして、娛み居たる處へ下女のおむぎ、「若旦那樣、枳殼庵とやらいふお方がお出なさいました」「此方へお通し申せ」といふは、俳諧の宗匠幇間半分にて、年中かゝる有德の町人のみへ入込み、仕著を貰ひ、いつでも行丈の合ふといふ事なく、今日の出出は、お召縮緬の丸ッ頃、下著は華美な唐更紗のお化、帶は筑前の眞物なれど、靑竹色の一本獨鈷は、さる大家にて福引に出せし籤に當りしを締めて、羽織は或所の御隱居さんの遺物に貰ひし郡内の碁盤縞、小さき小太刀をきめて、扇ばち〳〵入來るは、醫者ともつかず、茶道ともつかず、誠に半可の人品なり。奈久四郎、「和尙まことに久振だが、如何したよ」枳殼「いや、申譯のなき大御無音、其後は貴顏拜面を得ず、何時も御機嫌能く御座りけん、珍重恐悅めでたく大慶」奈久四郎「これさ、そんな消息往來は止して、商賣往來の話にするが好い。あの何時か小僧に持たせて上げた卷は、まだ點が出來ずか」枳殼「成程、延引致して恐入りましたが、やうやく今日持參」と恭しく紫の縮緬の紙紗より、運座の卷を取出すを、奈久四郎內々にて是を披き見て、莞爾として居たるは、我句に

のみ點のかゝりしならん。是は枳殼の嘸當てし調合點なれど、奈久四郎はそれを知らず、喜の餘り朱料とて遣すを見れば、慥か櫻の三ッ四ッあると見えたり。斯くて奈久四郎はいつもの如く、酒を言付けければ、程なく腰元の運出し、これより一人差向にて、酒宴を始めたる處へ、また一人の幇間撥八といふ者の入來りて、いよ〳〵文珠の智惠にて、觀音の御陣へ攻入る評議となれり。

教草女房形氣　二十一編下之卷

七　段

「サテ出陣とせう」攪八「これは御尤、然れば拙者は先陣に進み御注進申さん。枳殻子氏は殿を して來給へ」「それぢや大將直で御座いますか」奈久四郎「さればサ、西月樓にて、もそつと女軍勢を驅集める事としやう」と、是より彼の二人を連れて西月樓へ行きけるに、追々に聞付けて入來りし末社都合八人となりければ、いざ押出さんと、河岸より船にて大磯の廓へ行きけるに、濱口巴屋といへるは、兼ていきつけの茶屋なれば、亭主、内儀さん、娘分、若い者を始め、料理番、飯焚まで出迎へて、黄金屋大盡の御出とて持囃され、此所にて又酒宴を催し、見番藝者を三組揚げて惣纒頭をうち、暫し大騒となる内に、舞鶴屋のお職舞鶴といへる馴染も來りければ、其同勢にて又舞鶴屋へ行き、此所にても、やりて、立番、若い者、不寢番、風呂番、料理番、飯焚、水汲までに行渡をつけ、金銀は地より湧出づる物とばかり思ひて育ちし奈久四郎の全盛なる遊には、いかほどづつの散財なるや、今にも黄金の罰あたるべし。そは二十二編に綴れば、出板を待ちて讀み給ふべし。

八　段

黄金屋の母おぬかは意見もなせど、奈久四郎の斯くの如きの身持なれば、店の者にも引負横領する者もありと聞けど、それを詮議せんにも、先肝腎の主人の身持より直さずば役に立たじと、番頭籾助に相談なして、彼嫁を急ぐべしと太良福屋へ申入れ、見合の日を取極めおき、不承知をいふ奈久四郎を、無理無體にすゝめて見合に連行きけるに、田舍娘と思ひの外に、是やまことに天津少女とも言ひつべきあざやかなる美人にて、笑へば百の媚ありて、ぞつとする程美しければ、母は素より奈久四郎も、只氣をも潰すほどなる故、早速承知をなしければ、彼方も奈久四郎の男振好く、其上厄介はなし、金はあり、否といふべき筋なければ、雙方全く相談とゝのひ、吉日をえらみて、婚姻めでたく調ひけるに、夫婦のなからひ至つて睦ましく、是より奈久四郎は外へ出づるといふ事なく、岡目にはちと見憎きまでに氣に入りし樣子なれば、母のおぬかも心にかなひ、奈久四郎に優りて可愛がりけるも宜なりかし。未だ年は十七歳の半元服なれど、心の氣轉の働く事なか〳〵年寄も及ばず、尤も詞は少しをかしけれども、さすがは大盡の娘なれば、糸竹の道は更なり、香、茶の湯、花むすぶ事までに秀で、其外とても藝の道は、何一ッとして知らずといふ事なく、其上兩親の躾嚴しかりしかば、縫針の道はおろか、すゝぎ洗

濯、飯焚く事まで仕込みてありしかば、下女下男に至るまで、自然と敬ひて、お内儀さん〳〵とぞ尊みにける。いまだ其名を書落せしが、越後に生れしゆゑか、または色の白きによるか、お雪とぞ呼びなしけるが、女は言葉の早くぬけるものにて、一ト月二タ月たつうちに、誰が見ても、田舎生れとは思はれざりしとかや。

九段

しかるに、奈久四郎は物厭をする性にて、かくまで氣に入りしお雪をすておき、又もや此所彼所と浮れ歩き、夜泊日泊を始め、外を内なる遊興に、多くの寶を打棄てけるが、今日で丁度三日三晩家へは歸らず。母のおぬかはいたく氣をもみ、嫁の手前も如何なりと、内々にて番頭の粉助を迎へに出しけるに、是も身分不相應なる圍者ありければ、其所へ行きて一日遊び、夕方にはぶらりと歸り、「今日は一日彼所此所と心あたりをお尋ね申しても知れませぬが、それとも私には隱すかも知れませぬ故、明日は手段をかへて又まゐります」と出傍題も、正直なおぬかは眞とおもひ、一人くよ〳〵案じ過して居る處へ、入違に嫁のお雪入來り、しばし世間の話などして、母の機嫌をとる。お雪「母さん、ちとお隙ならお肩を揉みませう」母おぬか「いや、私は一日斯うして樂をして居るゆゑ、肩ははりません。お主こそ一日働くから、嘸くたびれるであらう。ちと休息をするが好い。併し奈久四郎の馬鹿が、何を恍惚けたのか知らないが、お前の來ない内でもこんな事はなかつたに、二三日は内へ歸らぬ樣子、大方お屋敷の旦那方のお交際であらうから、お前もさみしくとも我慢をしておくれ」といふも、子の身持の惡かりしを隱さんとの心なれど、嫁の身にとりては、今迄はこんな事もなかりしに、我が身の來しよりこんな身持となりしと、姑のあてし言葉かと、あらぬ事までに氣を廻すは、嫁の辛さの辛抱どころにて、お雪は少し顏を赤めつゝ、お雪「殿方のお交際にいらつしやるは、當然で御座いますから、私は寂しくとも構ひませんけれど、お年をめしたあなたのお案じなさるがお氣の毒で御座います。是も私がこんな田舎者で御座いますゆゑ、お氣に入らぬのも御無理とは存じませぬ」母おぬか「なに、勿體ない、お主みたやうな嫁さんは、金の草鞋で探しても、又とある事ではない。それを澤山さうに思ふと、奈久四郎に罰があたります」折から下女のおひえ「御新造さん、枳殼さんが内々でお目にかゝりたいとて、お店にお出なさるさうで御座いますが、お逢ひなさいますか」お雪「母さん、如何いたしませう」母おぬか「なに、枳殼さんなら、大方奈久四郎の使であらうから、おぬしお目にかゝつて、早く奈久四郎に歸れといつて貰うがいゝ」お雪「かしこまりました」と立つて行き、挨拶かはりて、「何御用」ときけば、案の如く奈久四郎の使にて文を持來れり。披き

見れば、「お屋敷の旦那方のお交際にて遊びに參り、金子差閊へ候まゝ、母さんに内證にて、用簞笥の下の引出にある金子百兩、此方へ渡してくれよ」との頼みの文なれば、心よく百兩の金を渡し、枳殼を歸し、又母の居間へ來れば、おぬか「枳殼さんは何しに來なすつたえ」お雪「矢張若旦那のお使にお出なさいましたが、お屋敷のお交際ゆゑ、母さんにお案じなさらない樣に申しておけとの事で御座います」おぬか「それでも、馬鹿も家のある事は知つて居ると見える。ハヽヽハヽ」折しも暮六ツの鐘ゴオン〳〵〳〵。

十段

お雪の里より、附人として來るおくちといへるは、至つて氣立の好きものにて、殊の外の主思ひなるが、此程は奈久四郎の遊にはまり宿に居らねば、お雪の心を察して、共に苦勞をなしける。おくち「あなたえ、今夜もまた若旦那はお歸がないと見えます。今うつのは四ツで御座いますから、最うお寢ませんか。それにあなたはお癇の性で、お寢付が悪くお出なさるから、此間お使に參りました途中で求めて參つた草艸紙、是をお枕元で讀みますから、聞きながらお寢なさいませんか」お雪「さうかえ、それは嬉しいけれど、本を讀みながらおぬしに寢かしつけて貰つては、なんだかねんねえ見たやうでをかしいから、其本を私に貸しておくれ。讀みながら臥らうから」おくち「なに、かまひませう。ねんねえ見たやうでも、赤坊さん見たやうでも、外に聞人は御座いません。ほんに其ねんねえで思出しましたが、此間もお里へ參つた時、彼方の御夫婦樣の仰やるには、未だねんねへの沙汰はないかと仰やいましたが、何卒はやくお出來なさるとよろしう御座います。すれば若旦那も、お内にばつかり入らつしやる樣になりますから。それには此本の中にも御座いましたが、京山の家では孕藥を賣るさうで御座いますが、それでもお服みなされば好い。オヤ草艸紙に足利絹といふが御座いますよ」お雪「されば、其本はどんなにか面白からう」「オヽ其絹で思出しました、昨日岩城桝屋から、どんなに好い新形の反物をいろ〳〵致しましたから、明日御覽なさいまし」としめやかに語りけるこそ睦しけれ。

十一段　話横道になる

此所は淺ふさはや町の新道、いと清かなる家のみならぶ其がなかに、二間間口の格子造、入口に四尺の切庭ありて、沓脱の石は慥にねぶかはなるべし。尤も二階附にて雪隱もありて、手廣くはあらねど狹くもあらず、親子二人の女孀も、かの花咲くの譬にもれず、母は五十の上を二ツ三ツも越えしと見えて、額に皺の浪立てて、腰は梓と曲れども、まだいと健なるがんじよう造、娘はおひきとて、顔容は揃へども、糠袋一ツ縫ふ術も知らず、褌の洗濯までを親

にさせ、三度の食も据膳にて食べながら、飯の剛し柔しと、何時でも膳にさへ向へば小言をならべ、こき使はるゝも、此おひきの庇で其日を送る故なれば、母は朝も疾く起きて飯の支度とゝのへ、掃除も濟みて、それより烟草盆に火を入れておひきの枕元へ持行き、母「さあもう起きても好いよ。これおひき、今朝はお店の都合次第で、旦那が芝居へ行くから、支度をして居ろとお言ひぢやないか。最う五ツも疾うに鳴つたよ」おひき「あいよ、知つて居るよ」母「知つて居るなら、早く起きるが好いわな」おひき「それでも如何したのか、今朝は眠くつて起きられない。後生だから最些と寢して置いておくれ。そしてお前お腹が空いたら先へお上りな」と寢反うつて又睡らんとするにぞ、さすがは血を分けし親子ゆゑ、今少し寢さしたしとは思へど、若し旦那と賴む人の來りなば、間の惡からんと、さあ眼覺に一服呑んで起きるが好い。今朝は朝顔のどんなに好い花が咲いたらう。それにお前は外へ行くのじやなし、芝居に行くのだものを」と無理に引起しければ、不承々々に起出でて、床も仕舞はず、火鉢のはたに坐りこんで、散々烟草を呑み、それより眼を摩り〳〵楊子箱を取出し、兩房の楊子にて齒を磨きながら、昨夜藥師の緣日にて買來りし朝顔の鉢植を眺めて居る處へ、母は嗽茶碗に汲立の水を持來るを、御苦勞とも言はずに嗽をすまし、其上手拭までを取寄せて、それより直に朝飯を仕舞ひ、小引出より

巾著を出して帶へ挾み、手拭提げて出行くは、向ふ横丁の湯屋なるべし。

十二段

かくて暫くありて歸り來り、通の方に對ひて鏡臺を据ゑ、髮を撫でつけなどして、それより肌を脱ぎ、胸まで白粉をつける時、乳を見るに、未だ島田に髷は結へど、定めて年は二十歳の上を五ツ六ツも超え、子供も一人や二人は產みし樣なるに、恥しとも思はず、眉毛を剃らぬは、見てかゝる者の常にして、賣物に花を飾るの故なりかし。然る處へ、彼の黃金屋の番頭籾助は、今日も若旦那を探して來んとこしらへ置き、おひきを連れて芝居へ行かんと入來りければ、おひきは周章て化粧を仕舞ひ、此間籾助にねだりて岩城桝屋より買ひし縮緬の養老絞に、紫縮緬の丸帶とは、ちと華美な拵なり。籾助は、莞爾としながら、「遲くなつたから、船より駕籠で走らす積に今言付けて來た。それぢや母ア、お土產をどんと取つて來るから、おとなしく留守をしてくんなせえ」と言置きながら、折しも來りし駕籠に打乘り、三枚にて走らせにける。

十三段

さても籾助は、春若町なる例の茶屋へ行きけるに、素より主人の金を掠めて遣ふ事ゆゑ、きびきびと切よく、飽まで贅澤をなして見物なし居たるに、ふと見れば囚の八番に、今年まだ十三

になる小僧の早吉といへるもの、割込にて見物なしてありけるが、思はず互に顔見合せて、小僧早吉「これは番頭さん、お早う御座いました。私は今しがた參りました」番頭利助「お早いもないもんだ。手前は使に來たのであらうに、早く歸れば好い。まア此方へ來い」と呼寄せていろいろの物など食はせ、其上に一分やりて、利助「さア早吉、手前は歸るが好いぜ、おいらは若旦那を探しに來たのだから、まだちと手間が取れる。併し此所で逢つた事は誰にもいふな」と口止して歸しける。此の如く、身分不相應に店の者まで奢りちらす故、たとへ黄金屋の身上、如何程なりとも堪るべからず。是肝腎の亭主の一心おろかなる故にて、親の丹精して組立てし家を破滅させ、剰へ彼の大磯の舞鶴を受出して、貞女たるお雪を追出しけるに、此舞鶴は名におふ難物の悪たれ女にて、おのれ嫁の身として、姑をいびりさいなむ事などは、二十二編に説きたれば、出板の時を待ちて、御もとめ御覽を乞ひ願ひ侍るになん。めでたし〳〵〳〵。

印分 又遊女を傾城といふ媚を賣め故ひとをして城を傾けあるいは笑ハ国を傾るとの故事ゆより或ハ美色を傾国の媚ありとも云ふ亦我朝にも遊女ハいと古くよりあるとぞ萬葉集ゆ遊行婦女の哥あれど時代遥みに其事跡分明ならず盛衰記平家物語などゆ島羽院の御時島の千歳和哥の前と二人の遊女あり舞の上手なりしとぞ是ぞ白拍子の始めなり遊女の盤觴といふも白拍子と言るハ近世の

哥舞妓の類

△きさらぎされど遊女ゆ延喜帝の御字ゆ江口の里ゆ白拍子といふ一遊女ありて能く哥を詠みしと有バその起原のいと久しきもの遊女と今の遊女

白拍子ハ妓女の輩ゆ郢曲をうたひ箏琵琶を弾ぜしふるき書ゆ見へたり

○是ハ昔の遊女の化粧考の圖ゆ我文柳園の藏ゆ所得てうつす繪圖を

印分 ○是ハ妓女の輩ゆ郢曲をうたひ箏琵琶を弾ぜしふるき書ゆ見へたり

○是ハ昔の遊女の白拍子ハ今いふ藝子の類なり扨白拍子の始ハ兼好法師の徒然草ゆ磯の禪師又其の景清の妻とあり

印分
阿古屋祐成の契りを
大磯の
遊女白拍子
良人のため
身命
節義
然
今
遊女
雲泥の
就中
この物語の
舞
鶴ゲ
顔ハ

菩薩
心ハ
壁
嘶を
委
雪のハ
ハ
ハ
文久元年辛酉季秋稿成
同 二年壬戌孟春発市
鶴亭秀賀

敎草女房形氣　二十二編上之卷

初段

さてしも、鎌倉雪の下米町に名も高き黄金屋の息子奈久四郎は、お雪といへる妻を迎へてよりは、暫し辛抱なしけるに、又もや古き病の發り、彼の舞鶴屋の舞鶴に現をぬかして通ひつむるにぞ、店を預る番頭始め、手代小者に至るまで、身分不相應なる引負なして使ひ散せば、今は早數多の寶の數盡きて、次第々々に下り坂、油斷に戻る世帶の車は廻りかねてぞ見えにける。さりながら多くのお出入屋敷へ御用も達しある事故に、いまだ奈久四郎は目も覺めず、外を内なる放埒に、あたら月日を送りける。かくて或日の事になん、今日は御船村前の梅垣宗匠の花見橋なる萬八にて、百韻の開きありしを忘れ居たりとて、廓より直にかの枳殼と帮間の撥八を連れて、八ッ下りより出掛けしが、裏前通をブラリ〳〵とはや町へ來かゝりし折しも、夏の夕とて、いつ雲を運出してや、一天俄にかき曇り、にはかに降來る夕立に、奈久四郎等は驚きつつ、此はや町の新道に知邊のありければ、それへ行きて雨宿せんと、二人を連れて駈出し、漸くに其家へ行き、格子明けるも遲しと飛込んで見れば、こは如何、わが行く方とは家異にして、家

には十八九の顔好き女と、四十ばかりの男と酒呑居たりしかば、奈久四郎も間の悪く、「是は粗相をいたしました。私は家主の善兵衛さんの所と取違ひました。御免なさい」と立出でんとする時、能々見るに其男は、我家の番頭籾助なれば、奈久四郎「おや、誰かと思へば、そこに居るは籾助ぢやないか」と聞かれて、さすがの籾助びつくり仰天、「これは〳〵、何方樣かと存じまして失禮を致しました。先此方へお上りなさいまし。もしお連樣にも此方へお入りなさいまし。これおひきさん、お茶でも上げておくれ」と言置きて、居堪らざればそこ〳〵に裏口より逃出さんとするを、おひきは早くも見て取り、駈出して是を引止め、此人を籾助の主人と知らざれば、不審なしつゝ遠慮もなく、おひき「おや、まあをかしな、なぜ其樣にこそ〳〵と逃げるのだえ。今日はお前用の無い筈で、母に留守を賴まれたのぢやァないか。賴み甲斐の無へ。ねえもし貴方、それに此所は此人の家で御座いますものを」と言はれて奈久四郎も、こは籾助の妾宅ならんとおもへば、挨拶の仕樣もなく、さすがは心中に呆果てつゝ、手を拱いて居たりしかば、籾助も詞なく、只平伏して居たりしかば、おひき「さあ旦那、ちつと浮々おしな。それに子子が涌くから、其お盃を干して其お方にお差しな。いやはや、年のいかぬ者は、世話がやけてならぬ」と味な眼をして立寄りくすぐりけるを、籾助堪らず、心の中には、えゝ見別の悪い、是はおい

らの主人だものを、其前でそんな事されちやァ悪いと、横目で知らせど、おひきは最前よりの酒盛に十分醉ひし事といひ、又かゝる者のくせとして、人中を構はざれば、只籾助をだまさんとのみ思詰めける事ゆゑ、さまゞのいやらしき事など仕懸けけるを、奈久四郎は見ても居られず、二人の者に眴して、未だ雨は全くやまざれど、構はずこゝを立出でて、心ざす方へぞ行きにける。後に籾助は、やつと生きたる心地して、ほつと溜息吐きながら、おひきに委細を語りつゝ、その間の悪かりしと言ひて、是より更めて酒酌交し、其夕方に歸りける。

二　段

奈久四郎はさすが放蕩なれど、番頭籾助の園女を圖らず出見して、俄に心付き、其次の日よりはとほ出もなさで見世へ出で、貸金の利金の勘定を始めけるにぞ、籾助も臑に疵、此奴悪事の破口と思へど、そしらぬ顔して、同じく帳合を調べけるに、未だ籾助の運や強かりけん、手代の内に負目のある者四五人言合せて、其夜駈落なしけるゆゑ、奈久四郎は驚きつゝ、それゞに人をかけて探しけれど、更に行方の知れざれば、餘儀なくそれなりに打棄てて、猶々夢の覺めたる如く、諸帳面を調上げしに、行方の知れぬ金二萬兩餘もありければ、奈久四郎は唯途方に暮るゝばかりなりけるが、素より公事にするとも詮なき事ゆゑ、餘儀なく思ひ諦めけるが、是ぞ半分は番頭籾助の使捨てたるなれど、彼の逐電せしものに罪きせて、其場は體よく遁れたれど、遁れ難きは彼のはや町のおひきの方を、見付出されし一條、こはいかにして好けんと、日夜工夫を凝しける。

三　段

かくても奈久四郎は更に遊はやまず、一晩家に居れば、二晩は廓へ行きけるが、さすがに慾は知りにけん、朝は何時にても疾く歸りて、それゞに心を配りけるゆゑ、母のおぬかも、妻のお雪も大に悅び、これではさのみ障にならじと思ひけるが、それにひきかへ籾助は、是では更にまゝならねば、ろくゝおひきの方へ行く事もならざれば、猶々工夫にあぐみける。或日奈久四郎は只一人、お雪の湯へ行きしを幸、かの舞鶴の方より來りし文を取出して讀みながら、一人にやゝしてある處へ、籾助は折好しと、おのが名に負ふ揉手なしつゝ入來れば、奈久四郎は周章て文を後へかくし、そしらぬ顔して、「何か用向でもあるのか」籾助「へゝゝゝ、是は若旦那、今朝は大分お早いお目覺、まだ四ツには餘程お早う御座います。なに別段かはつた事でも御座りませぬが、昨晩お袋樣の私を召しまして、極内々でのお賴ゆゑ」奈久四郎「そりや、おれに意見でも言へとの事か」籾助「どう致しまして、おふくろ樣の仰やいますには、此身上は素よ

り奈久四郎の物ゆゑ、如何なつても構はぬが、聞けば此間も勘定して見れば、見世の者にも大分使込があるとの事にて、二人三人駈落したとの話。それといふも、元は奈久四郎の家に居ない故から起ること故、たとへ一箱や二箱のお金はいつても、彼にさへ氣の適つた女なら、どうぞ請出してやりたいが、私が指圖で其樣ことをさせては、第一お雪の里へ濟まぬこと故、おぬしが心付いた積で奈久四郎の腹をきゝ、其上大儀ながら、廓の方も掛合をして貰ひたいとの粹なお指圖、なんと若旦那、左樣いたせば手活の花、手折り次第の野梅とは、又格別の匂が御座りますぞえ」と事をたくみの計とは夢にも知らぬ奈久四郎、悅ぶ事大方ならずといへど、さすが家にはお雪あり、殊には此程は多分の金は手許にあらず、それは如何にといひけるを、籾助すり寄り、「其事は少しも御苦勞なさいますな」と何かひそ〳〵囁けば、奈久四郎は滿面に笑をふくみつゝ、忽ち籾助に謀られて、「何分賴む」と雀躍をしてよろこびぬ。

四段

お雪は先刻湯より上り來て部屋へ入らんとするに、いつになく番頭籾助の、奈久四郎と何やらん密々話して居りけるゆゑ、控へて内へは入らず、其話の果てるを待ちつゝも、思はず此一段を聞取りけるが、これ大體の女房なりせば、角を生して恨み歎くべきに、眞心深き性といひ、殊に利發の生なれば、是を少しも憂とせず、彼の古き發句にも、

とらずともやはり野におけ蓮華草

といへる如く、花の色香の美しとて、根引をなして我家へ連來るとも、いかで野にある如き眺のあらん、終には目かれのなすべきに、其時こそは悟り給はめ、又さもなければとて、然する時は外を内なる放蕩もいつしか止みて、お年を召したる母上のお心もやすまらんに、早くも左樣なれかしと思ひけるが、只不思議なるは、かくまでに粹な母上にはあらざるに、かゝる指圖を爲し給ふとは、何か樣子のある事かと、是のみ苦勞に思ひける。

五段

さる程に番頭籾助は、委細を奈久四郎に呑込ませて地面を書入れ、質物として七百兩といふ金子を借入れ、其外店の有金をも浚ひて懐として彼の廓へ行き、舞鶴屋の亭主に委細を語らひ、舞鶴を五百兩にて身請なしけるが、こゝに不思議なるは、其親里をたどすに、我が園置くおひきの姉にありければ、大に喜び、幸ひはや町に近きれうほう町といへるに、好き空家のあるを購ひて、是へ舞鶴を住はせ、男女をつけ置きて、何不自由なきやうに取賄ひければ、奈久四郎は深くも其働を賞しける。

教草女房形氣　二十二編下之巻

六段

番頭籾助は謀をもて、再び奈久四郎に夜泊日泊を始めさせ、おのがまゝに金錢を掠め、其上日々おひきの方へのみ通ひけるを、奈久四郎更に心もつかず、古今の忠臣と思ひけるこそおろかなれ。舞鶴は幼名のおてこと名を呼びかへ、今はまことの氣儘暮に、朝は四ッ頃ならでは起出でず、やつと起きれば、下女連れて湯へ行きけるに、何所から何所までも手前に洗ふといふことなく、相撲の如く投出して、それではいかぬ、これでもと、小言だら〳〵に、上りても、背中を拭けとは、餘り贅澤過ぎた仕方なり。夫より内へ歸れば、下男も少しは料理を心得ありとて、給金も並より一兩二歩高ければ、氣轉も利きて、朝飯の菜も器用に膳立なしてありけるを、いきなり食べ終れば、入來る女髪結のおたぼに日髪を結はせ、おしまひを仕上げる頃は、はや九ッ過にて、丁度其時分には奈久四郎も來りて、是より酒盛を始めけると、例の野幇間共の大勢集り、果は亂酒となりければ、花見橋より藝者の來ぬ日も稀なれば、其物入廓へ遊びに行きし折とは違もなく、實に罰知らずと、心ある人は囁きぬ。

七　段

母のお糠は、是等の事を見聞くにつけて心を痛め、手をかへ品をかへ意見をなせど、糠に鎹、馬の耳に風、更に奈久四郎は聞入れなく、以前に倍して夜泊日泊の繁くなるにぞ、この程はそれを氣に病みてや、持病の癪のおこりけるにぞ、朝夕の食もすゝまず、床に就きてのみありければ、嫁のお雪はいたく心をいため、何から何まで行屆かずといふ事なく看護をなしける故、おぬかは又なき嫁といつくしみけるほどに、お雪も更に隔心なく仕へければ、さて餘所目にも美しく、世間の嫁達、お雪の行には能々心をつけて見給へかし。お雪「母さん、お藥が嗹まりましたから、お上りなさいませんか」母おぬか「誰にか言付くれば好いに、お前があたゝめておくれか。誠に私はあやかりものだのう」ト戴きながら、其藥を一口呑んで苦きにやしがむる顏を、お雪は見てとり、「今日のお藥はちつと加減をすると、もち庵樣が仰やつたとの事、お呑憎くとも我慢をしてお上りなさいまし。そしてお口取には、かうがの粟の水飴を取らしておきました」と差出すを、母は何ともいはず涙ながらに是を食べ、藥を呑み終り、おぬか「これお雪や、私はいつそ明日よりお藥は止しませうよ」お雪は不審顏「そりや何故で御座ります」おぬか「あの奈久四郎といふ不孝者が、ほんに〳〵此程の道樂は、實に箸にも棒にもかゝらず、一晩でも家には居

らず。夫をおぬしは恨みもせず、老ほれた私を優しくしてくれる心の中が、かはい相でなりませぬ。それに此樣子では、折角積上げた身上も、今にだいなしにして仕舞ふは知れてある事、それを見るのが嫌な程に、藥をやめて死にたい」との老のくりごとも無理ならねど、お雪はわざと勵さんために、いろ〳〵と宥め賺してありける內に、母はいつしかすや〳〵と眠れる樣子に、搔卷打著、せわが部屋へ來て、かの附人なるおくちと何やら話してありけるが、涙もろきは女の常、濕りがちにて五月雨の、晴れぬ胸をや語合ふらん。

八　段

さてしも奈久四郎は、淺くも番頭籾助に謀られ、おほくの黃金を捨てて舞鶴を請出しけるに、さすがは數多の客を取扱ひ、かゆい處へ手の屆くやうにて、一ツとして氣に入らずといふ事なければ、是にくらべては、お雪は田舍者にて氣轉の利かぬ者なりとて、頻に厭風の立ちけるは、是ぞ身を滅すの種なりと、後にぞ思合されにける。奈久四郎は我家ながら、此程は母おぬかの例ならぬをも打置きて、二三日家へ歸らざりし事故、何となく敷居の高ければ、藏口よりそつと歸來て我部屋に入り、そしらぬ顏して寐て居たりしを、お雪は知らで我部屋に、おくちと何やら話してありしが、奈久四郎の咳なせしに驚きて周てて馳行き、お雪「おや、何時お歸で

御座いましたか、さつぱり存じませんで居りました」とあやまりつゝ、脱捨てありし羽織をたたみながら、おくちに言付け搔卷を取寄せ、横になり居し奈久四郎の腹のあたりへ掛けんとするを、奈久四郎は取つて捨て、いつになく物をも言はず枕をお雪に投付けながら、奈久四郎「これお雪、此暑いに其樣な物をかけて如何するのだえ。おかたじけな、蒸殺す積か、好い量見だ。そして何かといへば人を使ふが、おいらにやそれが氣に入らねへ。なんぼ田舍大盡の娘でも、そんなに高くとまつたもんぢやァねへ。おいらの家なんどでは尻を捲つて働かなくつてはいかねへ。それともそれが厭なら、二三日まァ里へ遊に行くがいゝ」とは出て行けがしの詞なり。お雪は涙をそと拭ひながら、「まことに何事も足らはぬわたくし、どうぞ惡い處はお叱り遊ばして下さいまし。只今あなたに見放されましては、實に參る所もない此身、お氣に入らぬは御尤ながら、不便と思召してお側に置いて下さいまし」と、いとしとやかにあやまり居るを、何がな節つけ追出さんと思ふゆゑ、横に車のねぢけ言、奈久四郎「此所を出されりや參る所が無いとは、そりや誰にあてつけた詞だえ。おぬしの家は越後の國では一二と呼ぶ大盡の事、又江戸のお里は名に負ふ太良福屋太利右衞門さん、そんな嫌みからみは措いて貰ひたい」とさもなき事にもとけ〳〵しく言へど、心は柳のお雪、少しも是に逆はず、猶あやまつてあること故、さすがの奈久

四郎もせん方なく、如何になしたら出行かんと、頻に厭風の立ちけるも、彼の舞鶴のおてこが糸を引くゆゑにて、心にもなき折檻の邪見に、お雪を夜となく晝となく窘めさいなみけるは、あはれ無慘の事どもなり。

九段

お雪の附人たるおくちは、此有樣を見て大に心を痛め、「かくては末の遂げがたければ、お里へ相談ありて、兎も角もなし給へ」とすゝめけれども、お雪は道を辨へし女なれば、却つておくちに意見をなして、更に氣を揉む樣子のなきに、おくちは堪らず、或日何やら用ありて、里方なる太良福屋へ使に行きし折から、女房のお爲に内々にて、此程奈久四郎の不身持より、お雪の毎日々々窘めらるゝ事より、又舞鶴を請出せし事、或は段々身上の惡くなりし樣子等を、斯樣〳〵云々と、見聞くまゝに尾鰭をつけて話しけるにぞ、お爲は驚きながらも、是を感違して思ふやう、こはお雪の、とても辛抱ならずと思へども、さすがは假親の事なれば、かくとも打付にいひかねて、おくちに其概略を話して、かくは言ひおこせしならんと思へば、おくちには好きにいひてかへせし上に、夫太利右衞門に相談なし、其翌日、お爲は下女と小僧を連れて、朝まだきに黄金屋へ行き、おぬかの病氣をいたみつゝ、少しばかりの土産を差出し、時候の挨

拶などくだ〳〵しくありて後、おためはおぬかに言ふやう、「今日はあんまり暑くもなければ、朝の間に淺房の觀音樣へ參りたく、それにつきてはお雪をも同道いたしたく、少しの間貸しくれよ」との賴に、母のおぬかは大に悅び、「今日はあやにく奈久四郎の留守なれど、歸り來らば我等の宜きに言置かんほどに、連れ行きてゆつくり遊山をさして」といふも、少しは氣晴にもならんかと思へばなり。さりながらお雪は、夫の留守にゆるしもなく出行かんは心よからねど、用ありさうなるお爲の素振といひ、又母の許の出でし上は、辭するに詞なければ、心ならずも支度をとゝのへ、母のおぬかの藥の世話など、能々腰元に言含めおきて、おくちを我代として殘しおき、太良福屋の女房お爲に誘はれて出行きけるに、お爲は淺房へは行かず我家へ歸るにぞ、不審ながらにお雪はしたがひ行くに、豫て期したる事なれば、太利右衞門は待構へながら、それと見るより種々の馳走を出して待遇せし上に、太利右衞門「お雪さん、さぞ不審に思ひなさらうが、今日お爲を呼びに上げたも譯のある事。夫も外ではない、奈久四郎さんの事。聞けば此間は論の外なる道樂になられた樣子、また身上なども大分いたんだとの噂を委細に聞きましたが、それでは如何も末の見極がつかない故に、お爲とも相談の上、今日は僞をもつてお呼び申した譯サ。なんと足元の明るい内に身の覺悟をしないと、末に困ります。わたしもお前の父

さんより、任すから好きやうにとのお賴ゆゑ、どうもお前の難儀を見ては居られず、餘儀なく御相談をいたしますが」といふ尾について、お爲もいろ〳〵と賺して、離緣を取るがいゝとすすむるにぞ、始終涙にくれ居たるが、そつと拭ひつゝ、お雪「まことに何から何まで御親切な御意見はお嬉しう存じまするなれども、奈久四郎とても若い者、そりや些との道樂はあるにもいたせ、それを女の力より見限りましては如何も濟みませぬ。それに身上の惡くなりましたも、みんな私のみゝたぶゆゑ、たとへ袖乞を致すやうになりまするも、夫までの運と諦めます故、御心配なく、やッぱり彼處に置いて下さいまし」と年に似合はぬしつかりとせし答には、夫婦も何といふべき詞もなく、却つて言出して恥入りて、それより外の話に移して、樣々の馳走をなしつ、其夕暮に、小僧手代に送らして、何くはぬ顏に歸しける。

十段

奈久四郎は、お雪の出行きしあとへ歸り來て此事を聞くより、腹の中にては大に悅び、番頭粉助に何やらん囁きつゝ、お雪の歸りを待居たる處へ、片影たつて其夕方、お雪は歸來て、里より送り來りし者をねぎらひて歸さんとする時、奈久四郎は出來りてお雪を家へ入れず、直に又太良福屋へ歸れといふにぞ、お雪は其故を知らず、夢に夢見る心地ながらに詫入るを、豫て手筈

のなしたる事なれば、籾助はおくちをも共に、お雪を追立てけるにぞ、樣子は知らねど、餘儀なくも太良福屋へ連歸られけるにぞ、太利右衞門夫婦は驚きつゝ、何故と問ふをも待たず、籾助いふやう、「主人奈久四郎申しまするには、外樣ならぬ此方樣よりの御誘にて、お雪は今日淺房へ參りし由なれば、彼是申す譯も御座りませねど、母の大病ゆゑ、私留守には、たとへ誰人よりの御誘なりとて、氣儘に出歩くやうにては、以來とも召使の者の示しも出來ませぬ故、先二三日の間、御迷惑でもお預け申す」との事ゆゑ、夫婦は驚くといへども、其結構も大方は悟れば、何事もいはず、委細畏りましたと、請なして籾助を返し、まづお爲に言含めて、お雪を奥へ伴はせける。

十一段

かくて籾助は立歸りて、奈久四郎に太良福屋の首尾を話しければ、奈久四郎は大に悅び、それより直におてこを呼寄せけるゆゑ、母のおぬかは痛く心をいため、おてこを追出してお雪を呼返せよといへど、奈久四郎は更に聞入れず。それなりけりに後の妻となしければ、下女下男もいつしか御新造さん〳〵と呼びけるを、太良福屋の方にては聞出し、大に怒るといへど、もとめても離緣をなさんと思ふ處ゆゑ、先それなりに打置きけるが、只哀なるはお雪の身の上なれど、そは二十三編に委しく記せば、次の巻を御求御覽を願ふになん。めでたし〳〵〳〵。

換序

終日兼好めかして机に向ひ、女房形氣の二十三編稿せんと、種々に工夫を做せど、いかにせん下手の勘考休息に似て、如意輪樣の祈子の如く、頰杖なして竟粘々〳〵、間睡ところに、秀賀々々と呼覺すものあり。何方樣ぢやト天窓を上げて視れば、珍しや去年遠行ありし、山東庵のあるじ京山翁にありぬれば、驚怖仰天、魂消しッゝも、僕倩思ふ樣、是は翁の種を蒔置かれし、教草に接穗なさんと、斯くまでに想を擬せど、趣向に竭きたるを憐み、其筋を教へんとて、現れられしと思へば、卒然に平身低頭して、其來意を訪ふに、翁は對話もなく、持つたる扇子にて、予が面上を打ち、罵ッて曰く、「鮑魚の肆に入る時は、臭を忘る。汝無學文盲の癖として、名利を好み、稗官たらん綷を望むと雖、寔の稗官たる綷を不得、無闇に人の糟粕をなめて、一員の作者たりと思ひ、末世に汚名を殘すを知らず。就中予が女房形氣は、既に題號する如く、教草の近道にして、卷中盡く勸善美意を含む。然るを汝、それ等に酔酊を不用、出傍題を並べて、好しと思ふにや、不義不孝の者を、卷中の主とする綷、是何の謂ぞや。剩趣向に竭きたる折なれば、我が靈于粤現はれて、

智惠を借すと思ふは、實に己が身の臭きを知らぬ所爲にして、惘れていふに言葉なし。急速に毫を捨てて、次編著くを止めよ」ト叱られて、僕一句も出でばこそ、再應翁の顏を視る綷も能はず、唯々と答へて、總身より汗を出して居たりしが、言はで止みなんも口惜しと、腹中にて、その言譯を拵へし折しも、又予を呼覺すものあり。此度は又いかなる人ぞと、恐る〳〵首をあげて見れば、是なん錦橋堂の主人なれば、始て夢なりし綷を覺り、胸を撫で〳〵、「定めて今日の光來は、次編の御催促ならんが、此通り荒增筋書出來做したり」と視すれば、錦橋堂苦笑して、「イヤ某の參れるは、催促に非ず。全體子が編める處の書、都て道行なが〳〵として、肝心肝文の處を後廻しとなす故に、看官に御退屈の出來べし。以來は其意して編みねかし」ト聞いて予も覺悟ことあれば、大に謝して、錦橋堂の歸れる後に、また毫を取つて草稿なし、彌嫁が姑をいびるの一段を著して、女房形氣の二十三編とはなしぬ。

鶴亭主人誌

教草女房形氣　二十三編上之卷

初段

さある程に、黄金屋の嫁お雪は、身に過れる事はなけれど、人の心の飛鳥川、はやくも秋風のたちそめてや、僅の事に節をつけ、里方へ預けられしに、是とても生さぬ中の取親なれば、萬につけて心遣も多く、唯頼に思ふは彼の氣に入りのおくちのみにてありけるが、追々噂を聞くに、黄金屋方にてははやお雪を離縁せしとて、誰に憚る者もなく、圍ひおきたるおてこを呼寄せ、それなりに後の妻とせし由を聞き、お雪は先胸潰れつゝも思ふやう、さもあらば故なく我身を斯く追出し給ひしも、彼の女を入れ給はんとの御心なりしか、若しさもあらば、斯樣々々云々と、唯一言知らせ給ひなば、殿御に妾は當然、何しに妾の邪魔なさん、聞えぬお方と奈久四郎を疎んで見たり又思ひつゞけて見る時は、こはおてこの、家になほらんと籾助を抱込み、二人して焚付け、斯る仕末とはなせしなるべし、エヽ情なき二人のたくみ、一旦家と定めたる彼の黄金屋、今更少しの落度あればとて、追出されては何處へ歸りゆかるべき、頼少き此身なる事は、豫て母上にも知り給ひけんに、なぜまた詫して呼戻して下されぬ、イヤ思ふまい、勿體ない、何

母上の知り給ふ事にもあらず、是も皆わが宿世あしき故ならん、さりながら斯くて此家に長々居んも如何なり、さりとては親里へは、何面目に歸らるべき、とてもかくても惜からぬ命を、斯く存命へてある故に、かくは物をも思へ、いつそひと思に死せんものをと、心せまくも女氣に、覺悟極めて見は見ても、心殘は越後に在す父母上、せめて此世のお名殘に、餘所ながらも御暇乞したし、イヤさる弱き心にては、なか〳〵死する事もかなはじ、一刻も早く死せんものをと、心で心を取直し、今宵にも隙あらば、せめては一筆書遺し置かんと、其夜はいと早くより床に、おくちの寢入るを待つてそつと起出で、兩親始め又太利右衛門夫婦、おくちへも是迄の禮をかずかず述べて、漸と書終り、いでや此間に刃に伏し、火宅をのがれ彼の世へ旅立たんト、手早く著替る白無垢も、五ツ重のいつかまた、かへり來る日も夏の夜の、短く終る玉の緒ト、玉なす涙呑込み〳〵、豫て用意の懐劍を、取出さんと彼方此方探すに、如何にやしけん、更に行方の知れざるにぞ、コハ又如何にしてや死せんと、とつおいつ思案をなして居たりける。

二段

附人のおくちは、お雪の此程よりの樣子たゞならずと思へば、手許にある其刃物を皆取隱し置きしに、虫の知らせに、今宵は何とやらん胸安からずして、眠らんとすれば怖き夢を見るにぞ、

先刻より眼覺めけるに、お雪の樣子たゞならじと思へば、そつと間の襖より透し見て大に驚き、急ぎ立出でとゞめんとは思へど、死せんとするを人にとゞめられ、空しくやむは間の惡きものと聞く、尤も刃物は手許にあらざれば氣遣なしと、敏くも分別なして立出です。時々咳など して、態と目覺めてあることを知らするにぞ、案の如くお雪は驚きつゝ、斯く支度はなしたれども、如何なさんとためらふ中に、はや何時しか夜も明けはなれけるにぞ、若や又おくちに斯る樣見られてはならじと、急ぎ死支度を脫棄て、其夜隙あらば死せんとぞ、知らぬ顏して居たりける。さるほどにおくちは、お雪の始末腹にするかね、其日太利右衞門夫婦に昨夜の危かりし趣を委細に語りければ、夫婦の者も殊の外駭きける中にも、太利右衞門は何やら腹に思案を定めつゝ、「先お雪を呼べよ」と何氣なくいへば、おくちは畏りて立行き、急ぎお雪を連來れば、太利右衞門は何事なるにや、お雪の耳に口を寄せつゝ、いと長々と囁けば、お雪は涙ながらに莞爾と笑ひ、「まことに段々の御意見の趣有難う存じます。左樣なればどんな悲しい辛い事も怺へますれば、あなたがたの思召次第になして給へ」とありければ、夫婦の悅比ふるに物なく、太利右衞門は急ぎ著物を著替へ、小僧を一人連れてお出入の屋敷なる畠山樣へ行き、奧家老に委細を賴みけるに、「幸ひ此節御無人故、直に上げられよ」とありければ、太利右衞門は悅び勇み立歸り、此事を知らして、それより綺羅に支度をなさせ、矢張おくちを部屋方として、お雪を畠山の御奧へ上げにけるが、お雪は死せんとまでに思ひつめたるを、太利右衞門の如何に說きふせてや、斯く早速に御奉公には出でしと思ふ人あるべけれど、そは後々の卷を繙けば、自然に分る事あるべし。

三段

爰に又黃金屋奈久四郎は、おてこの色香に深くも迷ひ、貞心深きお雪を追出しけるが、是ぞといへる落度もなければ離緣もなしかね、それなりけりに打棄てて、後へ直におてこを引入れにける。此おてこは前にも說くが如く、籾助の園道くおひきの姉にて、廓にあるうちにも我儘者の名題高く、舞鶴といふ者はなく、てこづるとのみ呼びたる程の者なれば、今はます〳〵我儘の增長して、母のおぬかを見ることお針さんを待遇ふ如く、あつてないがしらになしけれど、奈久四郎はそれらに少しも心付かず、またなき妻を得たりと、明暮酒盛にのみ日を送り、そが上今日は一丁目、明日は二丁目と、一ッ芝居も二度三度づつ行き、それにても猶厭かずやありけん、此所の寄席、彼所の定席と、酒呑む隙には寄席歩をなし、揚句の果には名ある藝人を家へ呼寄せ、酒盛の相手となしけるゆゑ、いとどまはりし身上の、次第々々にほし減立ちて、今はま

ことに其日の小遣にも困るやうになりしかど、未だ此所彼所に貸付ありし金もあれば、毎日籾助にそれをはたらせ、漸くそれにて暮をつけながらも、奈久四郎は目の覺めずや、猶々馬鹿を盡しけるが、今は多くの人もいらぬ事なりと、皆暇を出して、籾助と飯焚下女となしにける。然るに籾助の圍置くおひきは、此程尻の嗹るにしたがひ、男望の出來り、邊近き處に住む松五郎といへる勇と姦通なしてありけるが、今となりてはなか〳〵籾助の離るべき樣子もなければとて、親と相談の上出奔をなしければ、籾助は血眼となりて其行方を尋ねけれども、更に其行方知れざれば、今はこゝらが好き見切場なりと、十分に貸先をはたりてそれを懐になし、生出でし親里なる上總國へ、是も同じく出奔なしにける。

四段

さる程に、奈久四郎は急に眼の覺めたる如く、此上は如何して暮さばやと思ふ處に、此程よりおてこは酢き物を好みなどして、てつきり懐姙の樣子なれば、かゝる中となりても奈久四郎は大に悅び、急ぎ醫師を呼迎へて見せしむるに、いよ〳〵それに相違なき由なれば、指折り數へて待つうちに、はや五月にもなりぬれば、産婆を頼み、岩田帶をなしけるが、斯く身上の廻惡しくなりては、たとへ出産なすとも差閊勝にありぬべし、何卒急に金儲をなさんと思ひついたる

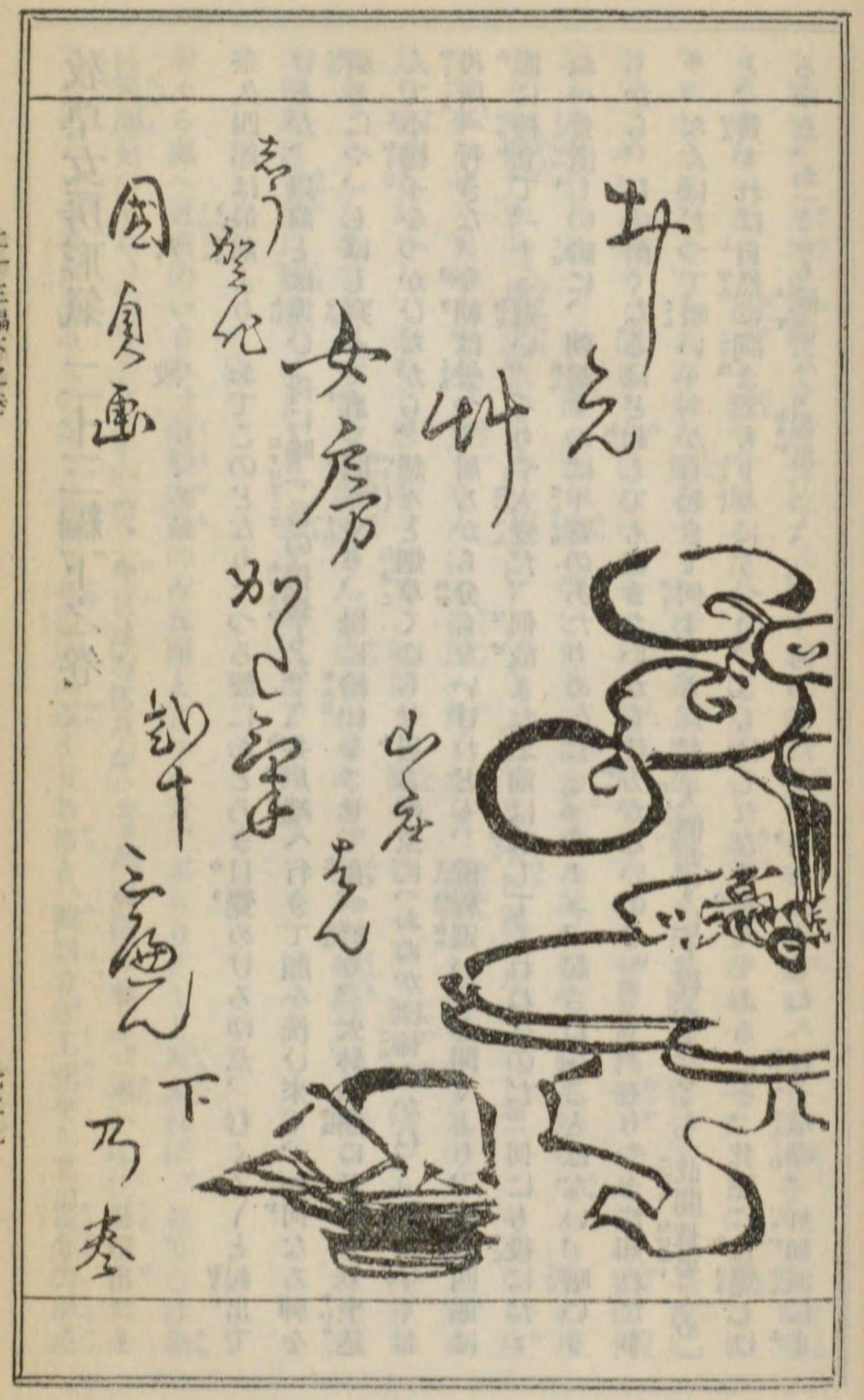
折しもあれ、或人のすゝむるやう、「今しか〳〵の處にて、金子貸付の役所を取立つるにつき、百兩の金さへ出さば、直に三百兩にはなるべし」と、枯木にもあんころ餅の生るやうなる山師とかいへる者にたらしこまれ、奈久四郎は精一杯の工面をなして百兩の金を出しけるに、何ぞさる事のありぬべき、その金は水金となり、消えて跡なくなりぬれば、奈久四郎は狂氣の如く騷散して、其世話人を責めはたれど、素より證文なしたる金にもあらざれば、公沙汰にもならざれば、今更せん術なく打捨置きけるに、豫て家作を貿入になしたる事ゆゑ、「はや期月來れば金を返すか、家作を渡すか、いづれともせよ」と嚴しく掛合ひけるにぞ、餘儀もなく〳〵奈久四郎は、馴れし我家を人手に渡し、本所なるはかくら町といへるいと場末へ引込み、今は夫婦に親一人となりしが、泣暮しの其内にも、生落ちたるは玉の如き男子なりければ、是を玉之助と名け、其寵愛更にたとふるに物なく、又おてこも斯る暮となり果てたれど、又子の可愛きは別にして、據なく見かぎりかねて鍋を下げてくらしけるが、奈久四郎も或人の世話にて、某の會所に筆採る役の明ありとて是へ住込み、僅の給金に身を縛られ、朝出でては夕に歸りける故、おてこはお山の大將にて、かゝる中となりても猶々我儘は增すばかりにて、玉之助も産落したといふばかり、乳を呑しては母おぬかに負はせながら勝手元を働かせ、其身は高く日の上

りし頃やう〳〵に起出づると、奈久四郎はまさかに汲んでやらうとも言兼ねて、「これおてこ、今おいらが手洗つかつたから、序に水を汲んで來た。サア此處に置くぜ。コレ母ア、まだ飯は出來ないかえ。今朝は大分遲くなつた、早くきり〳〵してくんねえな。ナニ飯は疾に出來たが、冷めると惡いからお汁を煮ずに置いたとえ。べらばうな、夫だから何時でも暖い飯を食しやアしねへ、大概程のあつたものだ」と小言ながらに食事を仕舞ひ、いそ〳〵なして出でてゆくを、おてこは見むきもなさず、あてこ「サア玉坊、お前にも焚冷のお飯をやらう」と引たくるやうに抱きとり、乳房哺せながら、がくり〳〵居睡り居たるに、さすがのおぬかも呆れはて、なんと言葉もなかりけり。

五段

さあるほどに、母のおぬかは是より老樂に暮さんと思ふ内に、肝腎要の心棒たる奈久四郎の一心足らず、古今の馬鹿を盡し、氣にいりの嫁お雪を追出し、おてこを引入れけるにぞ、樣々に意見をなせど、奈久四郎は何とて用ふべき、猶々阿呆の働なすにぞ、自業自得とはいひながら、さすが大枚の身上も破滅して、今はかゝるしまなき樣となりしを、明暮見るにつけても、良人爲右衛門の早く死せしを羨みつゝ、成程長命すれば恥多しとは此事なるべし、さりながら是も皆前世からの約束ならんと諦めけるが、頃しも霜降月の末つ方なれば、雪模樣の風身にしみじみと辛けれど、少しなりとも家の爲なりと、寢かぬる老の癖とはいへど、まだ暗きより起出でて、釜の下を焚付けながら、糸車を取出して賃糸を取り居たるに、はや夜も明けはなれければ、おてこを怖々起しぬれど、何しに起出でべく、玉の助を捨置き、向ふの方へ寢反うつて高鼾なるにぞ、無理にも起しかねて居たりしが、今度は奈久四郎を搖りつゝ、おぬか「サア奈久坊起きなよ。今に五ツになるわな。今日はお役所も早出ぢやと昨夕も言つたぢやねへか。もつとも私はしつかり聞きもしなかつたが、おてこにお前の話すを聞いて居た。サア起きな〳〵」と搖覺せど、若きものの癖として夜更なすゆゑ、朝は死んだやうに寢入りこんで更に答はなし。其時おてこは我名をいはれて、さすがは意地張、ふと眼を覺し、あてこ「なに、おてこが如何したとえ、やかましい。年をとるとそんなにも世話のやきたいものかねえ、おもしろくもねへ。それに奈久坊とは誰の事だえ、外聞の惡い。とんだ坊でこんな孫までも出來て、何時までも子供の樣に、奈久坊起きな〳〵も無へもんだ。おきなに千歲三番叟が聞いて呆れラア。寢るだけ寢りや好い時分にや起きるから打遣つて、お前は矢張貧乏車にくッついて居て、お汁の實の錢でも取るが好い」と小言だら〳〵、餘儀なく起出でんとするにも、わざと荒けなくするゆゑ、案の如く玉

之助のワツト泣出すをしほとして、又乳房をふくませながら、横になるより早く高鼾なるにぞ、おぬかは何のいらへもなく、はふり落つる涙を呑込みく、嫁の邪見を悲みつゝ、又取出す糸車の、糸より細き今日の暮を、苦々しくも思ふなるべし。



教草女房形氣　二十三編下之卷

六　段

奈久四郎は最前より、おてこのどなりたつる聲におどろき目覺めけるゆゑ、むく〳〵と起出でけるが、以前とは違ひ、母に唯一言の挨拶もなく、井戸端へ行きて顔を洗ひ來て、如何なる神を祈るにや、しばし拜みて直ぐ膳へ坐り、母に給仕をさせて食べ終り、火鉢の側にどつさり坐込んで小楊子をつかひながら、恁々と烟草くゆらせ居るゆゑに、おぬかは怪えかね、「さあ早くお役所へ行きな。今朝は曇つて居るから分らないけれども、餘程遲い」と聞くより、奈久四郎は眼に稜立て、「ナニ遲い。そりや大變だ。何故またお前は起してくれねへのだ。何にも役にたゝねへ食潰しの癖に、朝起すのは年寄のあたりめへだ」おぬか「ナニ、起さねへことはない、暗いうちから、口の酢くなるほど起しても起きないから仕方がないのさ」奈久四郎「そりやまた知れた事サ。なんぼだつて暗いうちから起きて何するもんだ。大概起すにも程があらァ。此間拔婆ァめ」と、貧すれば自然に詞までも下々にうつり、さもはしたなく罵りてあるにぞ、其聲に目覺しけるゆゑ、おてこも餘儀なく起出でて、「エ、何の事だえ、聞きたくもねへ親子喧嘩、好加減に止しなせえ。玉坊が寢やァしねへわナ。早くお前はお役所へ行くが好い、まさか相手の無い喧嘩も出來ねへから、母ァも默つて居るだらう。ほんに〳〵足手もきかねへくせに、口の達者なにやァおそれるよ」とおぬかを睨みつくれば、奈久四郎も同じく母を睨みつけつゝ、奈久四郎「實におてこのいふ通り、間にも合はねへくせに口の達者にやおそれるぜ。これ母ァ、お前の役は何にもありやしねへ。水を汲んだり飯を焚いたり、流元をする其外にや、此玉坊の守より外に用のない體だから、成丈泣かさないやうにしねえ。やれ〳〵大に遲くなつた。おてこ、そんなら往つて來るぜ。玉坊ちやん、父ちやんはお役所へ往くから、溫順くお留守をするのだぜ」と嘗めたり乾かしたりしてあやし居るを、おてこは同じく睨みつけ、「さァ好加減にして早く往きなせえ、そんな事で女房子供や老耄婆さんが過されるかえ。呆れた頓馬だ」と叱りつけられ、奈久四郎は青菜に鹽のしほ〳〵と、急ぎ役所へ出でて行く。

七　段

かゝる處へ近所のいさみ、倶梨迦羅の吉五郎といへる者、ぶらり〳〵と入來れば、おてこは急に笑顔をつくり、「吉さんお早いね、今日はお休みか」吉五郎「知れた事よ、寒いに仕事に出たとて、いくらの事があるものか。せめて冬の内は遊んでお出と、彼奴めが工面をして、當分の小遣

を致したから、據なし風見の瓢簞見たやうに、ぶらり〳〵とねいけいでも探すが外には、些とも用の無へからだサ。なんと男はよく生れてえものサ」と頤へ手をあつれば、おてこは其手を拂ひ、おてこ「へン、あきれがお禮であぎれがかゝとだよ、面白くもねへ。朝ッぱなから請賃もなく、惚氣のお施主につくものかねえ」とつんと顏反向けて、煙草輪に吹き居たりけるを、吉五郎は脇の下へ手を入れてくすぐりつゝ、腹掛のかくしより態と音さしつゝ、櫻判一ッをやつと取出し、「ヤレ〳〵あぶない事な。既での事に眞實に怒られる處を、日頃信心する神佛のお蔭で笑顏を拜んだから、仲直りやら請賃やらに、五べい奢りかけやう」と彼金をおてこに渡せば、おてこは是を恥づる色なく請取りて、「今朝ちつと加減が惡くつてまだ御膳前だから、御馳走にならうよ。併しお氣の毒だねえ。其代りたんと惚けてお話しよ、請けてあげるから。これ母ア、此子を負つて、ちよいと使に往つておくれ。あの横町の伊勢屋でお酒と、あの向横丁の魚傳で、何か見繕つて買つて來ておくれ。兩方とも此お金でつりを取つて來るんだよ。落しちやァ好けねへから、財布でも持つてお出よ。ア、年寄をつかふは、子供をつかふより骨が折れる」と、あたかも小女にでも使ふが如くにこき廻されて、餘儀もなければおぬかは涙をおしかくし、玉の助を抱きながらも出でて行く。

八段

かくて酒も肴も來りければ、吉五郎は火鉢の側にて大胡坐をかいて飲始むると、おてこも昔取つたる杵柄にて、歌澤節の小唄を彈出せば、吉五郎は粹な聲にて一ッ二ッ語りかける折しも、おぬかは歸り來り、「これおてこ、玉坊は寢たから連れて來たが、此處に寢かして置かうか」もてと「エエ、もう寢たとえ、呆れも返らァ。自分が樂がしたいから、無理往生に寢かしつけたのであらう。今にも起きると世話だから負つてお出よ。氣の利かねへ。酒でも始まると、おかぶで言種をこせへては、歸つて來るよ。意地の汚ねえ」と、さもはしたなく罵るを、さすが吉五郎は氣の毒とや思ひけん、「まァ母ア、熱い處を一杯やらかして、寒さを凌ぎなせえ」もぬか「ハイ有難う御座いますが、私は嫌ひで御座いますから、お前さん方たんとお上りなさい」といひつゝ、玉の助を下に寢かさんとするを、おてこは見て、また眼を剝出し、「何故お前はそんなに情が剛からう。玉坊を下に寢かしたとて寢て居るものか、べらばうな。大概に知れさうなものだ。マアお酒の始つて居るお座數に、年寄は大の禁物だから、お向ふのお婆さんの處へでも往つて、死んで往く先の相談でもして來なせへ。サア吉さん、お爛がよくなつたから、置注にするよ」吉五郎「これは〳〵、おきつぎとは王子に御苦勞で御座います、などと洒落てもお前にや分るめ

え。ノウ母ァ」といひつゝ、隱袋より最前の剩錢を引出し、五六十文ある鐚をおぬかにやり、吉五郎「母ァ、是でお前は燒芋でも買つて來て食ふが好い。其代り今酒も直に仕舞ふから、それまでは何卒、其子を遊ばして來てくんな」ト追立てられ、餘儀なく又々玉の助を抱きて外へ出行きけるが、おぬかは流石大枚の身上に組立てる程の者ゆゑ、今わづかばかりの端錢は、見るも穢らはしと、心中大に怒れども、是とても皆我生みなせし奈久四郎の愚より、かくなり下りては、餘儀もなしと觀念なして、外へ出づるや否や、口惜しさの溜涙を一度に浮めつゝ、思はず知らず大地へ投げつくれば、かくとは知らず邊の童、「ヤァ玉さんの處のお婆さんが、錢を投げてくれるから、皆が來て拾ひねえ」と、友呼びたつる小雀の聲に、群々集りて、瞬く間に拾ひとりて、喜び勇み歸りゆくを、おてこは子供の呼立つる聲に、何事と櫺子窓よりそつと見て、心の中に首肯きつゝ、また元の座に歸り、是よりは誰に憚る關もなしと、さいつおさへつ大騷となりけるに、二人ともはや十分の醉を發しければ、諸ふやら舞ふやら大騷をなしてありけるにぞ、おぬかは其騷を聞き、心の中には呆れはてつ、餘儀なく近所を彼方此方と遊び歩くに、玉の助は頻に泣きたつるゆゑ、連歸らんとは思へども、また小言いはれることの苦しければ、なるたけ嫌して寢かしつけんと、出もせぬわが乳房をふくませけるに、吸へども〳〵響き來ぬ故、猶怒りて泣きたつるにぞ、たとへにも言ふ如く、泣く子と地頭には勝たれぬといひ、酒盛も果てたるにや、ひつそりなせし樣子故、怖々我家へ歸りけるに、こは如何に、おてこ吉五郎は、二人の裾へかり衣にあらで重ねし八重褄や、重きが上のさよとも言はず、誰憚らぬ八字省略有樣なりしが、さすがのおてこも飛退きて、さも間の惡き面持なれば、吉五郎も堪りかね、急ぎ三尺締直し、「ァ、醉つた〳〵」と、間の惡さうに立上り、斯る者の癖とはいへど、暇乞さへなさばこそ、鼻唄ながらに裏口より、逃ぐるが如くかへり行く。

九段

されば、おてこも何とやらん、母おぬかの手前うしろめたく、よしなき所を見付け出されたりとは思へど、素より一夜流れの川竹に育てば、あながちこれを苦勞ともなさず、腹の中にて括りを爲してありけるうちに、例と違ひ奈久四郎は、いと早く役所も退けたりとて歸り來にければ、おてこは出迎などして、今日に限り、脫棄てたる羽織を直に疊みなどして、ちやほやなすを、奈久四郎はいかでか悟るべき、涎流してありけるにぞ、おてこは急ぎ殘りし酒の燗をなし、喰荒したる肴を小皿へ寄せて、是を持出し、奈久四郎にすゝめければ、目を細くして飲食ひながら、奈久四郎「大層今日は御馳走だが、如何したのだ」おてこ進出で、「是は家で取つたのではな

いから、たんとお上り。その譯は、あの倶梨迦羅の吉さんが、お前に何か賴む事があるとて今朝來た處が、出た後へゆゑ力を落して、それぢや此酒肴は此所で片付けやうとて始めたから、其初穗を取つて置いたのさ。そりやさうと母アの讒言を、此間は餘程ろうもんをしたねえ。今日も吉さんが酒を始めると、子供の樣に何か食べたがつて、側にばかり附添いて居るから、うるさく思つてか吉さんが、お寺參のお賽錢にするが好いとて、お錢をいくらか遣ると、不承不承に取つて外へふら〳〵出たから、そつと覗いて見ると、子供呼集め、其お錢を投げてやつて遊んで居るから、呆果てて物がいはれない位だけれど、あんまり外聞が惡いから、叱散して家へ呼入れたら、其時の怒り立てた面がほんに見せたかつた。勿論そりや隣の金坊にでも、向ふの角さんにでも聞いて御覽、まるで狂氣の汰沙サ。尤もそれを止めたから、如何な事をいふかも知れぬ、其積で」とおのが惡事のあらはれやせんと、口から出まかせにしやべり散すも、豫ておろかしき亭主と知ればなるべし。

十　段

母のおぬかは、斯くとはいかで知りぬべき、外事ならぬおてこのしだら、年寄がひに見捨には、ならじと思ふにぞ、其夜おてこの湯へ行きしあとにて、密に奈久四郎を片隅へ招き、いと小聲にて、今日ありし仕末を殘らず語りけるを、奈久四郎は是を聞きもはてず莞爾と笑ひ、「それはそれは困つたものだが、夫よりはお前の病氣には困り果てるよ。成程其樣子では、隨分錢を投げてやりかねもしまい」と、とつてもつかぬ挨拶に、おぬかも拍子ぬけしながら、おぬか「おいらは何にも病氣は無い筈だが」奈久四郎「其無いといふのが、病氣だわな」おぬか「それぢや如何も仕方がない。併し子供に錢はやつたのさ。それが惡いのかえ。お前も些としつかりするが好い。勿論お雪もそれなりに離緣もせず、預けてあるゆゑ、彼が嫁には相違はないけれども、今の傾城どのも子まで出來て見りや、知らんものはお前の女房だと思つて居る。その者が不義があつては、御前の面汚になる。それゆゑ私も氣を揉むけれど、今それを言立てて出すが厭なら、彼の吉とかいふ奴を堅から寄付けないが好い」と、涙ながらに意見を加へけれども、おろかしき奈久四郎は是を受付けず、吹出して、「お前もそれが病の故だから仕方はないけれども、人の大事とするそんな事は、成丈言はぬ樣にするが好い。もしやおてこの耳へでも入つて見なせえ、それこそ大變だ」とは、餘りにのろま過ぎたる挨拶なり。

十　一　段

それより先おてこは湯へ行かんと立出でしに、折しも宵闇の事にして、誰とも分ねど我家を覗

き居たる者あり。剛氣のおてこは是を見咎め、「まア誰だえ。人の家を覗込んで、をかしな腰付をしやアがる。おいらの家は女湯ぢやアないよ」トさも憎々しく、憎まれ口を言捨てて行きすぎんとするを、彼の者はつか〳〵と立寄りて、おてこの裳裾をしつかと捉へけるにぞ、おてこは喫驚なしけるが、さすがは事になれたる者ゆゑ、我顔見せじとのまうけなるべし、持つたる提灯の火を吹消して其手を拂ひ、駈出さんとすれば、かの男は頰冠を取りて、「これさ、おてこさん、女湯ぢやねへとは、あんまり情ないお見立」といへば、おてこは吹出し、「如何かお前の後つきに似て居たゆゑ、からかつてやつたのさ。時に吉さん、氣味の悪い、何を覗いて居たのだえ」「何もねへもんだ、今日の樣子が氣にかゝるから、どんな鹽梅式だかと立聞と出かけたのさ」おてこ「なに、あんな事をかまふものか、お前にも似合はねへ氣の小い事を言ふ人だよ。だが此所で話をして居ちや、どうも中の字だから、明日賣の内に來ておくれ。ちつと話したい事があるから」吉五郎「なんだか、お袋の前へきまりかたが、悪いけれども、面の皮千枚張と出かけやうそれぢや話は明日の事としやうが。お前は何所の湯へ行くのだ。湯か、それぢや一所ともいかねへ」おてこ「アヽそれぢや明日は屹度だよ。さうして浮氣をして歩かずに、今夜は直にお歸りよ。オヽ寒くなつた。ドレ一風呂暖らう」と立別れ、おてこは湯へ行きしが、暫時ありて我家へ歸り來りけるに、母と良人との話聲するにぞ、臑に疵持つおてこは、何事にやと家へも入らず、格子によりて其樣子を聞居たり。めでたし〳〵。二十四編引續き賣り出し申候。

往昔新吉原なる扇屋のかゝへに、花扇といへる遊女あり、容儀の衆に勝れたるのみならず、心ざまやさしく、殊に諸藝に秀で、就中歌道に名を得たる故、引手數多の客の裡に、さる有德なる町人の子息、深く馴染んで通ひ詰むる者ありけるが、花扇は怡ばず、時としては意見を加へ皈しけるを、息子は猶々その深切になづんで、居續してのみありければ、その母案じ過し、或時花扇の方へ文送りける、その文にいはく、「一方ならぬえにしあればこそ、其方へのみ通ひ詰むる事、更にあしくは思ひはべらねど、從來病身の生れなれば、日夜酒宴にのみ長じては、終に病の種ともなり、また妾にも、外に子といふものあらざれば、迚には歸して、母の心をも慰めさせ給へかし」ト申送りければ、花扇は、なんと書くべきことさへ知らず、たゞ一首の歌を詠みてかへしける。その歌に、

うき身には何とわくべき契りてし人の情と人のなげきは

かくなん一首の裡に、千萬無量の思を籠めたれば、その母も、花扇の心中賢なるを知り、急ぎ身請を做して、宿の渾家として遣しけるに、息子はほどなく、病に染んで死しければ、花扇の歎大方ならず、髪を下して尼となり、朝暮佛に仕ふるそのいとまには、姑に孝行を竭すこと尤深切なれば。泥中の蓮葉と稱讃して、專ら其頃評判せしと言へり。夫程までになくとも、卷中に說くおてこの行狀、同じ遊女たりしと雖、花扇に競べて、何とか評せん、實に人面獸心ともいふべし。乍併天の照々たる、奚さる者の末榮ふべき、終に非業の終を遂ぐるに至る。扨は次編に說くを讀み得て、孝貞の二字の貴きを知り給へかしといふ。

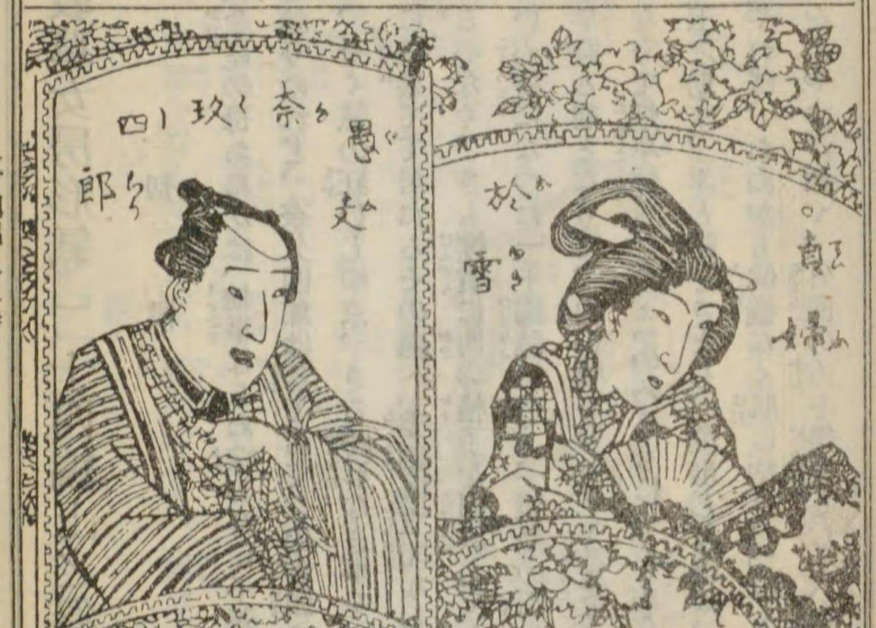
于時慶應元乙丑稿成
同二丙寅歲初春發兌

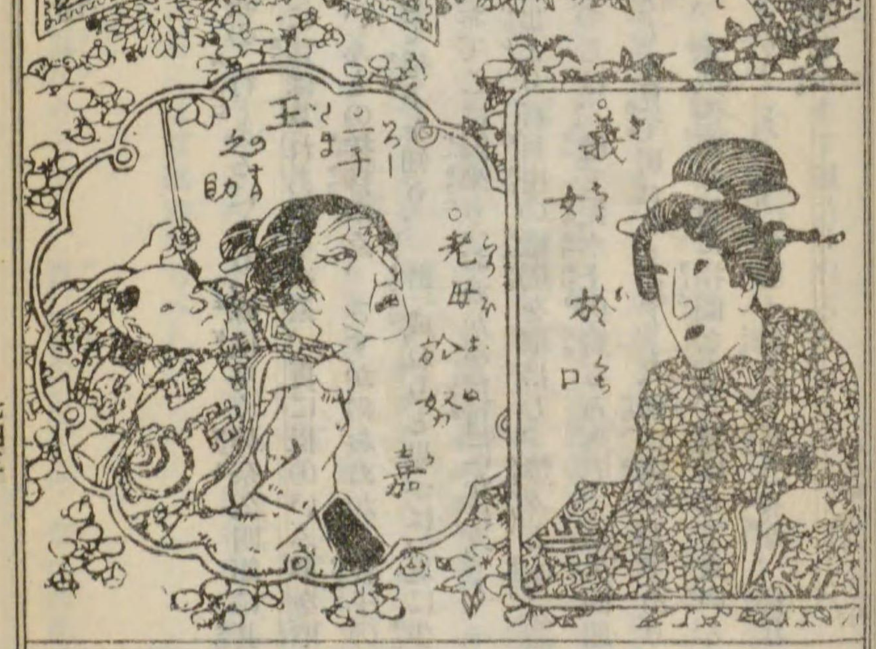
鶴亭秀賀識

教草女房形氣

二十四編

上之卷





教草女房形氣　二十四編上之卷

初段

黄金屋の母おぬかは、他事ならぬ嫁の身に不義の行あるにより、餘儀なく悴奈久四郎に其趣を語りぬれど、奈久四郎は豫ておてこの舌頭に迷はされある事ゆゑ、更に母のいふ事を取合はず、全く氣の狂ひしゆゑ、さる跡形なき事をいふとの挨拶ゆゑ、さすがのおぬかも我子の愚しきに呆果てて居たるその處へ、委細は立聞なして樣子を知り、計成れりと思へば、更に少しも憚る心なく、さも慳貪に門の格子を明放しておてこは歸來り、おぬかを尻目にかけつゝ、「ア、好い心持になつた」ト獨語ちつゝ、鏡臺の引出より百目掛の蠟燭を取出し、煥々と明を照し、最早寢る前となりて、白い物をベタ〳〵塗立つるは、總て泥水上の癖なるべし。奈久四郎は横になりて烟草燻らせつゝ、のろくもにや〳〵として見て居たりし折しも、傍に寢かしてありし彼の玉之助は、ふと眼をさまし、泣出しければ、奈久四郎は母に指圖なし、遊ばして來いと追出しやれば、おぬかも餘儀なく肌に抱き、「ねん〳〵ころ〳〵」の聲も曇りて暗き夜を、父なき孤兒をあやすが如く、外面の方を幾度となく、賺し歩きて居たりける。

二段

去程におてこは、愚しき亭主ゆゑ、母の口より不義のしだら顯れければ、「病氣ゆゑ斯る跡形なき事を口走るに違なし」といはれければ、おぬかは其口惜しき事、何にたとふる物なけれど、素より心よき生れなれば、それなりけりに打捨置きけれど、おてこは是よりおぬかを憎む事以前に倍し、能き隙もあらば人知らず亡きものにせんと思ひたちぬれど、また能々思ひまはすに、其身は糠袋一ッ縫ふ術さへ知らざれば、今殺してはは損なりと、虫を押へて居たりける。痛しい哉、母おぬかは、煮焚の世話より孫の守、又少しにても暇あれば、やつと針の目を通しつゝ、張替物を仕立直し、又其間には賃糸取りて、少しなりとも家の助になれかしと、二重になりし腰を延しつゝ、身を粉に碎くをそしらぬ顔に、おてこは始終ぬらくらとしながら、頭は日毎の樣に髪結の手にかけ、湯は三介に流を賴み、かく貧窮の中となりても更に構はず、垢染みし著物を著ながら塗立て、長屋中をそゝり歩き、此所の内儀さん、かしこの亭主、誰彼の差別もなく、噂話をなし歩くにぞ、近所の者も、餘りに好くは言はぬなるべし。

三段

張仲景といへる人の著したる醫書に、人は病の器なりとあり、實に宜なるかな。奈久四郎の母

おぬかは、隨分達者の生れなりしが、年さへ多く重ねたるゆゑにや、不圖せし事と打臥せしが、段々に重りゆき、終には半身痲痺れ、起居も自由になりがたく、全く中風の樣子なれど、おてこは勿論、奈久四郎とても打捨ておき、早く死ねよかしと、言はぬばかりにあひしらひ、醫者にもかけず、買藥一服も呑まさぬにぞ、おぬかは口惜しき事におもへども、是ぞ前世の約束ならんと觀念なしつゝ、かゝる邪見の嫁の手にかゝり、若や下の掃除をさせるやうな事のありもせば、それこそ殺さるゝも知れざれば、未だ雪隱へも一人通の出來る内に、早く命を縮め給へかしと、旦暮神佛へ祈るといへど、更に其驗はなく、惡しくもならず善くもならず、横になりたる儘なれど、もと中風のくせとして、食物は更に味かはらず、三度の食も待つばかりなれど、おてこの顏色を見て言出しかねて居るを、態とおてこは己等のみ食べ終り、そしらぬ顏してありけるにぞ、餘儀なくおぬかは聲をかけ、「おてこや、お飯が濟んだら、氣の毒だが私にもおくれ」と、さも言憎き樣子なるを、おてこは憎々しげにも睨まへつゝ、「へン呆れもけへる。死にかゝりのくせに、三度の飯を三度食はうとは餘り押が重てえ。此高い米を食潰されちや堪るもんぢやねへ。一度やそこいらは我慢をするが好い。それにお氣の毒だが、今朝は有りたけ食べて、お晝炭の積だから、お前の食べるやうな餘計な御膳は一粒もないよ」と言放して、烟草輪に吹き居たるにぞ、おぬかは何にもいはず、ほろりと涕す一雫、見つけられじと、そと拭ひつゝ、餘りといへば情なしと、袖を銜へて泣居たる其處へ、豫ておぬかとは中好なる、同じ長屋に住む小間物屋清吉のお袋お實といへる婆さん、念佛稱へながら入來り、「おてこさん、今朝は餘程寒いぢやないか。玉坊さんはおねんねかえ。此節は肝腎のお守が病氣で、お困りであらう」と捨臺詞をいひつゝ、おぬかの傍へ行き、「どうだ、今日も矢張同じ事かえ」と問ひつゝ、袂より燒たての甘藷を取出し、「こりやをかしな物だが、あんまり暖かさうだから取つて來た」と差出すは、豫ておぬかには食物を碌々あてがはぬ事を知るゆゑなるべし。おぬかは是を押戴きつつ、先一ッ二ッを食して腹をとゝのへけるにつけても、兎に角むかしの事の忍ばれて、猶々袖を絞りける。

四　段

然るにおてこは、此お實とは痛く中あしければ、顏を見るより物をもいはず、玉の助を抱きて裏口より立出で、豫て中よきおきやんといへる閨女の所へ遊に行き、少しばかりの錢を取らして玉の助を近所の子供に預けおき、何事をかべらべら話して居たりける。おぬかは是幸とお實に對ひ、かやうく云々なりと、おてこの非道を話して咽入れば、お實も暫しは貰泣して居

たりしが、おぬかの心を休めさせんとて、「成程、それは餘り情ない仕方ゆゑ、お前の腹立も無理ではないが、此中も伊勢十様のお座の時にも、老いては子に從がへと阿彌陀様が仰やつたとのお談義、成程、年を取つては我子にも手を置かねばならぬ、何でもかでもそんな腹の立つ時は、お念佛をさへ申して居れば、腹もたゝんといへば、お前も其積で、一遍も餘計にお念佛を申して、彼の世へのお土産を、たんとこしらへるが好い。其内にはお前でも私でも、お迎が來て目出度彼の世へ行くであらうわサ。とは言ふものの私なんぞも、嫁の事では年中修羅を燃すのサ。聞いておくれよ、此間もお寺參に出かけやうとすると、おつな目付をして私の形を見て居たが、彼の淸吉にいふには、内の母アは六十七十になつても、まだ色氣があると見えて、著飾つて行くといふから、聞けば聞腹で默つても居られないから、あゝあるとも〳〵、是でも色男の二三人もあるから、有丈の著物を著散すのサと言ふと、マア減らない口といふものは、さうサ、お前の著物は、縞でも小紋でも、皆むかし物の無意氣なものばつかりだから、遺物分に貰つても仕方がないから、何でも著飾したてて、著て〳〵著枯して襤褸にするが好い、その時分にや此子の弟が出來るから、お産襤褸にでも仕様といふから、私も口惜くつて〳〵堪らないから、食い付いてでもやらうと思つたが、此處がお念佛の申處だと、ヤツとの事辛抱して居たのサ」

おぬか「それでもお前の處の息子さんは辛抱人で、能く商賣に精が出るから何よりサ」お雪「それにや、世話のやけない奴サ。オヤ何かふきこぼれるが、七輪にかけてある物は何だえ」と聞かれておぬかは、先涙を浮め、「お實さん、何でも實の子でなくては好けないもので、私が今度是程の煩に、お醫者様は勿論、買藥一服呑ましてくれない處が、昨夕も奈久四郎がお役所で聞いたからとて、中氣の藥を買つて來てくれたのサ。それをお賴み申すの百遍も言つて、漸くおてこが仕かけてくれたのサ」と聞いて、お實は捨てゝもおかれず、彼の藥を茶碗に移し量見んとするに、其匂何とやらんをかしければ、急ぎ包紙を見るに、こは如何に、中氣の藥にあらずして、菊の露といへる髮の毛の癖直にありければ、お實はをかしさ押隱し、「こりやおぬかさん、お藥ではない、菊の露といふ髮の癖直だよ」と聞いて、おぬかは膽を潰し、「おや〳〵さうかえ。尤も毒にもなるまいが、とんでもない物を奈久四郎奴買つて來あがつた」と口惜泣に泣き居たるを、お實は何といふべき詞さへなければ、「全體あの癖直は、小野様とかいふお醫者様から出る故、降出になつて居るから、大方間違へなすつたのであらう。どれお暇にしませう」と、をかしさ怺へてお實は歸りゆく。

教草女房形氣　二十四編下之卷

五　段

跡におぬかは、能々考へ見るに、更に合點ゆかす。昨夜奈久四郎の買つて來ておてこに渡した時、不承々々に鏡臺の引出へ入れたれば、若や癖直と間違へはせざるにやと、這出しながら何の心もなく鏡臺の引出を拔見るに、案の如く中風の妙藥といへる振出藥のありけるにぞ、さすがのおぬかも、おてこのいきなり次第を怒りつゝ取出さんとするに、傍に文のありければ、思はず披き見るに、おてこより彼の倶梨迦羅龍の吉五郎方へ送る文にて、此頃も話したる通り、二人の中を婆アに見付られしゆゑ、好き際もあらば締殺せし上、奈久四郎をも人知らず亡きものとなし、誰憚らず夫婦になりたしなど、細々したゝめてあるを、おぬかは拾讀なしつゝ大に怒り、おのれ賣女奴、おろかしき亭主と見下げ、大金出して請出されし大恩を忘れ、奈久四郎を殺して彼の吉五郎と夫婦にならんとは、以ての外のたくみなり、是さへあれば、如何なる奈久四郎も膽を潰して眼の覺めんか、いやく現在重り合ひて居る處を見附けしゆゑ、告知らしてさへ知らぬ顔して居る位の彼の奈久四郎、矢張いひくろめられて居たる處は、猶々私一人憎

しみを受ける道理、此處がおじつ婆アさんの言はれし通り、眼を睡つてお念佛申して濟さうか、いや、他事ならぬ此一條、と彼の文を碎くるばかりに握りつめつゝ、打案じて居る其折しも、裏口よりづつと歸り來りし嫁のおてこ、それと見るより、おぬかは序あしゝと彼の文を急ぎ後へかくし、そしらぬ顏して居らんとすれど、鏡臺の引出拔きてあること故、おてこは早くも見つけ、こりや大變の物を取られしと、玉の助を傍に寢かし置き、けんそをかへて母の側へ行き、「是母ア、今お前が見て居た文を一寸お見せ」ト優しくいひて油斷をなさしつゝ、瘦衰へしおぬかの細腕を捻上げつゝ、彼の文を手早く奪ひかへし、口にて散々に裂捨て、最早よしと莞爾と笑ひつゝ、「サアこゝなどろばう婆ア奴。人の入物を探して何を盗んだ、白狀しろ。モウ斯うなつては親とはいはさぬ、畜生奴」と、夜具の上より馬乘となり、此時を幸ひ人知れず締殺してくれんと、細帶を手早く解きて、おぬかの首をぐる〳〵卷となし、一世の力を出して締殺さんとするに、未だおぬかの運や强かりけん、さして古きといふにもあらぬ細帶の、フツリと斷るゝ途端の拍子に、不思議に傍にすや〳〵寢て居たりし玉の助の、怖き夢をや結びけん、魂消るばかりに叫立つるにぞ、さすが邪見の夜叉女も、思はず手元をゆるめて、急ぎ玉の助を抱き上ぐる、其隙に、おぬかは急ぎ逃出し、危き命を助りて、ぶらり〳〵と輾けつ轉びつ、夢中に裏口より逃出し、彼のお實の家を心ざし、一生懸命に漸く逃行きけるが、小間物屋へ上るや否や、最早よしと思ふにや、ウンとばかりに正氣を失ひ倒伏せば、何事にやと、小間物屋にては大に驚き、それ水よ氣付よと介抱なせば、漸くおぬかは元に復し、それより斯樣々々云々なりと、委細を語れば、おてこの無法を皆々憎むといへど、斯くて其儘打捨てもおかれねば、淸吉は長屋の者二三人を賴み、仲人となりおてこの心を宥め、仲直をさして、漸くおぬかを送歸しければ、一旦は無事に濟みにける。

六　段

然るに此小間物屋の淸吉といへるは、至つて口前の好き男なるゆゑ、多くの屋敷へお出入なして糶歩くに、何方にても淸吉々々とて可愛がられけるが、或日秩父の屋敷へ行き、多く商なして、それより部屋方の相手に、例の剽輕話をなす序に、「私どもの近所なる黃金屋にて、中氣の藥鶴齡湯と、髮のくせ直菊の露と取違へてより、嫁姑の大喧嘩となりし其仲人となり、誠に困りました」と、少しは尾鰭をつけて人の笑になるやうに話しければ、皆々大笑をなすその中に、一人の部屋方其話を聞くより、何か心にあたりけん、淸吉を密に招き、猶も其委しき事を問ふにぞ、淸吉もまさかに隱立もならざれば、斯樣々々云々なりと語りければ、其部屋方は

わつとばかりに泣伏すにぞ、清吉は其譯を知らざれば、よしなき事を話せしと、大に後悔をなしつゝ、立端を失ひて居たりける。これ如何なるものぞや、次に說解くるを讀みて知るべし。

七　段

其後おてこの思ふやう、餘りにおぬかの憎ければ、此時を幸ひに締殺さんとなしたるに、思の外の騷となりし故、餘儀なく其場は濟したれど、何もかも委細に知りたる上は、生して置いても氣がかりなり、さりながら斯る騷をなせし上は、直になせば必ず我所爲と知るゝは必定なれば、折を見合せ、今度は毒藥一服用ゐてやらんものをと、根締を極めてぞ、知らぬ顏して居たりけるは、實におそろしき心根なり。或日の事になん、彼の俱梨迦羅龍の吉五郎は、此節打續きたる不仕合にや、腹掛股引さへもなく、玉紬の五本天縞なる、最早八ツ時といへる、いと垢染みし袷一ツを著て朝湯に入り、寒を忘れしといふ形にて、濕手拭を肩にかけながら、「伊達の薄著も貧からおこる」と、鼻唄ながらに入來り、「大分今朝は早かつたのう。オイてこじるし、賴む事があるから、顏をかしてくんな」と言ひすてて出行くは、餘りに二人の評判高ければ、さすが家にては然る淫の振舞もならざれば、中宿をこしらへたるなるべし。おてこは「アイ」と言ひつゝ玉之助を抱き、「また貸してくれろか、困つたもんだ」と獨語ちつゝ出でて行く。後へ引違へて

一人の女、彼方此方とまごつきながら、小腰を屈め、「ハイ烏渡お賴み申します、黃金屋樣のお假住居は此方で御座りますか。私は以前御恩を受けた者で御座います」トいふ聲は、どことやら聞馴れし樣おもへば、おぬかは少し床を這出でて、「何方樣か存じませぬが、黃金屋は此方で御座います。御用ならお上りなさいまし」トいふ聲は、覺えあるおぬかの聲音なれば、此方は嬉しく、「そんなら御免遊ばせ」と上りけるが、廣くもあらぬ家の事故、屏風の立てし處は、病間ならんと、供に持たせし包を持つて側へ行き見るに、おぬかは有りしに事變り、貧苦に煩ひ病苦に責められ、たゞさへ面瘦せしそが上にも、寒れにやつれし其有樣、實に見るかげも無きみぞぼらしさ。それに引かへ、また片方は、さすが大家に勤むることゆゑ、低き役とはいへど、見樣見眞似の上品造、これまた見違へる程にありければ、互に顏見合し、膽を消すばかりなりしが、漸くに、おぬか「オヤおぬしは、お雪の附人おくちであつたか」むくち「まことにお久しぶりで御座います」といひつゝ、互に先立つものは涙にて、暫し詞もなかりける。

八　段

おぬか其後とも更に咽入りてありけるを、おくちは、「お道理樣や」と背撫摩りつゝ、さていふやう、「表立ちて御離緣といふ譯でも御座りませねど、一旦夫に見限られし者より、使立てるも

如何なりと、お雪樣には思召しますれど、不圖した事より、當時の御有樣を委しく御存じありましてからは、朝晩の物さへ召上らず、御心配を遊ばす故、私が一生の智慧をふるひまして、昔勤めしものと僞りて參らば、今のお嫁御樣の前を憚る事も御座りませぬとおすゝめ申して、今日は御病氣見舞のお使に上りました」と、彼の小間物屋より委しく聞きたる事などを語りつつ、おぬかの口に合ふ物ばかりを、重詰となしたるを土產として差出し、其上金子五兩を取出し、「これは餘り失禮ながら、せめては召上りたき物を取つてあがるやうにと、あなたさまの御心入、お請け遊ばせ」と渡しければ、おぬかは、世にありし時の千金にも優して嬉しく、押戴き、折角の心入れゆゑ、道ならねど貰つておきまする。そしてお雪は、其後秩父樣の奧へ上りしと風の便に聞きましたが、矢張お屋敷にまめで居る事かえ。此方でも彼の事一日も忘れる隙はないけれど、思ふにまかせぬ事ばかり、疎遠にするのを憎しとも思はず、能く深切な今日の見舞、私や嬉しいにつけても亦悲しくなつた。どうで儘ならぬ此浮世、いつそ死にたくなつたわいの」ト身を慄はして泣居るを、おくちは慰めかねつゝ後に廻り、「サ、其樣におむつがりましては、却つて御病氣の障、幸ひお嫁御樣のお留守の御樣子、少しなりとも彼方樣の御代に、お肩を揉んで上げませう」とひねりかゝれば、おぬかは勿體なしと否みながらも、是よりは又涙な

がらに、おてこの身の上より、慳貪邪見の振舞を始め、又不義のしだらのある事までを殘りなく語りきかすれば、おくちも呆れはてつゝ、「さればこそ、さすが時めき榮えたる御身上も、わづかの内に斯くまで零落れ給ひしも、實は若旦那のお心得違にて、そんな者に卷込まれ、あなたを粗末になし給ふ御罰にや御座りませう」とは、おくちの口よりは、ちと出過の樣には聞ゆれど、大事と思ふ主を見限られしを、悔しく思ひての故なるべし。

九段

斯くておくちは、見ること聞くこと哀ならずといふ事なく、げに世は塞翁の馬にして、有爲天變の浮世ぞと嘆息なしてありけるが、歸りには太良福屋へも寄る筈なれば、あまり遲なはらぬ内と、名殘惜くも暇を乞へば、おぬかは何ととどむる由もなく、絕入るばかりに咽入れば、おくちも立ちかねて居たりしが、まご〳〵なして在るうちに、おてこの歸來りなば、間の惡からんと、漸くに思切りて立上り、またを約して歸りける。爰に又おてこは、吉五郎に他事ならぬ打續きての不仕合ゆゑ、是非とも三四兩の金を働きくれよ、さもなければ駈落と聞いて、おてこも、と胸をつき、當もなけれど、其内には工風をなして見んものをと、約束なして先刻歸來りけるが、二人の話を委細に聞取り、腹中大に悅び、何か點頭きつゝにや〳〵笑ひかけ、おぬ

かの側へ行きけるは、如何なる心入にや。なほ次の卷に說わくるを、發兌の時を待ち得て知り給へかしといふ。めでたし〳〵。

教草女房形氣

廿五編 結局

二十六編よりの御披露

是は此度、世にも珍敷咄の次第ト、其頃專ら賣歩行しよし、一書に見えたる中往昔のことになん、兄弟姉妹ありけるが、其心大に賢愚の違ありて、亦貧福に差別、行跡の善惡、雪と炭との如く、一世の盛衰、最面白くして、喜怒哀樂の人情、細なれば、教草にもなるべき事の多ければ、實說を其儘掲出したるは、又一入御眼前も替りて、よからんと思へばなり。御求御覽あれかしと、俗々敷も次編の御披露旁、此編の序文に換へるものは、未口嘴も青々しき

鶴亭秀賀述

敎草女房形氣　二十五編上之卷

初段

さても奈久四郎の妻おてこは、思はずも立聞なして、母の方へ、先妻たるお雪より、おくちを使となして送越したる黄金のありけるを、慥に知るよりは、かの餓鬼道の食物を見るごとく、いたくも打悅び、かの密夫の吉五郎が、打續きたる不仕合を救ひやらんと思ひける。すべて浮草の流の末は、かゝるならずものの果を好み、殊の外身を入れけるゆゑ、なにとぞ荒立てずして金を奪取り、一刻も早く吉五郎の悅ぶ顔見んものをと、さまゞの工夫を凝しける。

二段

然るに、おてこ思ふやう、母おぬかとても年こそ寄れ、なか〳〵にさるものなれば、貸してくれろと言ひかくるとも、直ぐすなほに出す事にはあらず、騙すにしかじと心を定め、いつに變りていとにこやかにも笑ひかけて、今歸りし如く、跫音高くも、おぬかの枕元に行き「今日は如何だ。おや〳〵ちつとは好ささうな顔付。それは何より嬉しい事。それでは何ぞ食べたいものはないか。なんなりと遠慮なくおいひ。どれ〳〵ちつと摩つて上げやう」とは日頃に打つて

かはりし優しさ。おぬかは更に合點ゆかねど、素より正直の生れなれば、人も亦しかなりと思へば、これは慥に、お雪の使おこしたるを知り、さすがにそれに心恥かしく思ひ、急にかくいふにや、又は日頃信心をなす阿彌陀樣のお蔭にて、邪見の角も折れて、かゝる優しき心となりしにやと思へば、そゞろに嬉しく、「はい有難う。今日は昨日より餘程好いやうなれば、勿體ない、摩つて貰うては罰があたります。おや玉坊は晝寢かえ。風でもひいてはなりませぬ。是を著せて、其所へ寐かすが好い」と最垢染みたる搔卷にて、おぬれは古布子ひとつとなり、更に寒がる氣色なきは、かの諺にもいふ如く、孫の可愛さは、又別にして、堪らぬものにやありぬべし。おてこは折よしと膝すりよせ、「今も家主の太六さんの所で見て來たが、御番所羽織にするとて、麴町の岩城桝屋より取寄せしに、縞柄の氣に入らぬゆゑ、拂物にしたいが、お前の所の奈久四郎さんはどうだと、おかみさんの話、尤も直段は半分にて、代物は極の上物、幸ひ羽織も荒布のやうになりたれば、お貰ひ申したいとは言つたけれど、差當つてお金の工面も出來ず、折角の掘出し物を、他へ遣るのも殘念だ。なんとお金があるならば、二兩ばかり、うちで歸るまで、貸してはおくれまいか」とたくみにかけし金のわな。おぬかは心中に驚くといへど、胸撫下してそしらぬ顔、「おゝ、それは好い拂物ゆゑ惜しい事だが、お金といふものは、近頃私は

見た事もない。何であらふ筈がない。奈久四郎の歸るを待ちて、兎もかくも相談なし給へ」ト聞くよりおてこは眼を剝出し、「おゝ、金といふものは見た事もなからうが、たつた五兩の包金、慥に知つて居るゆゑに、皆ともといふ處だけれど、格別の勘辨をもつて、半分に足らぬ二兩ばかりの眼くされ金、かはい子にくれても罰もあたるめえ。なんぼ死慾が張るとても、そんな心ゆゑ、年を取つて難儀もする。この老耄奴、出さずば出さずに置くがよい。なにそのまゝに捨ててておかんや」と鬼神羅刹の如く、髪を逆立て、滿面に朱を濺ぎし有樣は、さも悽じきに、おぬかは身の毛もよだつおもひにて、おてこの顏を見かへす事のならざりしが、かくいふからは、貰ひたる金を見しゆゑに、かくはいふならんト思へば、餘儀もなく〳〵金を包のまゝ取出し、二兩取分け、「是は私が惡かつたが、折角嫁の方より内々にて送りしゆゑ」トいひつゝほろりと一雫。おてこはせゝら笑ひながら、「嫁とは私の外にはない筈。そして、いみ〳〵しい、泣く程此金が惜しいものか。寶は世界をまはるゆゑ、調法もするし、仕舞つておくなら、石瓦も同じ事。思切の惡いにも程がある」ト口小言さへだら〳〵に、ひつたくるやう彼の金を取上げ、巾著の中へ押入れ、につことなしつゝ、そのまゝまたも出でて行く。

三段

おてこは猫の鼠を捕りし如く、勇みよろこびつゝ、一刻も早く吉五郎にこの金を渡し、喜ぶ顏を見て樂しまんと、いつも居る所へ尋行きしが、居らざれば、またほかを彼方此方と探せど、更に出合はず。然るに丁度好き所にて、吉五郎の友だちに遇ひけるゆゑ、吉五郎の行先を問ふに、よくも知りて、「さらばとよ、吉公は、いかにしてたんさんをきめこみしにや、櫻判をみつよつ懷中にして、好い金張のある故に、鰕で鯛を釣る積にや、出かけて行きしが、かはいや今頃は、四月八日のお釋迦さん、丸裸體となりて、壺でも振つて居るならん。しかしさういふ身共は、一錢の手段も盡きて、かくの浪々。なんとおてこさん、いかほどか貸してはくれまいか。大方吉公の彼の金も、お前の算段ならん」ト星を指されて、おてこは笑ひながらも、「好い氣なかんだ。人聞が惡い。止してもおくれ」といひつゝも立別れ、急ぎかの所へ至り、吉五郎を呼出し、樣子を聞くに、案の如く薄資本ゆゑ、忽ち利を失ひしといふゆゑ、かの金を取出し、さもほこりがに渡しぬれば、吉五郎は手を合して拜みつゝ、今一番これを資本に大金儲けんと、心を入れて張掛しに、なんぞかゝる不義の財に利のあるべき、こひめは鵶の嘴と喰違ひ、瞬く間に、また打負け、唯茫然と胸の邊にふたつの玉をこしらへ、脚爐を股へ押入れて、恨めしげにも、場所の方をば眺め居たり。

四段

おてこはさすがに女の事、かゝる場所へ踏込みし事なかりしが、千金は湯水の如く、さも富貴に見えけるゆゑ、膽を消しつゝ、かの場所を覗き見るに、黄金白銀を塵芥の如く取扱ふ有樣、なるほど一當あてなば、濡手で粟の摑取り、資本が肝腎なりと思ひ、歎息なして居たりしが、ふと思ひけるに、いまだ母おぬかの、三兩持居る事を思出し、今一番、これを捲上げて資本にさせんと、そのあらましを、吉五郎に話しおき、取つてかへせし處、玉の助も能く寢入り居たるに、母のおぬかも、同じくすや〳〵睡り居るにぞ、是幸ひなり、在所は慥に見て置きたるぞと、盜出さんと寢息をよく〳〵考へつゝ、先刻仕舞ひ置きし、蒲團の下へ手を差入れ、かの金包をうま〳〵と探しあて、引出さんとする時、おぬかは年寄の事、敏くも目を覺しけるが、おてことは知らず、膽を消し、おもはずも聲を立て、「どろばう〳〵」と二聲三聲こゑを先途と喚くにぞ、さすがのおてこもあわてふためき、おぬかの上に馬乘となり、わが顔見せじと、目を押へ居たりしが、さそくの思案にくれながら、いつその事ひと思に、押片付けんと、手早くもわが細帶を解き、おぬかの首をクル〳〵と卷締め、力に任して締つくるにぞ、おぬかはあれよの聲さへ立たず、七轉八倒なして苦しむに、人や見ん、早く押片付けんと、猶も一世の力を拳に入れ、うんと言ひたる途端の拍子、ふつと斷れたる細帶の、手先は狂ひて、傍に寢て居たりし、玉の助の脾腹のあたりを強く撲てば、なんぞ圖らん、玉の助は、眼口より鮮血を出して、のたうちまはして苦しみしが、もろくも息の絶えけるにぞ、鬼神を欺くおてこなれども、かはいわが子を、行違ひとはいひながら、わが手に殺し、なんぞ驚かざらん、なにもかも打忘れ、藻脱の殼に取付いて、撫でつ摩りつ、歸らぬ事を小車の、しゞのはしがき搔口說き、噎入り〳〵正體なくも歎き居たり。

五段

おぬかは能々天の助にやよりけん、やゝ息吹返し、かゝる騷とも知らず、猶も「どろばう〳〵」と、夢中に騷ぐにぞ、あたりの人は何事やらんと駈來り、見れども更に盜人らしきものなく、おてこの樣子、おぬかの有樣、更に合點ゆかず、おの〳〵けどんの顔にて眺め居たる處へ、奈久四郎も歸來り、是も亦肝を消して、更に合點ゆかず。その時おてこは、やう〳〵顔を上げ、「いかにして玉の助は死せし」といふにぞ、皆々はじめて驚き、「さすれば大變なり、まづ誰彼は醫師を呼來よ。また誰は艾を買來れ」と人鬼はなく、彼是長屋の者の立騷ぐにぞ、おぬかの事を、さいはひに誰不審するものなかりし折しも、醫者の來り、早速に脈を診し處、六日の菖蒲十日の

菊、はや縡切れて程經たる事ゆゑ、いかにともせん術なく、餘儀もなければ、それより又野邊送の支度をなし、一片の烟となしにける。嗚呼憐むべし。所謂親の罪子に報ふといへるは、これをやいふべし。

六段

さるほどに、玉の助の野邊送は濟みぬれど、かの諺にもいふ如く、惡事千里を走るのならひにて、誰いふともなく、おてこはわづかの金に眼がくれ、母おぬかを縊らんとせしその手の逸れて、かはいわが子を殺せしとなん、天の罰こそ怖しきなんどと、とりぐの評判ゆゑ、その事おてこの耳に入り、やすからぬ事には思へど、人の口には戸もたゝず、さすがの惡女も痛く恥らひけるが、更にせん術なかりける。然るに吉五郎も名うての惡黨、舊惡のある上にも、よからぬ事のみに世を送るゆゑ、めあかしどもの此程は、附覘ふよしを聞き、さらば急ぎて巢をかへんと、行がけの駄賃に、猶もおてこをたらし、路用の算段させんものと、そのあらましを程よく口にまかせて語りけるに、おてこもかの惡評をうけ、とつおいつ、胸に思案の折からなれば、今は足手がらみもなし、同じく共に高飛せんと、彼の事どもを落なく語れば、吉五郎もその大膽なるを心に怖れながらも、さもあらば、かくくなして、金をとゝのへよかしと、何か耳に口寄せ、惡たくみをすゝめける。

教草女房形氣　二十五編下之卷

七段

ある黄昏の頃、役所歸りの奈久四郎は、辨當腹にいとひもじく、はや足に歸來りしに、おてこはぐでん〳〵に醉倒れ、枕元に貧乏德利をいくつか竝べ、さも苦しげなる母の大病も打捨ておき、さも心よげに寢て居たりしが、やう〳〵に眼を覺し、頻に水を呑み居たり。奈久四郎は苦き顏して、夕飯の支度を急げば、おてこはぶつてうづら、「なに、夕飯が喰ひたい。お前も呆れたあんぽんたん、何所から米の錢が出る。私も腹が減るゆゑに、據なく酒を呑んで悚へて居た。それよりはお前の留守に、大變が出來たぞえ。よもやお前も忘れもしめえ、しかも私を請出す時、福田屋德助さんの所へ、千兩の家質を置き、五百兩借りたとは、其時慥にお前の話。ところが今となつて顯れたのは、期月が來たゆゑ、よく〳〵穿鑿した處が、彼は皆番頭粉助のしやらくにて、沽券はまつかな僞物にて、謀判の由。尤もお前の名前ゆゑ、このまゝ公事に致しますとの事。さすれば、物言はずお前の大變。それ故、さま〴〵に詫言して、今日の處は歸しました。なれども斯る姿となつては、今更せんなく、どうで徒でも濟むまいから、その積でお出。それにつけても、さういふ罪のある亭主を持つて居ては、今にもひよんな連坐に遭ひます。それより今の間に暇を貰ひませう。尤も昔なら二百とか三百兩とかいふ處だが、鑑さへ一文もない人に、それではとても出來めえから、大負にして二十兩貰ひたい。それが不承知ならば、訴人して、お前の首へ、ひよんな物でもつけて上げん」と巧みにたくみし嘘の皮なれども、愚の奈久四郎は仰天なして膽を潰し、只茫然と途方に暮れて居たりしが、おてこは猶も得たりと、入智惠なすやうは、「母の大病ゆゑと泣付かば、たらふく屋などにては、譯もなく貸してやくれんに、明日とはいはず今宵すぐ、是より行き、借りて來ねえ。はやく〳〵」とせりたてられ、奈久四郎は、腹のへりしも何所へやら、口よりまた大變の出來りしと、うろ〳〵なして居たりしが、餘儀もなければ、ぶらり〳〵と出掛けて、早くもたらふく屋の門まで來りしが、さすがにその身の零落れしに恥ぢてや這入りかねつゝ、裏手の水口へ廻り、思案をなして歎息の餘り、其所に寢て居たる班犬に、何かよまひごとをならべ居たる折しも、たらふく屋の主人太利右衛門は、家内の見廻り、いざやねまらんと、勝手の口まで來し處、誰やらん、はなしの聲の聞えけるゆゑ、不審をなしつゝ雪洞出してよく〳〵見るに、夜日にて能くは判らねど、絶えて久しき奈久四郎に能く似たるゆゑ、それかあらぬかと聲をかくるに、奈久四郎に相違なけ

れば、いたく驚きけるが、何か樣子のある事ならんと、まづ急ぎ呼入れ、いと懇に待遇しける。

八段

其時太利右衛門の妻おためも出來り、何か愛想をいひつゝ、當時の樣子を聞かれ、奈久四郎はさすがに面目なく、暫時さし俯向いて居たりしが、かくては果てじと思切つて、豫ておてこの教の通り、母の大病ゆゑ無心の由をのべ、「さすれば、私の首も繋ります」とは、前後揃はぬ口上ゆゑ、太利右衛門は合點ゆかずと、猶も彼是うら問へば、奈久四郎は挨拶に困り、その實を打明け、おてこを離緣のよしを語りければ、太利右衛門暫く考へ居たりしが、心中大に悅び、さらばとて、こゝろよくも請合ひ、傍なる小簞笥より、ぞく〳〵と二十兩取出し、外に十兩は、母への土產にせよかしとは、さすがに大家の旦那風。奈久四郎は何にも言はずさし俯向いて居たりしが、やう〳〵の事かの金を押戴き、夜も早次第にふけ渡るゆゑ、その夜はいとあわたゞしくも歸りける。然るにおてこはまだ寢もやらず、目ぼしきものは何くれとなく取集め、一風呂敷となし居たるが、奈久四郎の、いとほこりがにも、かの二十兩を渡せば、たちまち滿面に笑を含みつゝ、「それでもお前男なり、能くもこの金借りてお出だ。私もやう〳〵支度出來たり、ちと夜は更けたれど、善は急げ、これから直樣お暇せん」と、かの風呂敷包をしつかりと背負ひ、出でて行くにぞ、奈久四郎は、今更手に持ちし物を拐取られし思にて、茫然として居たりしが、さりとてこの夜中何所へ行くやと、後を追うて出でて見るに、豫て合圖やしたりけん、何所よりか俱梨迦羅の吉五郎出來り、彼の包を請取り、ふたり手に手を取交し、何所をさしてや走行くを、奈久四郎は能くも認めて、呆果てて居たりしが、是非もなければわが家へ歸り、溜息つきて居たりける。この先吉五郎は間もなく召捕られ、おてこはさま〴〵の難儀をなして、末つひに倒死をなしたるとなん。これ天罰の然らしむる業にして、いまだ其巨細を說きたけれど、丁數既に限あれば、このまゝにして止みつ。善には善の報あり、惡には惡の報あり、それらはわが言ふまでもなく、皆子供衆の知り給へども、猶も心掛け給へかしといふ。

九段

奈久四郎は、かゝる踏付の目に遭へど、素より意氣地なければ、たゞ心の內にてふづくむのみなりしが、それより五六日目にあたり、一人の足輕、家主に案內さして入來り、「これより、秩父の御屋敷へ急の御召なり。早く來れ」とさも權柄に陳べけるにぞ、奈久四郎は、是ぞ彼の謀判の事なるべしト思へば大に驚き、もじ〳〵なしてありけるを、彼の足輕は腹立ちて、罵り罵り引立つるにぞ、よんどころなく支度をなして、是が此世の名殘とおもへば、母おぬかにも餘

所ながら暇請なしつゝ、さも悲しげに涙を浮めつゝ、かの層所の羊にあらねども、力なげにも引かれゆき、秩父の御屋敷に至りけるが、いと薄暗き所に、暫く待たせられ、この上は如何なる憂目に逢ふ事やと、念佛稱へてその沙汰を待つに、暫くありて、此方へと茶坊主の案内にて、此度は最廣やかなる所にいたりしに、正面には御家老半澤六郎立出で、「これは〳〵黄金屋奈久四郎、いと久々にて逢ひました。其方の父とは兄弟同樣親しくなせしが、その中大に打絶えたり。尤も其方も豫て知つての通り、十萬兩の御借入は、其頃打續いて御知行所の遣作といひ、且其方の代となりては、形の如き亂暴にて、殿の御印を据られし證文を失ひ、剩へ番頭籾助、さま〴〵の虚言をかまへ、彼是もつて不都合の事のみなりし故、其儘一錢の御下金もなかりしが、此度其方方親類、たらふく屋太利右衛門の願といひ、且は其方の家内の者、殿へお直に、家再興の願もつともの事と思召すにより、此度五萬兩御下金となり、殘五萬兩は相應の利分を添へて、更めて御借入となり、新に證文渡す間、かならず粗末になさゞるやう致さるべし。且是までの利分滯りゆゑ、是亦あらためて、月々五十人扶持を下さる程に、有難く御請をなし、いつなんどきにても、金子を持運ぶべし」と言渡され、奈久四郎はあまりの嬉しさに腰さへ立たず、えゝとばかりに閉口なして居たりしが、やう〳〵の事にて顔を上げ、有難き由御請なして喜び勇みつゝ、其日は御暇申して歸りけるが、其方家内の者、殿へ直々御願を上げしとは、いかなる間違にやと、更に合點ゆかずも、夢路を辿る思にて、秩父の御屋敷を下りぬ。然るにたらふく屋太利右衛門は、奈久四郎のおてこを離緣なすと聞き、さらばとて、お出入屋敷にて日頃懇意になす事ゆゑ、半澤の許に至り、こがね屋の零落を訴へ、これかれ歎願なせしに、さいはひ今年は殊の外豐作にてある事ゆゑ、半澤こゝろよく請合ひ、委細を殿へ申上し處、豫て又内意により、お雪よりも内奏ありし事ゆゑ、殿にも不便に思召し、よきに計へとの事ゆゑ、奈久四郎を呼出し、かくは言渡せしなり。尤も其段豫て半澤方より内通のありければ、太利右衛門は、此日秩父の御門前に至り、奈久四郎の下りを待受け、その悦を述べけるに、奈久四郎は、唯有難涙にくれつゝも、厚く禮をのべて、天へも上る心地にて、急ぎわが家へ歸り、かくと母おぬかに語りけるにぞ、おぬかは呆るゝ事半時ばかり、是も唯有難涙にくれ居たり。然るにその夜、秩父の御屋敷より、彼の五萬兩の金を送りけるに、狹き家ゆゑ、置所もなきまでなれば、あたり近所の者は、つひに目なれぬ千兩箱を、山の如くに積上ぐるゆゑ、誰も來よ、彼も來よと、その見物あたかも山の如く、其時警固の役人、一人の男を高手小手に縛め連來り、「今この金を運ぶ途中にて、千兩箱をひとつ奪取り、逃去らんとするものあるゆゑ、急ぎ召捕り糾問せしに、

以前こがね屋の番頭たりしもみ助といひしもののよし。さすれば澤山に言分あらん。其方へ引渡し申すべし。勝手次第になすべし」とありければ、奈久四郎は打悅び、その罪を責めんとなせしを、母おぬかの、いろ〳〵と詫びけるゆゑ、其儘放ちやりければ、鼠の逃ぐるが如く、行方も知らずなりにける。かくて是より、又たらふく屋の世話にて、以前にませし店を開き、彼の五萬兩の金をもつて、また〳〵金貸を始めけるに、次第に利潤を得て、忽ち大の分限となりけるゆゑ、あらためて此度は、半澤六郎の媒となり、かのたらふく屋はまた里となり、お雪を送りければ、奈久四郎は始て不審晴れ、且その心の賢なるに恥ぢ、是よりはお雪をいと大切になし、夫婦いと中好く暮しけるゆゑ、子寶多く、行末長く榮えけるとなん。もつとも母のおぬかも、最健かになり、百年の壽命をたもちけるとかや。まことに目出たき事なるぞがし。めでたし〳〵〳〵。

當世男女之鏡　教草女房形氣　終

昭和二年九月十日印刷
昭和二年九月十三日發行

有朋堂文庫
嬢節用・教草女房形氣　（非賣品）

編輯者　東京府下大久保町西大久保二百三十六番地　塚本哲三

印刷兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷所　東京市神田區錦町三丁目九番地　有朋堂印刷所

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

不許複製